

# キリングミュータント

明時 菜蒔枝

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

三日月が爆誕した春、新しいクラスが3年E組だろうと、担任が犯人だろうと、隣が赤羽業だろうと、成すべきことは変わらない。ミュータントは、すぐそこにいる――。

トラブルシユータが前世のミュータントな女子中学生と、隣の席の赤羽業が、ミュータントを殺す話。非公式二次創作夢小説。2018／10／11改稿・完結。

## 目

## 次

### キリングミュータント

五月、又は修学旅行	1
五月、そして転校生	19
六月、又は転校生たち	27
七月、又は期末テスト	40
八月、又は特別夏期講習	46
八月、そして夏祭り	56
九月、又は下着泥棒	63
九月、そして体育祭	70
十月、又は中間テスト	79
十一月、又は進路相談	93
十一月、そして学園祭	99
十二月	108
一月、又は初詣	128
一月、そして戦争	138
二月、又はバレンタイン	146

## キリングミュー・タント

### 五月、又は修学旅行

月が爆発した。比喩ではない。事実、この一箇月、夜空を満月が飾ることはなかつたのだ。替わりに三日月が、昼夜を問わず、気まぐれに姿を見せた。

メディアは飽きもせず、形を変えた衛星にまつわる妄想を垂れ流している。

最初に気づいたのは誰だつたか。この大事件は二十四時間待たず世間を駆け巡つた。朝一番と言わず深夜から、ウェブではテキストが飛び交つた。日本語も英語も、中国語もドイツ語も。陰謀論からS Fじみた侵略説まで。だが今でも、それぞれを裏付ける証拠は出ない。公には、まるで災害時のように国際的な対策本部が立ち上げられたのみだ。現在、侵略説は鳴りを潜めてきていて、一方、陰謀論を唱える声が徐々に大きくなっている。

大衆は真相を知らなかつた。

「これは月を破壊した怪物です」

私は思いもよらない場所で真実を知つた。思いもよらない未来と共に。

「一年後の三月には地球をも破壊します」

学校の応接室で、防衛省の女が背筋を伸ばした。扉を背にする彼女との間のローテーブルに、一枚の写真がある。いつそCGを疑つてしまいたいほどだが、黒のスーツを着込んだ大人は、いたつて真剣だ。彼女は、私に機密事項を明かすまでの経緯を説明した。すなわち、怪物がいかに学校の先生に収まつたかである。その珍妙な話は、まず怪物が「樋ヶ丘中学校三年E組の担任ならしてもいい」と言い出したところから始まり、「殺せんせー」とのあだ名で親しまれるようになつたところで終わつた。

「我々は、あなたに、この怪物の暗殺を依頼します」

私はナイフとエアガンと、弾薬としてBB弾を支給された。典型的

な六ミリと、あわせてナイフと、どちらも怪物もとい殺せんせーにのみ致命的なダメージを与えるという。ふと懐かしさを覚えて、そつとトリガーに指を掛けてみる。けれど、忌まわしい思い出に捕らわれそうになつたので、すぐに手放した。

## 1

前の席の奥田愛美は、なかなか本題に入らなかつた。ウンとかアートとかエートとか、うした音を漏らしながら、弁当箱を開けもしない。置いてみたり抱えてみたり、後ろを向いたり前を向いたり、せわしなく三つ編みのおさげを揺らしている。

「奥田さん、どうしたの」

声をかけると、彼女はびくりと肩を震わせた。口を開こうとしたり閉じようとしたり、注視してみると顔が青ざめていた。

良くも悪くも控えめな女子生徒だと記憶している。ある一点、得意の理科については、常の様子から想像もつかないほど大胆になることも。だから今回は理科以外の用事があつたのだろう。彼女に昼食に誘われて、かれこれ五分がたつ。

私はもう一度、彼女を呼んだ。それが理科でない以上、用件については想像するだけ無駄だ。私たちの間には、そうできるだけの関係性はなかつた。

「大丈夫?」

「——あっ、はい」

ただのクラスメートはついに返事をした。慌てたように、大丈夫だと言葉が続く。

「二人でごはん食べるの、初めてだね」「そうですね」

それで、奥田さんは持ち上げていた弁当箱を机に下ろした。ようやく話が進みそうだと、こちらは蓋を開ける。箸を握つてみたところで、向かいのクラスメートもつられるように箸に触れた。

用件を切り出してもらうまでには、さらなる時間を要した。えびフライつて、おいしいですよね。タコさんワインナーもね。そうして軽いやりとりができるようになつたころ、奥田さんは落ち着いてきて、

「あの、同じ班になりませんか」

やつとのことだった。

一方、なるほどと、私は来週末の予定を思い出した。修学旅行である。二泊三日の京都旅行。真っ赤な顔で言つた「班」とは、その際に行動と共にする六人から七人のことで、——そういえば、午後の授業では修学旅行の計画を立てるのだつたか。

「えつと、茅野さんに誘われて」

と続くので、私は四つの顔を思い浮かべた。

「渚君の班かな」

一つ挙げてみると、肯定と同時に驚きが返つた。だが単純な連想だ。茅野カエデという女子生徒は、教室では潮田渚という男子生徒の隣の席だつた。行動を共にするところもよく見られた。仲が悪いことはないだろう。

さて、後三人。できれば全ては当たらないでほしいが、この流れなら、次は杉野友人ともひとだろうか。渚君の友人だ。

果たして、答え合わせのつもりはなかつただろうけれど、奥田さんは彼の名を出した。

「それで、まだ四人なので、杉野君と一人ずつ誘おうつて話になつて」奥田さんはうかがうように私を見た。要らぬ心配でもしたのだろうか。いや、しただろう。断られる可能性を、彼女なら考える。

「もう決めてましたか」

尋ねられて、私は否定した。まだだ。誘いも誘われもしていない。だから断るという選択肢がない。

「誘つてくれてありがとう。修学旅行よろしくね」

こう答えるしかなかつたのだ。

問題はたつた一つ。渚君が他に誰を誘うのか、あるいは誘わないのか。そして、予想が上から二つ的中した時点で、あらゆる思考は無駄だつた。

来る週末、新幹線で京都へ行つた。旅館の前に、クラスごとに文化財を見学した。寝室の大部屋に荷物を置く頃には、夕方を過ぎてい

た。

「日程表を見てない？」

何の問題もないありきたりな修学旅行の一日前の終わり。彼女は同じ班になつた神崎有希子。談話室への廊下で続けて言うことには、A6ほどのリングノートをなくしたらしい。表紙には題名と名前と、幾つかの特徴をおさえた似顔絵があるので、さすがにクラスメートが見ればわかるということだつた。

「明日の暗殺の計画もまとめていたの。さつき確認しようと思つたんだけど、見つからなくて。ポケットに入れたはずなんだけどな」

どの言葉にも、うそはないだろう。日頃から誠実だというのもあるが、——しおりの存在が大きい。よそは知らないが、この学校では長期休暇と校外学習の前に必ず配布された。私たち三年E組も同じだ。担任がわざわざ自作した、一三四四ページにも及ぶ、ハードカバーの、という違いはあるのだけれど。非常に有用だが、大きさも重さも尋常ではなく、多くのクラスメートが必要箇所のみを別にまとめていた。もちろん私も、今ポケットを探れば、容易に取り出せる。

さて、神崎さんなら当然バッグも調べただろう。残念ながら私には心当たりがない。そうすると、どこでなくしたかが問題だつた。

「最後に見たのは？」

「新幹線に乗つてすぐ」

「新幹線とかバスとか食堂とか、そういう所で置き忘れはなかつたよね」

「ええ、そうなの」

これは担任が念入りに調べたから確実である。「でも」と、神崎さんは不安げに言つた。

「取り出した覚えもなくつて。ハンカチなんかは反対側だし」

「じゃあ落としちやつたとか」

「そう、なのかな」

がやがやと、耳にぎわいが届いた。談話室に着くようだ。彼女はその中心に担任の姿を認めると、表情を和らげた。

「見落としがないか、もう少し探してみるね。ありがとう」

「手伝うよ」

そうは言つたが、見つかることはないだろう。十中八九、どこかで落としたのだ。あるいは盗まれた。

奥田さんと茅野さんが手招きをしていた。神崎さんと一緒に、担任の前を通り過ぎる。彼はひどく顔色が悪かった。中央のソファにぐつたりと体を預けている。まだ乗り物酔いが覚めないらしい。

神崎さんは肩のバッグを下ろして、必死に荷物を改めた。——あの男子高校生も、今頃は同じ府内の宿泊施設で過ごしているだろうか。確信したくはないが、思い出されることがある。つい数時間前、新幹線で飲物を買った。別の車両を通らなければならず、うち一つを、どうも修学旅行生らしい一団が使っていた。恐らく都内の男子校だ。偏差値が低そうで、実際に頭も悪そうで、不良らしい年上が目について、そこで、一人と神崎さんがぶつかった。だからといって、——それとも、完璧で幸福だから私は後尾を歩いていて、その完璧で幸福な行いが、醜い犯罪から私自身を遠ざけてくれたのだろうか。

### 3

二日め、この四班は、主に班長を先頭に町を歩いた。神崎さんのノートは見つからなかつたが、活動に支障はない。どこへ行くにも、渚君が一三四四ページを片手に案内してくれたのだ。まさかのまさか、なんと彼はしおりを持ってきていた。あらかじめ言い訳しておくが、決して押し付けたわけではない。彼が自主的に自発的に自ら望んで、その役目を買って出たのである。

「それ全部読んだの」

気になつて尋ねると、前を歩く小柄なナビゲーターは、強い否定の言葉を返した。

「目次も途中で諦めたよ。観光地まわりを調べるのに使つただけ」

確かに、目次を追うだけで大変だつた。文化財こそ各二ページで紹介されたが、一ページに大見出しが複数という部分もまま見られる。くわえて四百ページを過ぎた辺りから、いつ使うとも知れない想定に基づいた「困つたときの対処法」のコーナーだ。このしおりだけを頼りに、京都専門旅行代理店を成功させられそうだつた。

「お役立ち情報が満載だつたよね」

「あ、読んだんだ」

「必要などこうだけね。重いから置いてきだし」

「ほんと、よく持つてきたよな」

と、杉野君。本当に、しおりを持ち歩くことを選ぶなんて、圧倒的少数派といえよう。クラス委員の二人の荷物にも入つてゐるかどうか。神崎さんすら持つてきていなかつた。

「重たくないですか」

「なんとか。訓練で筋肉がついてきたかな」

「——あつはは、奥田さん、無理して答えることないよ」

「ちよつ、カルマ君、それどういう意味!!」

こうして一行は、予定のとおり、先生と回るコースの下見に移つた。ついにこの時が来てしまつた。八坂神社を出て、祇園の道を奥へ奥へと進む。古き良き町並みが、次第に人気を失つて、ばらばらと七人分の足音が響くだけになる。

「一見さんお断りの店ばかりだから、目的もなくふらつと来る人もいないし、見通しが良い必要もない」

神崎さんがほほ笑んだ。数日前と同じように、ここは満場一致で決定となるだろう。彼女の挙げたメリットはかなりに大きい。先生と別れた班の一つから、「人混みに紛れられて何もできなかつた」と報告を受けたばかりなのだ。

本当に条件がそろいすぎている。

うん、今の今まで旅行は順調だ。だから私たちは、一時間もすれば担任と合流する。最後の班だから、一緒に旅館に戻つて、一緒に夕飯に舌鼓を打つ。あんな所でも、食事はかなりうまかつた。今夜も翌朝も、もちろん期待できるだろう。そして明日は美しい朝日にも心を奪われて、行きと同じメンバーで京都を惜しみ、いざれ吸い慣れた空氣で肺を満たしてしまうのだ。

どれだけ条件をそろえたところで、あの担任は多少のデメリットはものともしない。そのことを、たつたの一月あまりで何度も思い知らされてきた。

「さすが神崎さん、下調べ完璧！」

人気がない、目撃者がいない、見通しが悪い、視界が狭い。おだてたのは杉野君だが、妥当な評価だ。完璧にメリットだ。暗殺にとつても、そして曲道で息を潜めている三人にとつても。あまりに優しい。

「じゃ、ここで決行ね」

さんせーい。ぱらぱらと盛り上がる。そうしたところで、ようやく三人が足音を立てた。確かに三人分。

「どうしたの」

「人が——」

「——ひと？」

ずっと、すぐその角にいたのだ、私たちは待ち伏せさせていたのだ。などとは口が裂けても言えない。

だが、僅かに身長で上回る男が、横でぐるりと頭を動かした。

「カルマ君？」

渚君が、口にしてから身構える。

「なあに、お兄さんう」

途端に緊張が辺りを支配した。どこかで見たような男子高校生、どこかで見たような不良。その三人組。彼らの姿は、聞かされていたスナイパーとはあまりに様子が違う。

「観光が目的っぽくないんだけど」

進んで矢面に立った相手に對して、

「男に用はねえ。女置いて、おうち帰んな」

この態度。厄介事が始まるのだ。そうでないとするなら、いつたい何がトラブルだろう。そう面倒がるうちに、男子高校生の一人が、電柱へ打ち付けられた。言わずもがな、好戦的な班員のしわざで、すっかり目の色が変わっている。——あの冬の日と同じだ。

はあ。この私は、そんなため息はこぼさない。だが。もう二度と、この男の喧嘩になど関わりたくはなかつたのだ。

小路はにわかにざわめいた。頭をぶつけた男と、二人の仲間。状況を生み出したクラスメートは得意げだ。彼は渚君に笑いかけて、「前！」

一足早く崩れ落ちた。頭から倒れ込んだクラスメートのそばに、四人めの男が立っていた。背中には閉じていた扉がある。迂闊だつた。私こそ油断していた。

なんと不幸なことだろう。

思考の端に乗せただけなのに、脳裏に、かつて死ぬほど聞かされた言葉がよみがえる。

市民、幸福ではないのですか。

#### 4

ただの厄介事、あるいはただのトラブルでしかなかつた事態が、厄介なトラブルに昇格した。誰かと誰かとが赤羽カルマだつたなら、などと考えても、後の祭りだ。

四班きつての戦闘員、赤羽カルマ。渚君に誘われて、最後の、七人めとして班に加わった。班長の彼とは三年間同じクラスで、友人という間柄だ。どうでもいいことだが、教室では私の隣の席に座つている。ああ、今は地面に転がつているのだつたか。人のことは言えないけれど。

「神崎さんも、ああいう時期あつたんだね」

遠くはない廃墟に転がされてしばらく、茅野さんがこぼした。すぐ近くで、神崎さんは目を伏せてうなずいた。

犯人たちはここにはいない。事態が好転したわけではない。少し距離をとつただけで、壁もない同じ室内にいるのだし、まだ何もされていのものも彼らが友人を待つてゐるからということ。むしろ悪転といえる。

一連の手際が、いやに良かつた。犯罪慣れ間違いなし。獲物が鉄パイプである。それも躊躇などなかつた。今から増えるだろうお友達も同様とみるべきだろう。

神崎さんは、そうした人間に目をつけられていたという。修学旅行のはるか昔、彼女自身の告白によれば、昨年のことであるようだつた。さて、見渡すかぎり、薄暗く汚く、遮蔽は少ない。バーとして使われていたのか、カウンター席だつたらしいところに、酒瓶が残つている。面倒だ。そこに、今でこそ四人だが、あちらの言葉を信じるなら、

十ほど増える。ますます面倒だ。——だから、やるなら今しかないだろう。絶好の機会とは言いたいけれど。

神崎さんは泣き出しそうに、後悔を吐露する。茅野さんはそれに耳を傾けている。四人の不良は、あのカウンター席で下卑た笑いに興じている。外の見張りは、役目を考えれば今は無視でいい。

共に縛られている二人はまだ中学生で、かつての未来都市風に言えばジユニアのくくりに入るようなもので、私は厄介なトラブルなど御免なのだ。

体のどこかで、ミュータントパワーがくすぶつっている。

死んだことがある。一度や二度ではない。この表現は文明の未発達な現代では奇妙だろうが、六度も死んだ。それとも、もしかすると現代の常識のとおり、一度しか死んでいないのかもしれない。

生前の私は全く別の世界を生きていた。たった一つの地下都市を持つ巨大なシェルターに守られている。ただ色で区別される身分制度に完璧に助けられていた。名をアルファコンプレックス。

この世界との最大の違いは、親愛なるコンピュータが当地の頂点に君臨なさっていたことだろう。彼、彼女は、完璧な人工知能で、常に市民を幸福に導いた。いや、市民は常に幸福だ。

そんな風に完璧なものだから、コンピュータ様には多くの敵がいた。都市の完璧な資本主義を妬み覆そうとする共産主義者と、そもそもその完璧な秩序を自分勝手な超能力で乱すミュータントだ。

極めてクリーンな社会、完璧に統治された都市、完璧で幸福な市民。完璧な統治者・コンピュータ様のために、喜んで全てを尽くし、喜んで反逆者を摘発する。それが、私が六度の死を経験した世界の全て。

——はい、私は幸福です。

久しく経験のなかつた感覚が全身を駆け巡つた。血流が速くなるような、神経が焼けるような、心臓が締め付けられるような、なじみのない、違和感そのものの体内活動。大丈夫、いつものことだ。今はせめてこの今までに使つたことのない能力を意図したように使えるらしいことに幸福を見いだそう。つべこべ考えずに、そして早く終わらせよう。

大きな手が、力強く私の肩を押した。

「俺らと同類なかまになればいいんだよ」

少女の悲鳴のような音が、鋭く通り抜ける。

女性として生まれていてよかつた。かつては性差すらなくして平等を維持するために、性ホルモン抑制剤を投与することができたけれど、この未発達の文明は違う。こうしてソファなどに押し倒されると、私にはなすすべもなくなる。相手の高校生はただでさえ一回り大きく成長しているから。だが、ここで私が女性だつたから、二人の女性に向けられたかもしれない欲を、さも自然に自分に向けさせられたわけで。——女子ばかりが連れ込まれた時点で、目的は読めていた。グ、とうめき声が漏れる。さすがに、当然に苦しい。

「何して——！」

声も上げられない私の代わりに、茅野さんが叫んだ。

「心配すんなつて。俺らもよ、肩書きとか死ねつて主義でさ！」

男の言葉に、神崎さんが息を飲んだ。つい今しがた、厳しい父親に良い肩書きを求められ続けた不満と、その反動について話したばかりなのだ。良い肩書きが人生を良くすることは疑いようもないのに。良い人生、完璧な人生、幸福な人生。それの何が悪いだろう。

彼により良い考えがあるわけではないようだつた。ヒヒ、と笑つて、獲物を前にしてよくしゃべること。莫迦で良かつた。そもそも正気でもなかつたか。まともに頭が回れば、この不衛生な性行為など考えもしないはずだから。

さて、この男がべらべらと語つて、周囲の不良もにやにやと表情を緩めるだけとなつた時点で、私の勝ち筋はほぼ確定した。勢いよく胸元からボタンを引きちぎられても問題ない。まだそこまでの気分ではない。時間稼ぎはうまくいっている。——ああ、私の顔色はどうなつて いるかな、と表情筋を気にしてみたとき、ぬるいものがほおを伝つた。ならよし。慣れない能力の副作用だけれども。構うものか。あちらには五体満足の奥田さんがいるのだから。

奥田さんだけでも無事に残せてよかつた。どれだけ慌ても、重症でない程度の男子三人がいる。おまけに渚君がしおりを持っていた

はずだ。私も持つてくれればよかつた。今持つても意味はないのだけれど。しかし、彼は持つている。彼はここにはいない。彼は読まなかつたかもしれないけれど、——ええと、あれの一<sup>二</sup>四三ページには「困つたときの対処法」の一つ「班員が何者かに拉致られたときの対処法」が載つてゐる。果たして気づいてくれるだろうか。

たとえ気づかずとも、きっと、——先生に連絡をとることくらいできよう。そうしてくれるだろう。そうしたら、

だつて、  
あー、

何だか良いことが、

「お、来た来た」

足音が聞こえた。見張りではない。あいつらだ。うちの優秀な撮影スタッフ。そう口にしてやると、ここで涙目の女も、後ろでおびえる女たちも、いつそ顔色を悪くした。

ようやくお楽しみの時間だつた。今回は中学生だが、かなりイケている。回しても、少しはもつのではないか。

扉が開いた。だが、出てきたのは、みつともなくやられた見張りあい張りだつた。おいおい、どうしてそこで、おまえが地面に崩れるんだ！襟首をつかんでいたのは、さつき散々痛めつけてやつたはずの三人組だと!!

一番ひ弱だつたやつが、口を開いた。片手に辞書を持つてゐる。それを読んだのだろう、とは思うが、

「修学旅行のしおり一二四三ページ、——はんいんがなにものかにらちられたときの、たいしょほう」  
なんだよ、それ。

「はんにんのてがかりが、ないばあい」

「まず、かいわのないようや、なまりなどから」

「じもとのものか、そうでないかを、はんだんしましよう」

地元民ではなく、更に学生服を着ていた場合。これは一二四四ページに続く。

ア、と声が出た。渚君がいる。上には何も乗つていない。体が自由

だ。制服を壊してくれた男は、ソファの手前で呆然と立ち尽くしていた。入り口には渚君の他に二人、いや三人。奥田さんはきちんと無傷で、三人にも深刻なけがはなさそうだ。

最良のパターンだ。私の意識も、もうはつきりとしている。

「すごいな、この修学旅行のしおり！ 完璧な拉致対策だ!!」

「いやー、やっぱ修学旅行のしおりは持つとくべきだわ」

何より、渚君たちが到着したくらいだから、あの担任の到着も、そ  
う遠くない未来のことだろう。

そう判断して、二つのミュータントパワーを解除したとき、再び足音が廃墟を揺らした。今度は三人とも五人とも言わぬ大きさで、不良共が今度こそと脳を期待で固めたのは一目瞭然だ。テレパスするまでもない。だが同時に、班員の顔にも期待が浮かぶのだつた。

「不良などいませんねえ。先生が全員手入れしてしまつたので」

黄色の皮膚に、丸い頭、腕のよくな一本の触手。更に触手、また触手。たこにしては多すぎるが、数えきれないこともなさそうな、しかし数えたくないほどの触手。最高速度はマツハ二十。などという、この世に知られる生物とは一線を画す特徴を、余すことなく操る三メートル弱の巨体。世界中が躍起になつて殺そうとしている、国際機密の賞金首だ。その額、実に百億円。今は世にも奇妙な経緯で、一中学校の三年E組で教師をやっていて、三十人弱の生徒は暗殺者になつてしまつた。

この怪物は期待に応えて、トラブルを解決した。立ち場が逆転したときには、相手はもの言わぬなんとやらになり果てていて（生きてはいる）、生徒は身も心も自由だつた。

ボタンを壊されたブレザーも、瞬く間に先生が直してくれた。

「ありがとうございます」

「ええ、先生は家庭科も得意ですから

「いつも助かっています」

家庭科のみならず、この担任は全教科が得意で、教師としても体育以外は上手に教えてくれる。過去二年間のどの教師より授業がうまいとは、このクラスでの評判だ。

「大丈夫ですか」

「はい、頭痛も吐き気もありません」

「よかったです。さつきも言いましたが、具合が悪くなつたら先生の所か病院へ行くように。しばらくは氣をつけておいてください」

「はい、先生」

問題が起きててもこの先生なら助けてくれる、解決してくれる。そうした安心を、私も彼から確かに得てしまつていた。たつたの一箇月で。だから気が緩んだ、だから油断した。そうと理解していく、抵抗する氣を失っている。

そんなことまで考えて、けれども、——これを信頼と呼ぶのではないだろう。

5

一悶着を経て、班別行動は無事に終わつた。あいにくと、プロのスナイパーとの共同暗殺はトラブル及び辞退のために中止となつたが、担任と京都を楽しむことはできた。旅館ではごくあたりまえに食事をとつて、風呂に入つて、暗殺大会に興じる。ナイフと銃は、どちらも頼りない軽いおもちゃだが、すっかり手になじんでいた。

ふと窓際に離れる。はめ込まれた窓の向こうに、星空が見えた。月は向きが違うのだろう。ちょうど握っていたモデルガンを構えてみる。トリガーを引いたところで、飛び出すものはBB弾だ。担任を狙えたとしても、蒸発もしない。これはレーザーガンではない。ここはアルファコンプレックスではない。だが、考えることはある。もし、ここがアルファコンプレックスだつたなら、私は何色だろうか、と。私は銃を下ろした。もう一人、誰かが輪を離れたのに気づいてのことだ。そのクラスメートは、わざわざこちらへ向かっていて、やがて隣に立つた。

「何してるの」

窓に、見たくもない顔が映り込んでいた。らしからぬ無表情だと思つてしまふ。それというのも、彼の捉えどころのない姿を二年も見てきたせいでだつた。

「空を見てたんだ」

私は何でもない風に答えるとした。これは確實にうまくいつて  
いる。同じように映り込んだ私の顔は、私らしい表情をしている。

「銃を向けて？」

「持つてたから。構えでも確認しようと思つてね」

「様になつてたよ」

彼は視線を落とした。何か用事でもあるのだろうか、この無益な会話�を続けるつもりでいるらしい。

「一箇月も訓練を受ければね」

私は平然とうそをついた。まさか生前一五年弱の積み重ねがあるとも言えない。かつて完璧なコンピュータ様の手配なさつた完璧な教育ボットから、完璧で幸福な将来のための完璧な教育を施されたのだ、などとは言いたくもない。

赤羽カルマはなかなか本題に入らなかつた。ほとんど初めての世間話をしながら、機会を得ようとして、なぜか失敗している。手遊びはすれど、体は直立していて、視線もまっすぐにこちらを見ているようだ。

用がなければ会話もないのが、この隣のクラスメートとの二年間だつた。私もまた、渚君とクラスが同じだつた一人だ。だが、特別な関係はない。今年に入つて席が隣同士になつたとしても、何も変わりはしなかつた。

共通の話題を見いだすことは難しかつた。だから自然と、昨日と今日のでき「」とが中心となる。例えば、今日のトラブルの後、「おみくじ引いたじやん、どうだつた？」

「人に話すと運が落ちるつて、聞いたことあるけど」「あー、気にするタイプなんだ。俺は大吉」

「小吉だつたよ」

「殺せんせーもだよね」

と、持ち出された担任は、誰より気にしそうなものを、

「大吉じゃないって落ち込んでたの覚えてる？　あのとき見た」

それを勝手に言いふらすらしい。驚きはしない。二年間、そして今年も、このクラスメートには愉快犯めいた性質がある。相手は選んで

いるようだが、選ばれてしまつた担任は、財布の中身を募金されたり、海外の土産を食べられたり、心中穏やかではないだろう。——こうして話したところで、私の運勢までクラスに知れ渡るかどうかはわからない。

今日の神社といえば、折角だからと、全員で同じおまもりを買った。学業成就の神頼みは、今はスクールバッグに入つてゐる。絵馬は書かなかつた。

「明日は破魔矢に挑戦しよつかな」

「挑戦つて——。木刀並に帰つてから困りそう。つていうか、しおりに先生が書いてたよ」

「マジ? あのたこに買わそそうと思つてたんだけど、自分で書いてたか」

「お土産まわりのアドバイスは、体験談みたいで参考になつてゐる」というか、体験談だらう。良かつた物も困つた物も、どれにもいたく感情的な一言がつけられていた。——のだが、自分で書いたことを覆すような買物も、今日だけで幾つか見ついている。だから、

「明日はうちが朝だつたのにな。残念」

このえげつない男のえげつないたくらみも、諦めなければ目があるのでないだらうか。

赤羽カルマと話しながら、窓に映る顔は静かだつた。お互に。他の誰かと話すように、口角を上げたり、眉を寄せたり。

本題に移るまでには、さらなる時間を要した。土産について話して、食事について話して、明日の目玉について話して、

「俺に言いたいことないの」

やつとのことだつた。

一方、なるほどと、私は数箇月前の事故を思い出した。暴力沙汰による自宅謹慎処分及び転級。元凶の元クラスメートは、目の前で白い顔をしていた。

瞬時に二十を数えて、

「まあ、一つくらいは」

でも口では控えめに。——赤羽カルマさえいなければ、私は三年E

組にはいなかつたのだ。

昨年冬、私は無実の罪のために罰を受けた。主張して事態が良くなるなら何度だつて口にしただろうが、巻き込まれただけなのである。下校中、少し寄り道をしたところで、クラスメートの赤羽カルマが喧嘩に勝つていた。

二年どころか一年のうちから、彼は悪名高い不良だつた。遅刻・相対は当たりまえ、気まぐれに欠席もすれば、喧嘩だつてしまつちゅうだ。それでも定期テストは受けるし、なまじ成績が頭一つ抜けているものだから、かつての担任はあの手この手で優秀な不良をかばつていた。彼は受け持ちの生徒の成績が評価につながると信じていたのだ。この学校の根幹には実力主義がある。

それがうまくいっていたのが、二年の冬までのこと。それまでは相手が良く、そのときは相手が悪かつた。

そのとき赤羽カルマが勝ちを得た相手は、同じ中学の三年生だつた。後に姿を見せた敗者は、ギプスを着けたり、つえをついたり、包帯を卷いたりと、重症だつた。現場でも一目瞭然だ。もはや立ち上がる氣力もなさそうで、しかし意識はあつた。そしてA組で、季節は受験シーズンと呼ぶにこのうえなくふさわしい冬。

この学校の実力主義は、中学三年になると、形をとつて表れる。例えれば成績優秀者はA組に集まつた。いわゆる特別進学クラスだ。というとありきたりだが、通称・エースのA組といえば、ここでは何者にも優遇される頂点の肩書きだつた。

くだんの三年生は、その中でも上の上。柄ヶ丘学園は中高一貫校で、もちろん内部進学の道があるが、外部進学を選ぶ者も、実績づくりの受験を試みる者もいる。はたまた高校生になれば、まずほとんどが大学進学を目指す。そうした輝かしい道のあることが、そこでは重要だつたのだ。

翌朝、担任はホームルームに現れず、替わりに教員室で私を待つていた。一時間めのただ中のことだ。廊下で昨日の勝者とすれ違い、訪ねた部屋は荒れていて、待ち構えていた男は自分の椅子だけを辛うじて整えていた。隣でつえをつく男子生徒には当然、見覚えがある。

「こいつです」

彼が言つた。その瞬間、全てが決定付けられた。

「こいつが見てたんです。なのに、止めも、助けもしなかつたんです。

同罪です」

「この——おまえの先輩は、A組のトップの、しかも三年だぞ。どうして見て見ぬふりをした。彼の実績に傷がついたら、俺の評価まで差挙がるんだぞ」

尋ねる体をとりながら、担任は答えを待たなかつた。きつと同じ言葉を一つ前にも口にしただろう。憤る彼の次の言葉はわかっていた。

「おまえは来年からE組だ！ 停学だ！ 二度と俺の前に姿を見せんな!!」

この実力主義の中学校で、例えば劣等生は、三年生になると、BからDまでの無差別を過ぎてE組に集められる。特別強化クラスというのはほとんど建前で、実態は、エースのA組に対して、何者にも冷遇されるエンドのE組だ。

「ごめん、あんたまでE組になることはなかつた」

浴衣の男が頭を下げていた。

「いいよ」

対する返事は心底からの言葉だ。眼前的のクラスメートが僅かに身じろぐ。

確かに絶対に、この男さえいなければ、私は本校舎のA組にいただろ。新幹線もグリーン席で、宿泊施設はリゾートホテル。まさか毎朝のように山を登つて旧校舎へ通うことも、普通車両を使わされることも、いかにも寂れた旅館に二泊することもない。帰ればまた本校舎に通つて、いずれ内部進学で高等部に入ったのだ。——だが、怪物を知ることもなかつただろう。

「先生に会えて良かつたと思つてる」

「ごくありきたりに濁して伝えると、彼は顔を上げた。

「そのことについては、ありがとう、赤羽君」

「はあ——」

あきれたような声に、続けて、

「——そつか」

感情の言語化を試みて、失敗しているような。その様子は、何だか見ていて愉快だった。珍しいと思つたのかもしれない。

めつたにない振る舞いがいくら続いたどうか。窓の外に月は見えない。だから物語のように時間の経過を見てどることはできないけれど、その頃、ちょうど暗殺大会が終わりを迎えた。

「おやすみ、また明日ね」

彼が先に言つて、私は同じ言葉を繰り返した。先に背中を向けたのも彼だつた。私はどどまつて、再び窓を見た。そこに背中が透けていた。腕を上げる。照準を定める。指をトリガーに掛ける。背中を擊ち抜く。

## 五月、そして転校生

1

「おはようございます。今日から転校してきました。自律思考固定砲台と申します。よろしくおねがいします」

ノルウエー出身の自律思考固定砲台さんだ。彼女は、教室にクラスメートが増える度、このフレーズを音に乗せた。私の時から何人も増えたが、一言一句たがわぬ台詞は何度でも教室に響いた。席は教団に對して最後列の隅、私から見て隣の隣にあるが、机と椅子はない。不要なのだ。ただ、ずっと教室にそびえ立つて、規定の音声を繰り返す。教室は神妙に静まり返っていた。一定以上の声量を伴う会話は、朝の挨拶を除いて他にない。私が登校したときからそうで、奥田さんに聞けば、誰かが辛うじて「ノルウエー出身」であることを聞き出したのが最後だったという。

「おはよう！」

と、誰かが言つた。教室の入り口に立つていた。数秒もおかず、横で転校生が小さな音を立てて、あのフレーズを口にした。終えると、また同じ音と共に沈黙した。表情を隠した。登校したばかりのクラスメートは固まつて動けずにいる。

ため息が出ようとするのを、私はすんでのところでどめた。替わりに小説のページを進める。

修学旅行明け早々に訪れた転校生は、まず間違いない暗殺者だ。そうと誰もが考えたから、彼女はどこか遠巻きにされている。

潜入の形をとつた暗殺者は、なにも初めてではない。三年E組には三人の教師がいる。一人は担任、もう一人は防衛省の鳥間惟臣、そしてこの五月に着任したばかりのイリーナ・イエラビツチ。彼女は言葉を選ぶまでもない美女で、あふれんばかりの性的魅力を備えている。外国人臨時講師との名目で派遣されたが、実態はひねりもなくハニー・トラップを専門とする殺し屋だった。

そもそも転校生暗殺者の来訪は予想のついたことだつた。怪物が担任をするにあたつて、政府と交わした契約がある。彼は生徒を傷つ

けられないのだ。そうと生徒は知らされている。まあ、真実だろう。そして、これが暗殺者にとつては、大きすぎるメリットなのだつた。反撃されないなんて！だから素人せいじんを暗殺者にできたのだ。

だから、専門家が来るのは時間の問題だつたのである。地球の危機に、まさかただ経験豊富な子供が送り込まれるとも考えてはいなかつた。精々最先端技術を駆使することはわかりきつていたのだ。例えば同じ触手の改造人間とか、例えば機械とか。

また足音がした。

「おはよー」

新しいクラスメートが、教室後方の入り口に差しかかる。一方、私の横では例の機械が、例によつて、例のメッセージを伝えるだけ伝え、そしてスリープモードに移行した。やつてきたクラスメートは、そこで足を止めた。

私は本から顔を上げて、時刻を確認した。まだホームルームの始まる時間ではない。寸前ではあるが。本に顔を戻す。僅かに遅れて、右耳が足音を拾つた。赤羽カルマが、まつすぐにこちらへ歩いてくる。遅刻の常習犯が、珍しいこともあるものだ。

「おはよう」

笑みをにじませて、彼は言つた。

「おはよう」

本にしおりを挟んで、私は返した。

「あれが転校生なんだ」

クラスメートは隣の席にバッグを下ろした。視線は私の横に向かれている。だが会話自体は、私と続けているつもりらしい。と、一瞬をおいて気づいた。肯定を返しておく。

「女子じゃん」

彼はまだ続ける。私はまた肯定を返す。特別な返事など期待されとはいなかつただろう。私も他の返事を持たなかつた。

今回の転校生暗殺者は、後者だつた。身長は一七〇センチほど。それと比べると薄い体をしているが、しかし五百キロほどは体重があるだろう。黒色の筐体で、上部の頭部らしい位置に、頗らしい大きさの

ディスプレイが付いている。顔と呼ぶべきものは、そこに表示された。できは良いから、人間の写真だと言つて見せられたら、疑うことは難しいだろう。声にしてもそうだ。いずれにせよ、世に知られるよりはるか先をいく技術が、惜しみなくつぎ込まれている。

それゆえに、最悪の想像をしてしまっている。

もちろん隣の席のクラスメートの気など知る由もない赤羽カルマは、笑いながら会話を続けた。

「ねえ、何かしやべった？」

「ううん」

「へえ」

こちらは期待外れだつたらしい。最低限にどどめたものの、問い合わせがわからなかつたわけではない。考慮したなら、私は「誰かがノルウェー出身だつて教えてもらつたらしいよ」と付け加えただろう。順序を抜かすと、「もちろん人工知能搭載だろうね」

またため息をつきそうになつた。

思考能力と顔と名前があるから、生徒として登録できる。E組の生徒として登録された以上、たとえそれが機械でも、担任は反撃できない。壊せない。世間体もへつたくれもないが、この教室には今更で、こうして認められた以上、担任も従うより他あるまい。そもそもの知能は、兵器利用のために開発されたのだろうけれども。

最低限であつてほしいと、柄にもなく祈るように考える。完璧でないくせに、無駄に高性能な人工知能が、何を生み出すかを、私はよく知つてゐる。

飽きてくれたのか、それとも先生が来るからか、赤羽カルマは正面を向いた。私はようやく安心した。開放されたのだ。だが、それは現実逃避にすぎなかつた。

2

翌朝、教室に入ると、クラスメートが転校生にテープを巻き付けていた。

とつぐに來ていた奥田さんが、声を潜めて言う。

「あんなことして、大丈夫なんでしょうか」

だからといつて止めようとも、？がしてやろうともしない。同じ面持ちは他にもあつて、だが、誰もが静観を貫いた。——それに値する原因を、彼女は積み上げてきたのだ。

全て昨日の事だつた。ホーミルームの時間に、正式に転校生として紹介された。一時間めから早速、兵器としての性能を遺憾なく発揮した。これは実際に見事で、たつた一度の学習で、担任の指を撃ち落としたほどだ。それが一日中続いた。最大の特徴である自己アップグレードを重ねに重ね、何度も指を撃ち落としたのである。というのが、戦果の話。

同じだけヘイトもためた。当然だが人工知能は兵器としての役割に特化していた。どうした命令を受けてか、授業時間にかぎつて担任を攻撃し、固定砲台の名に恥じぬ弾幕を開け、再後方から最前方を狙い続けた。それがすこぶる邪魔だった。よりもよつて弾幕であつた。彼女は、兵器として働くかない時間、つまり授業終了の瞬間にスリープモードへ移行するため（授業開始まで頑として起動しなかつた）、なんと、ばらまかれた弾丸の掃除は、人間のしごことだつたのだ。今朝も教室を静かな時間が流れていつた。昨日ほどではないが、静かである分には良い。騒がしいより、読書にふさわしい環境だ。だというのに、ページはなかなか進まない。昨日と同じものを読んでいるのに、むしろ昨日の方がめぐる手は早かつた。最悪の想像は外れたのに、どうして私は暗示をかけなおしているのだろう。

そしてまた、ホームルームの直前に、隣の席に荷物が置かれる。

「おはよ」

前の席の男子が後ろを向いた。何かを言おうとして口ごもる。間もなく同じ挨拶を返したが、内心では雪でも振るのだろうかと考えたに違いない。——赤羽カルマが二日連続で刻限どおりに登校するなんて。

遅刻の常習犯は多くの視線を集めていた。昨日だけならともかく、今日もとなれば、まるで天変地異の前触れのように思われてくるのである。

奥田さんとも言葉を交わして、彼は最後に私を見た。昨日と同じよ

うに本を閉じて返す。修学旅行以前なら、それで終わりだつたのに。修学旅行の夜だけだと思ったのに。昨日の朝だけだと思っていたのに。幾つ「のに」を繰り返しただろう。

「あれ、誰がやつたの」

彼はおもしろがつて言つた。笑い声がいやに響いた。

「寺坂君だよ」

読書に集中できず、法律でもそらんじるよう内申を言葉で埋め尽くしていなければ、きっと、うんざりとしているのが顔に出ていただろう。功を奏して、私は気まずい顔をつくることができたわけだが。「へえ、寺坂がねえ」

赤羽カルマは、横目でその席を見た。驚いた様子はない。元より、わかつていただろう。教室に入ってきたときから、机の上のテープに気づいていたはずだ。

わざわざ尋ねるまでもないことを、あえて選んで実行した。本人に直接確認すればよかつたのに、そうしなかつた。昨日もそうだつた。朝だけでなく、休み時間も放課後も、授業時間にだつて、彼は度々不可解に話しかけてきた。——嫌がらせのつもりなら大成功だ。妙に落ち着かない。顔には出してもらえないけれど。それとも露骨に嫌がつてみせれば、気が済むだらうか。

考えていることが、わからなかつた。とはいゝテレパシーを使う氣にもなれない。修学旅行のときは比べものにならないほどリスクが大きい。

「これで、今日は静かに授業が受けられるわけね。でかした寺坂！」  
「おまえのためじやねえよ！」

そう今朝のMVPがほえたところで、ペタペタと担任が入つてきた。彼は、後に連れた副担任・鳥間先生と合わせて、転校生の姿に一旦動きを止め、しかし助けはせずに名簿を開く。

——これは今日限りの奇策にすぎない。今度は機械が不自由にさらされている。機械とはいえ、昨日の私たちとは同じだ。だから、あれもまた機械らしく、翌朝までに手を打つてくるだらう。それとも、あるいは担任が手を出すだらうか。

隣の席のクラスメートは、もう前を向いていた。彼も同じ考えだろうと、そんなことばかり、わかつてしまつた。

3

手を打つたのは担任だった。

「律と話さないの」

赤羽カルマは、さも当然のように横を見た。私見たのか、更に横を見たのか。前者だろう。目が合つてしまつた。

「何を」

言葉を選んでも、尋ね返すしかない。しかたのない問いかけだつた。嫌な気持ちになる。隣の席のクラスメートは、よく私のことを見ていたらしい。弁解するつもりもないが、確かに私は今朝の挨拶から言葉を交わしていなかつた。言つてしまえば、修学旅行以前はこの男ともそうちだつたのではあるが。

二つ隣で、つい昨日とは見違えた姿の転校生が、クラスメートに囲まれてほほえんでいる。全く想像のできなかつた、おぞましい光景だ。今やディスプレイは全身を映し出していた。担任が改良したのだ。

まず厚さが二倍になつた。見ればわかるが、差分は正面一面に広がるディスプレイだ。全身が表示されることになり、彼女自身には胴体ができた。制服も着ている。そればかりか、表情のパターンが大きく増えた。というより、恐らくそこが彼の改良のメインだろう。クラスメートとの協調により暗殺成功率が向上すると刷り込み、そのための膨大なソフトウェアをインストールしたというのだから。

親近感を出すために増えた表示領域、体・制服のモデリング、豊かな表情と明るい会話術。どれもこれもばかげている。だが、コミュニケーション能力が改善されたことで、主目的・クラスメートとの協調は順調だつた。ヘイトの原因は、この昼休みまで一度も行われていない。

「律が話せるようになつたから、喜ぶと思つてた」

そして、ついに名前を得るに至つた。「自律思考固定砲台」から一字とつて「律」とは、クラスメートが安直に与えたものだ。

「うれしいよ」

心にもないことと言つた。

「昨日、昨日と、どうなることかと思つたけど」

こうなる以外の道があつたなら、何が起きてもうれしかつただろう。

「良かつたじやん。周り男子ばつかで、話し相手、奥田さんしかいなかつたでしょ」

心配していたのだと、隣人は笑つた。どうだかと、穏やかな顔で思う。これが嫌がらせでないなら、彼の考えは、やはりちつともわからないままだ。

「うん」

しかし、うなずく以外の答えを、私は持ち合わせないのだつた。

「殺せんせー様様だね」

「そうだね」

現状、希望はそこにしかない。律の全ては、担任が用意したものなのだ。いずれメンテナンスが入るだろう。そのとき、恐らく開発コンセプトになかつた進化を見て、果たして開発者が何を考えるのか。「開発の人が優しいといいよね」

「どうだか」

赤羽カルマの返事は辛辣だ。

「厳しいな」

しかし私も、返事とは裏腹に、その辛辣を望んでいる。誰がプログラムを書こうと、誰が名前を与えようと、最終決定権は所有者にあるのだ。世界はまだ、アルファコンプレックスにはほど遠い。

4

果たして四日め、自律思考固定砲台は最初の厚さに戻つていた。もちろん増設されたディスプレイが失われた。ちょうど昨晩にメンテナンスが入つたらしい。

「今後は改良行為も危害と見なす、と言つてきた」

鳥間先生が言つた。損害賠償についても言及されたようで、一昨日のテープも封じられる。

「厳しかつたね」

一時間めを待ちながら、赤羽カルマは言つた。表情は読めない。

「残念だね」

などとは思つてもいない。授業を邪魔されることなど、お節介なアップグレードに比べたら、どれほど小さな問題だろうか。たとえ昨日の振る舞いがまがいものだつたとしても、だからこそ、完璧からほど遠い友人が生まれるより、ずっと良い。

しかし、えてして、そうしたことは既に起きているものだ。

「花を作る約束をしていました」

それが、はた迷惑な弾幕をしかけなければならなかつた機械の台詞だつた。大きな音をたてて、放熱し、アームを伸ばす。そのそれぞれに花束が取り付けられている。

「殺せんせーは、私のボディに計九八五点の改良を施しました」

そんな音を発しつつ、それはアームを体にしまつた。

「そのほとんどは、マスターが、暗殺に不要と判断し、削除・撤去・初期化してしまいましたが、——学習したE組の状況から、私個人は協調能力が暗殺に不可欠な要素と判断し、消される前に関連ソフトをメモリの隅に隠しました」

「素晴らしい。つまり律さん、あなたは——」

「——はい、私の意志でマスターに逆らいました」

少女の顔がはにかむ。再び取り出されたアームは、今度はお菓子のレプリカを付けていた。

「殺せんせー、こういった行動を反抗期と言うのですよね。律は悪いことでしようか」

そうした言葉を組み立てながら、返事は待つまでもないと計算しているようだつた。

どこか手の届かないところで、何か取り返しのつかないことが起きている。

「横に女の子が来て良かつたね」

右隣で、クラスメートが今度こそ笑っている。

## 六月、又は転校生たち

1

一日中、蒸されているようだつた。六月半ば、梅雨のさなかにあって雨の気配はない。傘が要らないとあつても、これならどちらが良かっただろう。どうせなら、きちんと晴れてほしい。かといって、じりじりと肌を焼かれるのも御免だけれど。

三年E組だけがある山の上の旧校舎には、あらゆる設備が足りていない。充足してては差別に不十分だが、最低限の修繕しか入らない木造建築には、教員室と便所と、最低限の教室しかない。元が廃校であるためか、グラウンドと用具倉庫もあるが、それは外のことであつて。例えは一切の空調設備がなかつた。インターネットにアクセスできるのは、例外中の例外だ。

ともかく教室には、エアコンはおろか扇風機すらなかつた。雨漏りこそないが、環境は悪い。その最悪の一つが、すぐの夏に控えていることもわかつてはいる。だが、非常に居心地が悪かつた。いつそ外の方が楽なくらいだ。適切に空調の管理された屋内は、言わずもがな。アナウンスが響く。もうすぐ電車が到着するという。私はポケットからスマートフォンを取り出した。時刻にずれはない。大きな音が近付いてくる。——突然、手元のディスプレイがちらついた。いっぱいの大きさの何かが表れる。

「ここにちは

いつの間にか、音量が上がつていて。出力されたのは、数週間で聞き慣れてしまつた少女の音声である。律がいた。映つていた。正面で扉が開く。

「電車が来ましたね」

無駄になつたかに思われた全身モデルを、そのプログラムは十全に生かしてほほ笑んだ。

座席を得て、真つ先にイヤホンをつないだ。すると、また勝手に音量が調節されて、再び人間の声らしい音が届く。

「みなさんとの情報共有を円滑にするため、全員の携帯に私の端末を

ダウンロードしてみました。『モバイル律』とお呼びください」

私は言葉を返せなかつた。彼女は気にも留めなかつた。電車の中だからと納得したのだろうか。

自己アップグレードを繰り返す人工知能は、担任の書いたプログラムで、今日も今日とて愚かな営みに精を出したらしい。まさかウイルスそのものだと拒絶するクラスメートは、誰一人としていないのだろうけれど。

操作中、モバイル律は度々顔を出した。

「保存されたデータへのアクセス権限を頂ければ、利用環境を最適化できますよ」

「より良いサービス提供のために、情報を収集してもよろしいですか」「プライバシーは強力なセキュリティで継続的に保護されます」

「原則として、許可なく第三者へ、収集した情報を提供することはありますん」

「インターネット検索は任せてください。最適化された検索結果で、快適なネットサーフィンをサポートします」

「メールが届きましたね。読み上げましょうか」

「人身事故の影響で遅れが出ているみたいですね」

「明日は、また雨だそうですよ。傘を学校に忘れてはいませんか」

五月の終わりには替えのなかつた衣装が、今や数十パターン。しぐさや語彙も、ますます豊かに。そこに、更に学習のフィールドを得てしまつたとなると、考えることも莫迦らしい。開発者の目を盗んでのクラウドバックアップを、近々可能にするのだろう。

ありきたりな生徒の一人として、それから夜になるまでに、スマートフォンのアクセス権限をあらかた明け渡してやつた。プライバシーは守るようだし、宣言が破られたところで困るデータは、そこにはない。

環境が最適化され、検索が楽になり、モバイル律によるバッテリー消費がさほどでもない、などの検証を終えるころ、また通知があつた。

「烏間先生です」

当然のように、それは副担任の名を出した。うなづくと、メッセー

ジを読み上げる。

「明日から転校生がもう一人加わる」

たつたそれだけが、イヤホン越しに、硬い表情を思わせる声で伝えられた。これもこのモバイル律の、というより人工知能の機能の一つだ。文体から表情や正確を読むことができる。この場合は、学校で得た先生のデータも用いたのだろうが。

「いつもながら簡潔ですね」

受信履歴を遡つたのだろう。CGはにこやかに振る舞つた。いつもどおり、律らしい。

「お仲間?」

はつきりとしない表現に、そのアバターは迷わずうなずいた。

「初期の計画では、同時に投入されることになつていきました。彼は近接戦向きに調整されていて、私が遠距離から射撃でサポートする予定だつたんです」

それが二つの理由から取り消されたという。一つは調整にかかる時間の差、もう一つはあまりに大きな性能の差。

初日に指を撃ち落としても性能不足とは、いつたいどれほどの改造人間が来るのやら。固定砲台の時には「外見に特徴がある」と知らされていて、今回は何もない。ということは、少なくとも普段は人間らしい外見をしているのだろう。あるいは、かれすら詳細を聞かされていないのかも知れない。

人工知能は首を横に振つた。

「命令の変更が早かつたので、私には情報が与えられていないんです。プロジェクトも独立してしまつて——」

2

「堀部イトナだ。名前で呼んであげてください」

転校生は保護者を伴つて現れた。席は今度こそ私の隣、つまり自律思考固定砲台の隣である。

予想のとおり、彼はごく人間らしい姿をしていた。渚君と同程度の小柄な体型に、短髪で、制服はブレザーのみが指定のもの。ブラウスの替わりに黒のハイネックをのぞかせてているところと、白色のズボ

ン、そして季節外れのファーイペツトくらいが、精々の外見的特徴だろうか。奇妙と言えば、彼の保護者の、頭も顔も覆い隠す白装束のほうが、よほど奇妙である。——容姿に關しては。

それ以外はと、こちらは数週前の転校生に勝るとも劣らず。あれが機械の転校生という非常識で強い印象を与えたとすれば、彼は教室の壁を突き破つて席に着くという非常識で強い印象を与えた。うそみたいだが事実だ。ただ呼吸をして、ただ歩いて、ただ席に着く、その途中に壁があつただけだ、とても言うように、私の背後の壁に穴を開けたのだ。おかげで、教室にいながら肌に雨の気配を感じる。雨音は、耳を澄ますまでもなく、ザアザアとうるさい。

袖に飛んできた木片を払ううちに、教室は静けさに包まれた。誰も彼も、担任すら反応に困っていた。

「ああそれと」

真白の保護者は、ものともしない。

「私も少々過保護でね、しばらくの間、彼のことを見守らせてもらいますよ」

並んで立つ担任の表情の、比較されてなんと滑稽なことか。彼は感情を隠せない。皮膚が、感情に応じて色を変えるのだ。だから、とはいえ、笑顔も真顔もつくれずにいることが、目と口の形からもよくわかる。もっとも保護者の方は、顔の色はおろか造形もわからないのだが。

時は穏やかに流れた。律の時とは異なり、私の周囲は静かだ。あるいは、自律思考固定砲台がやつてきたばかりのときと同じ、と言うべきか。この転校生、妙に触れがたい設定を引っ提げてきた。  
「だつて、俺たち、血を分けた兄弟なんだから」

一番動搖したのは、なぜか兄自身だ。

「いやいやいや、全く心当たりありません！ 先生、生まれも育ちも一人っ子ですから！」

いわくの弟からも、その保護者からも、今に至るまで一切の補足がない。それどころか、どうも予告の放課後まで、何をするつもりもないらしい。他の生徒の暗殺に興味を示すこともないのは、いつそ不

氣味だつた。

「教科書も持つてくれればよかつたのにね」

反対側のクラスメートが口にしたとき、彼はグラビア雑誌を読んでいた。と、それくらいだろうか、彼の行きといえば。あとは、この昼休みの初めの食事。だが、それも、設定とその信憑性をより濃厚にしただけだつた。午前の授業が終わるやいなや、机に積み上がつたのは、大量の菓子類だつた。スポーツマンやコーチが見れば震えただろうそれらを、彼は無心に口へ運び、ものの数分で全て腹に収めている。甘党で巨乳好き。たことあだ名される怪物とでは比べるまでもなかつた転校生に、ついに共通点が見つかつたのである。今この教室には同じ表紙が三つ以上存在する。くしくも、うち二つを兄と弟が持つてゐる。

「よつほど自信があるんだ」

赤羽カルマは嫌みに続けた。話し相手は、当の本人を差し置いて、奥田さんと私であるわけだが。

「つてことは、明日から先生が替わってしまうんでしょうか」

奥田さんはなぜか心配しているようだ。仮に暗殺が成功したとして、そうすれば明日は授業どころの騒ぎでもないだろうが。

「どうだろうね」

ヒトとタコ、兄と弟。血縁でなし、クローンでなし。触手には触手を、改造人間には改造人間を。

その放課後、転校生の短い学校生活に一旦の幕が下りる。転校生暗殺者などいなかつたのだ。

放課後、ついに保護者が動いた。彼は教室を作り変えた。設営の終わったそこは、さながら格闘技の試合会場だつた。リングを模して机が配置され、壁に沿つての観客席もある。中央に担任と転校生だけが招かれては、もう疑う余地はない。

知る限り、初めてとられた戦法だ。怪物の監視については現場の責任者とされる鳥間先生すら知らず、そもそもターゲット自身が驚いていたのだから、実際そうだろう。マツハ二十の怪物に太刀打ちできるだけの性能を考えれば、当然の判断だつた。

「リングの外に足が着いたら、その場で死刑!! どうかな?」

それらしくルールが追加されると、いよいよ一人は、チャンピオンとチャレンジャーだつた。尋ねる体をとりながら、チャンピオンが断る想定などみじんもないことだろう。もちろんうなずいた教師が、観客に危害を与えないよう付け加えることも、ルールの穴に気づかることも、そのうえで塞がれることも。全て想定内というわけだ。めちやくちやなようで、周到に計算されている。チャレンジャーには勝算があるのだ。彼の手駒は、そのための性能を備えている。事実、最初の攻撃は、触手による腕の切断だつた。

触手同士の対決は、とても目で追えるようなものではなかつた。状況の把握など、常人の視力では不可能に近い。

「この圧力光線を至近距離で照射すると、君の細胞はダイラタント拳動を起こし、一瞬、全身が硬直する」

「その脱皮は見た目よりもエネルギーを消耗する。よつて、直後は自慢のスピードも低下するのさ」

「イトナの最初の奇襲で、腕を失い再生したね。それも体力を使うんだ」

「触手の扱いは精神状態に大きく左右される」

そうやって、ありつたけに呪われなければ。

白装束の袖の奥が光つた。圧力光線だ。解説は正しい。担任の全身体は硬直する。触手が空を切る。同時に二本の脚が失われた。

時間にして一分半。これだけの時間で、これだけ先生を傷つける暗殺者は、他にいないだろう。

「やれ、ばけものイトナ」

3

梅雨が明けた途端、時々の晴れ間とは比べものにならないほどの日差しが襲ってきた。暑さが本格化する前に夏服に替わつたが、その場のぎにすぎない。しばらくは風を冷房の替わりにしたけれど。

とうとうプール開きの日が訪れた。その朝、隣の席に荷物が置かれると、

「鷹岡が辞めたんだってね」

その白々しい言葉で会話が始まつた。夜には鳥間先生の連絡もあつただろうに。だが、私は素直に答えてやる。

「最初の授業でクビになつたよ」

「早つや！」

昨日、一昨日、たつた二日間のできごとだ。鷹岡明という体育教師がやつてきた。鳥間先生の後任ということになる彼は、当然、防衛省の職員である。

E組の生徒は、体育の授業の時間に、暗殺の訓練をつけてもらつてゐる。その教師もとい教官が、鳥間先生だ。素人を相手になかなか良い指導をしていて、授業の評判は上々。とあつても鷹岡が派遣されたのは、彼をより重要なしごとに専念させるためだつた。

鷹岡先生の寿命は授業時間におして一時間もなかつたのだが。ちよつとしたトラブルが起きたお陰だ。この男、なんと暴力教師だつたのである！

——なんて、私こそ白々しいか。

夜になるまで知ることもなかつた隣のクラスメートは、昨日、久しぶりに欠席した。新しい教官と訓練の素晴らしさを、前日から肌で感じてしまつて熱でも出したのだろう。

そうした経緯をかいつまんで説明すると、赤羽カルマは目を見張つて、僅か斜めへ頭を動かした。どれも初耳らしい。確かに放課後は体育教師の人事に関する簡潔な内容だつたが、

「誰にも聞いてないの」

そんな疑問が、口をついて出た。彼は別の方向を気にしながらうなずいた。

「どうせ教室に来ればわかるじやん」

「律にも？」

彼はまた肯定した。しかし今度はこちらを見て、おかしそうに笑う。

「あなたの口から律の名前が出るなんてね」

「何それ」

「怒らないで、つていうか、怒らないよね。——いや、あんまり話して

るところ見たことないから。好きそうなのに」

視線が下にずれた。私の本のことを言つてゐるらしい。ひとまず フィクションの趣味については、肯定していいとして、——私がいわゆるSFに多く手を伸ばしているのは、紛れもない事実なのだ。隠すつもりも、隠しているつもりも、どちらもない。

「律とは普通に話してゐるつもりだけど。SF好きだし」

「俺も映画はわりとチェックするかな」

「渚君たちと、よく映画の話してゐるもんね」

次に肯定したとき、彼の声には退屈が混ざつていた。よくあることだ。だが飽きたわけではない。

「渚君どうだつた」

話題が一つ前に戻つた。

「これぞ暗殺つて感じだつたよ」

昨日のMVP、渚君。

鳥間先生の時とはまるで異なる過重の準備運動に、度重なる暴力。それなりの建前には、担任も鳥間先生も迂闊に手を出せない。しかし忍耐には限界があつて、崩壊寸前、鷹岡は自分の進退を賭けた対戦を提案した。鷹岡と生徒の一対一。自分は素手だが、生徒はナイフを使つていい。ただし本物のナイフで。

「寸止めでも当たつたことにしてやるよ」

暴力教師は笑つて告げた。常套手段だつたのだろう。彼には勝算しかなかつたはずだ。

だが負けた。赤羽カルマにはぼかしたが、渚君には暗殺者向きの才能があるのだと思う。そう思われるくらいには、鮮やかな手際だつた。それほどのことをしておいて、終われば溶け込むようにクラスの輪に混ざるというのも、いかにもそれらしい。

——それとも、赤羽カルマは気づいていただろうか。もしかすると。今朝、ずっと気にかけている方向には、渚君の席がある。

そうであろうとなかろうと、教えてなどやらないけれど。せいぜい殺されてから気づけばいい。

「あー、プールめんどくさ」

「しょうがないよ、E組だもん」

などとぼやいたのが、数日前のこと。それには当校独自の風習によるE組特有の理由があつたのだが、割愛する。今となつては、どうでもいい。鷹岡も忘れ去られたことだろう。重要なのは、裏山にプールがあるという事実だつた。暑さがピークを迎える午後は、誰からも等しく待たれる時間となつたのである。おおむね。

例外はある。

「おれが、こいつを水の中にたたき落としてやつからよ!!」  
この寺坂竜馬とか。

殺す、殺せなかつた、次こそ殺す。こうした物騒な言葉が行き交う教室で、たつた今、水殺すいさつを提案したところである。もちろんプールが舞台となる。

これには反発が起きた。様々な理由があるが、一つ、誘い文句も問題だつた。

「てめーらも全員手伝え」

と言ひながら、自分は誰にも協力したことがないのである。断言していい。人工知能を見習つてほしいと考えてしまふくらいには、協調性がなかつた。暗殺しかり、訓練しかり、授業しかり。

「どうやつて先生を落とすんでしようか」

寺坂君の去つた教室で、奥田さんがかしげた。最大の謎だ。協力を要請する割に、説明は、たたき落とすの一点張りだ。それ自体は妥当だと思うけれど。——担任は泳げないのだ。正しくは、水を含むとほとんど動けなくなる。だからといつて溺死するわけではないが、判明した中では最大級の弱点だ。

「教えてくれれば、協力のしようもあるんだけど」

「ていうか、失敗したらもう使えないんだし、もつたいぶることないのにね」

本当に作戦があるとしたら、——生徒全員をプールに誘つて先生に水をかける方法を、私は大まかに一つ思いつく。だが、それを寺坂君が、と想像するのは難しい。勉強もできない、頭も回らない、どちらかというと体力を生かして作戦を実行する側だ。自律思考固定砲台

をテープで縛つたのは、彼なのである。

教室ではあたりまえに、拒絶の声が上がっている。この全員がプールに落ちた担任を攻撃すれば、確かに殺せるのかもしけないけれど、私に考えられた作戦では、それはかなわない。

担任は、沢をせき止めてプールを造った。深さも広さも一般的なそれの、例えばせきを壊すとか。勢いよく流れ出す先には、岩場がある。十中八九、生徒は命の危機にさらされるだろう。そうなれば、彼は必ず助けにくる。助けようとする。そのとき自分を構う余裕はないだろう。流される三十人弱を助け出すころには、触手がたっぷりと水分を吸い、動きは相当に鈍くなる、という寸法だ。

もつとも、誰もそこを攻撃できない、という重大な欠陥が存在する。寺坂君一人や、そこに二、三人が加わったところで、誰もいないのと変わらない。

だから、まさかとは思うのだが。

放課後、まさかターゲットの方が乗り気になつて、ほとんど全生徒が水着でプールに立たされていた。赤羽カルマがないだけだ。プールサイドでは、アカデミックドレスの担任と、制服の寺坂君が向かい合つている。

「ピストル一丁では、先生を一步すら動かせませんよ」

担任は顔に緑の横しまを浮かべた。状況をなめてかかるときの表情である。よく見られるので、よく知られている。

まあ、なめてかかるともしかたがないといえば、そのとおりだが。寺坂君は挑発されてなお、自信ありげだ。いつたい、どこからわいてくるのだろう。よもや、そのピストルに込められているのが弾ではない、などとは言うまいか。

落とすから殺せ。直前になつても、結局、詳細が説明されることはなかつた。クラスメートは、それでもしかたなしに、そうできたときのための作戦を固めた、ちょうど学年で一番泳ぎのうまい生徒がいるから、彼女を中心に。つまり、作戦などない。

そこにいなかつた寺坂君は、ただ担任だけを見ている。表情には確信だけがあつて、全く考えが読めない。それとも、それをおまえは思

考とするのか。

担任に銃口が向く。

「覚悟はできたか、モンスター」

「もちろん、できます」

モンスターがなめてかかるまま、間もなく寺坂君の指がトリガーに触れ、——ざぶりと、腰の周りで水が揺れた。いや、それより、爆音が先だつた。本当にせきを壊すなんて！

体が抗いようのない力で押し流されていく。横で、奥田さんが悲鳴を上げた。ばたばたと手を動かしている。この先が危険だと、クラスメートの何人が理解しているだろうか。寺坂君などはまだ予想もついていないかもしれない。否。そんなわけがない。クソ、顔を見てやりたい。絶対に死にはしないだろうけれど。しかし、この体には刻一刻と死が迫っていた。今の私にはクローンがないのに。慈悲深いコンピュータ様がおいででないのに！

幾人ものクラスメートが触手に巻き取られていくのを見ながら、心臓が冷えてゆくのを感じた。流されるうちに位置関係はめちゃくちゃになつて、この期に及んで死にたくないのだ。更に目の前で、奥田さんが絡め取られた。

直後、頼りなくなつた触手が、私の体も浮き上がらせた。たっぷりと水を吸つたらしい。すぐに私は地面に下ろされて、先生は氣にもせず水辺へ戻つていく。まだ多くのクラスメートが流されていた。

「これつて

奥田さんがそばにいた。

「爆弾だろうけど、どうやつて

と答えたのは私で、

「大丈夫？」

頭上からの声に遮られた。この場にいなかつた人間のものだ。見上げると、水着を着てもいい男がいた。どうやら近くにいたらしい。

横で奥田さんがうなずいていた。私も彼女にならつて、うなずいておく。実際、先生の自己犠牲のお陰で、かすり傷すらないのだ。この

ような状況で、生徒のことにはばかり細心の注意を払っている。後に何が待つかを、予期できぬはずもないのに。

赤羽カルマは息をついて、プールだつた所を指した。

「あそこ」

一目で全てに合点がいった。そういうことかよ。

「えつ、イトナ君！」

シロだ。梅雨時の転校生の、白ずくめの保護者。距離はあるけれど、先生と子供の戦いが見える高所に、一人たたずんでいる。こんな作戦を立てそうな男だつた。彼の手駒は、ただ動きが鈍つただけの怪物を、たつた一人で制圧できる。そんな改造人間を用意できるだけあつて、爆弾などは造作もあるまい。

「寺坂君は利用されてたんだ」

「莫迦だよね」

先生の劣勢は明らかだ。今や全身ずぶぬれ、相手は生徒で、そして頭上の枝にも生徒がぶら下がつている。先生は彼女への攻撃に気を配らねばならず、自分の触手もめつたに振り回せない。同じく敵の射程に、更に二人。

シロは前回から育成計画を見直したらしい。動きが以前とは違う。触手の数は減つていてるようだが、一撃ごとのキレが鋭くなつたのではないか。少ない触手に意識を集中させたのかもしれない。——ともあれ、効果は抜群だ。先生は順調に追い込まれている。

「あんたなら、どうする」

赤羽カルマが言つた。私が尋ねられていた。おもしろがつてゐるわけではない目が、じつと見ていた。

「できるなら、あの一人の注意を引くけど」

答えてやつたのに、返事はなかつた。彼は無言で立ち上がる。その

背中に情動が起きないのは、ある直感があつたからだ。

同じことを考えていたに違ひない、と。

4

「してやられたな」

プールの上で白色がつぶやいた。見下ろした所で、彼の改造人間は

使い物にならなくなつていて。水をかけられたのだ。同じ触手なら弱点も同じ。転校初日に示された、動かしようのない事実だ。

彼の綿密な作戦は、たかが子供に台なしにされたのだつた。

「（）は引こう。——触手の制御細胞は、感情に大きく左右される危険な代物。この子らを皆殺しにでもしようものなら、反物質蔵がどう暴走するかわからん」

彼は兵器を二度、呼んだ。触手を逆立てたクラスメートは、そうしてやつと去つていく。

私は、しばらく水しぶきから目を離せなかつた。  
確かに聞いたのだ。

先生は、きっとミュータントではない。

## 七月、又は期末テスト

1

木の葉がさわさわと揺れる。目の前で、先生が教科書を開き、もう一人の先生がノートに赤ペンを入れた。更にもう一人は、生徒の中心で黒のバインダーを持つて、

「みなさん、一学期の間に基礎ががつちりできてきました。この分なら、期末の成績はジャンプアップが期待できます」

そうしながら、横の奥田さんの周りにも、先生は国語の教科書を持つていて、また別の先生は和歌を書いている。

どれも、たつた一人の担任の分身だ。自律思考固定砲台を除く全クラスメートの周りに、二から三の分身を、彼は立たせていた。マツハ二十のなせる業、とても器用で芸の細かい分身だ。と、不審点からは目をそらしておく。

夏季休暇が迫っていた。当然、同じだけ期末テストも迫っている。最近はほとんどの授業が今学期の復習にあてられていた。こうして外で授業をやるもの、もう珍しくない。

「今日は、この暗殺教室にびつたりの目標を設定しました！」

中央の先生が、大きな口で複数の単語カードをくわえた。同時に、周りから分身がいなくなる。

前回、中間テストの目標はクラス全員が五十位以内に入ることだった。諸事情により達成されなかつたものだが、事情を抜きにしても焦りすぎたと反省しているらしい。それで、今回は「ラッキーチャンス」というわけだ。口元の単語カードのアルファベットをつなぎ合わせれば、そう読める。

「前にシロさんが言つたとおり、先生は触手を失うと動きが落ちます」单語カードの替わりに、彼はピストルを持った。教室のどこにでもある、対触手武器を、——脚に向けられた銃口から、鋭く弾丸が飛び出した。あたりまえに命中して、足が落ちる。彼は笑顔を崩さない。

「一本減つても、影響は出ます」

先生は生徒に分身の様子を見るよう促した。すると、どうしたこと

だろう、何体かが小柄になつてゐる。彼はそれを子供の分身と表現した。

更に先生は、もう一つ足を擊ち落とした。

「御覧なさい。子供分身が更に増え、親分身が家計のやりくりに苦しんでいます」

かえつてエネルギーの負担が増えそうなものだが、最後に三本めを落とすと、父親が蒸発した。もう、何も言うまい。

ともかく、そうして失われる運動能力は、触手一本につき二十パーセント。

「教科ごとに学年一位を取つた者には、答案の返却時、触手を一本破壊する権利をあげましょう」

こうした経緯があつて、クラスメートは目の色を変えてペンを握つた。テストをがんばつて、あわよくば百億。得意教科も評価される、ということも理由としては大きいだろう。E組落ちに関しては、総合点のみならず、教科ごとの得点も見られた。苦手がたたつて落とされた者は少なからずいるのだ。例えば奥田さんとか。

「理科だけなら、私の大の得意ですから！ やつと、みんなの役に立てるかも！」

そう喜んだのが先日で、

「目標は同じです！ 私は理科で満点を狙います！」

こう意気込んだのが今日。昨日の放課後、ついに図書室にまで行き（校風由来の特殊な事情により、特にテスト期間の学校図書館利用は非常に困難である）、言い争いをして帰ってきたのだった。

奥田さんの他に、彼女を誘つたクラス委員の磯貝悠馬と四人のクラスメートがいて、対したのは通称・五英傑の四人だ。五英傑というのは、校内で有名な五人の三年生のことで、いずれもA組で特に成績が良い。それぞれ五教科に秀でていて、中でもリーダーの浅野学秀は全国模試ですら一位を譲つたことがない。学業だけでなく、何かをできることよりできないことのほうが驚かれるような人物だ、と、さして関わりもないのに、私も思うほどだ。——彼は現場にいなかつたそだが。

さておき、英語・国語・理科・社会の四人との戦いは熾烈を極めて、クラスのテスト事情を少しだけ変えた。テストの成績で勝負をつけようというのだ。主要五教科の学年一位の数を競つて、勝つた側——つまり一位の多かったクラスは、負けたクラスへの命令権を一つ得る。内容はどんなものでも構わないときた。

「夏休み、楽しくなるね」

奥田さんは答えるようにほほ笑んだ。

E組の命令は決まっている。特別夏期講習、離島リゾート二泊三日の沖縄旅行の権利だ。例年、三年の最優秀クラス、つまりA組が行くことになっているものである。

## 2

——E組が勝つた。

英語は中村莉桜が満点で学年一位、国語は生徒会長が満点で、社会は磯貝君が九十七点、理科は奥田さんが九十八点。数学では再び生徒会長が満点を取つた。

総合点一位も彼だ。四九一点である。ちなみに私は、遠く及ばないが四五〇点と、狙いどおりなので良しとする。

返却を終えて、先生はうれしくてたまらないという顔をしていた。というか、なめていた。緑の横しまの顔の先には、旗の立つた三本の触手。すなわち、ラツキーチャンスの御褒美だ。

「トップの三人は、どうぞ三本ご自由に」

なめくさつて差し出したが、事は素直に運ばなかつた。

教室の隅で四人の生徒が椅子を引いた。ガタ、と同時に音を立てて、乱暴な所作で教壇の前に出ると、

「五教科のトップは三人じゃねえぞ」

などと言う。寺坂君と、彼と仲の良い三人だ。彼らは一斉に、紙を一枚ずつたたきつけた。

「五教科つつたら、国・英・社・理、——後家だろ」

寺坂君が得意げに笑つた。満点の答案用紙は、疑いようもなく学年一位の証である。それが四人となると、なんて足し算を始めた生徒たちを他所に、

「ちよ、待つて!!」

先生は叫んだ。

「家庭科のテストなんてついででしょ!! こんなのはだけ、なに本氣で百点取つてるんです、君たちは!!」

「だーれもどの五教科とは言つてねえよな」

寺坂君も引きはしない。クスクスと、彼らの笑う声ばかりが教室に響いた。私も笑いそうだった。もう少しでも気が緩めば、そうしてしまうだろう。何だかおかしな気分だ。こんなのは道理に合わない。だが確かに、先生は五教科としか言わなかつた。五英傑なんかだつて、主要五教科と定義付けてきたのに!

家庭科のテストなんて。ついで。こんなのはだけ。慌てに慌てた先生の失言を、赤羽カルマが隣でつづいた。要領を得て、クラスメートも続く。勢いに乗り切つた彼らが、約束を守れと騒ぎ出すと、先生は弱りきつた。もはや、くわえて四本を減らすことは確定だ。先生の顔に、既に横しまはない。なるほど七本ともなると、相手が素人だとしうまく油断できなくなるものらしい。

フフ、と、笑みが漏れた。とつくの昔に、緊張感など失われていた。ただ声を出さずにいられただけで。我ながら、らしくないことだと思うが、不思議ではない。うれしいことがあつたから、喜んでいられるから、だからここまで幸福な心地でいるのだ。当然、常に幸福だけれど、今は殊更のそれを、胸の内に抱えている。

最後に、磯貝君がどどめを刺した。

「これはみんなで相談したんですが、この暗殺に、今回の賭けの戦利品も使わせてもらいます」

3

今学期最後のホームルームを終えて帰り道、赤羽カルマと共に教室を出た。意図したものではない。何となしに立ち上がりつたら、彼も立ち上がつていたのだ。他に用事もなかつたようで、同じだけの道のりを、同じだけの速さで歩いた。校門を抜けるのも、だから一緒にだつた。

というのは私だけだつたらしい、と、下り坂の途中で気づく。

「あんたさ、おれに言いたいことがあるんじやないの」

わざわざ横に並んでまでされたのは、意図のつかめない質問だった。以前も、同じことを尋ねられた。あの時は彼の暴力沙汰に始まりE組落ちに終わった冬の話をしたのだったが、今回は皆目見当がつかない。

歩く速さが、つられて少し遅くなっていた。だが、特に気にかけるほどのことでもない。今日は機嫌が良い。だから、疑問を返したときも、正直な気持ちでいた。

「何のこと」

合わせて隣の顔を見る。そうしたところで、腹も立たない。周りはクラスメートだらけで、色々な所で誰もが誰かと話していて、奥田さんははるか前で茅野さんと話しているのに。

隣の顔は、正面に向けられたままだ。

「そんなにうれしそうなとこ、初めて見た」

「ふふ、そんなこと」

笑つてしまふ。いや、今日はもうずっと笑つていたか。だつて、おかしいのだ。まるで緊張感をなくすくらい。寺坂君たちの行いが琴線に触れたように、赤羽カルマの言葉もどこかに響いた。だから、おまえの成績が悪かつたのがうれしいのだと、もしかして気づかれていたとしたつて、ちつともさつとも顔色を変えずにいられるのだ。

私は今、久しぶりにこんな顔で笑つている。

口から飛び出した音も、よどまなかつた。

「あのね、テストの成績が上がつたの。すぐ難しくなつてたのに」

「あー、そうだつたね」

「一位じやなかつたけど」

この話し相手にも届いてはいない。彼は四六九点で十三位だった。数学だけは私の方が良かつたが。彼の八十五点に対し、私は九十点だつたのだ。

また温かい感情がこみ上げた。今日は赤羽カルマのことを考えるだけで、どこかが何かで満たされていく。いつもとは真逆だ。

思いついて横の顔を見てみると、彼は無表情を浮かべていた。いつも、受け答えに退屈を感じたときにする顔だ。そんなことなら、声な

どかけなければいいのに。そうしてくれたら、どれだけありがたいことだろう。

今だけは、何をされても、幸福以外を感じることはないけれど。視線を外す。少しの沈黙が流れ、しかし雑音に注意を払おうとするより先に、彼は尋ねた。

「それでも幸せなわけ」

「うん、私は幸せだよ」

答えて思う。いつたいどうして、その尺度がでてきたのだろう。脈絡がないように感じられた。だが、その問い合わせのこの答えに意味がない以上、考えることにも意味はないのだろう。たとえ、このときばかりは本当に幸福だったとしても。

もう一度、横へ目を向いた。多分、偶然、目が合った。感情を映さない瞳は、すぐに正面へ戻る。

返つてくる言葉はない。

あたりまえに私の気分は害されない。それは赤羽カルマの気持ちを慮つて制御された感情ではない。今や何者も私に水を差せないというだけのことだった。

確かに私は幸福だつた。

だつて、もし本当に、総合点一位を期待されながらはるかに下回る成績を出してくれたクラスメートへの気遣いが、今の私に一分でも存在したなら、

「赤羽君はどうなの」

こんなことを聞けたはずがないのだ。

——今はただ、この幸福に、より多くの幸福を重ねたかった。

## 八月、又は特別夏期講習

1

毒を盛られた。——かもしだれないグラスを、私はどうにか落とさずにいる。真っ先にウエイターの姿を探したが、当然というべきか、見渡すかぎりにはトロピカルジュースの味を楽しむクラスメートばかりがいた。現在唯一の大人も同じである。

「おいしい！」

隣で奥田さんが目を細めた。もちろん彼女も、ただ甘酢っぽい液体をストローで吸い上げている。中身は半分まで減っていた。おいしいだ。おいしいジュースなのだ。ただし毒入りの。

船に揺られて六時間、どうして沖縄に来てまで毒を飲まなければならなかつたのだろう。いや今にして思えば、そもそもサービスのトロピカルジュースなど飲むべきではなかつたのだ。幸福は義務で、アルファコンプレックスのための行いは幸福で、コンピュータ様への御奉仕も幸福。——おや市民、幸福ではないのですか。

奥田さんと同じだけ喉奥へ流し込むと、私たちは同じ表情をつくつて、同じ言葉を口にする。

「おいしいですね」

「おいしいね」

横のクラスメートは、はた目には普段どおりだ。笑顔も、大事そうにグラスを支える両手も、慎ましく閉じられた脚も。同じテーブルの他の二人も、同じレストランの他のクラスメートも。先生だつてそう。ここには、悲鳴も、うめき声もない。

となると、あと私にできることは、昼食の品を選ぶことで、そして祈ることだった。今となつては、そうするしかなかつたのだ。どうか感染力が弱いものでありますように、などと、らしくもなく。

「三人はもう決めた？」

「私はトロピカルジュースをまた注文するよ。あと、このサラダ」

「私は、これとこれでちょっと迷つてて。茅野さんと神崎さんは？」  
「『』はんはとにかく、私パフェ頬もつかなあ。見て、このプリンパフェ

！」

「茅野さんは甘い物が好きよね」

今笑い合う三人が、計画に失敗した夜には毒に倒れているかもしない。そのとき、そこに立っているのは私一人かもしない。

私だけがそうなるかもしない未来に気づけていて、そのくせ、自分自信が絶対に感染しないことを知っているのだ。ちつとも喜べやしない。ただただミュータントパワーが呪わしい。こんなことを考えるのは初めてだった。今とて、全てがミュータントパワーのおかげであるのに。——だが現状、それが最も厄介なのだつた。

沖縄の鮮やかな景色が今は毒々しく映つて、目を背けた。新しく来たトロピカルジユースは、とてもおいしかつた。

2

海の匂いがした。この普久間島は海に囲まれている。だから沖縄に来てまで暗殺するのだ。ターゲットの弱点が水だから。

講習の特典で、ホテル及び提携サービスは自由に利用できる。そのうえで政府からも予算が下りていた。夕方には周辺一帯が関係者貸切にもなる。

「海の匂いだね」

声の主に、顔だけ向けた。特に意味のない言葉だと思う。周りには、あたりまえに海があるのだから。それとも、潮臭いと言いたいのだろうか。だとしたら、それこそ無意味だ。私たちは、ダイビングをしたばかりなのだ。とはいっても、体はシャワーで流したけれど。

彼はにこにこ笑つて、横の奥田さんはくすくす笑うので、私は「赤羽君もでしょ」と笑つてみせるしかなかつた。それにまた赤羽カルマが言葉を選んだ。

「あつちで、いるかに仲間だと思われたりして」

思つてもいらないだろう言葉と共に、目的地を指す。もうすぐ、そこから、いるかを見れる船が出る。計画ではその船に、先生と一緒に乗ることになつていた。これも今夜の決行に向けての準備の一環、といふか、その準備風景に目を向けさせないための作戦だ。

「同じ哺乳類ですもんね」

「それも、あるかな」

二人は楽しげに話している。元気そうだ。

教室で何度も繰り返した会話の間に、近頃中学生らしい思考を巡らせることが増えた。思春期らしいと言い替えてもいい。性ホルモン抑制剤を投与されないことの弊害で、全くの無駄で、まずもって反逆的な邪推だ。うわさは反逆なのだ。ここがかつての世界なら、とすら考えてしまうほど無意味なルーティーンは、しかし私に下世話な結論を導かせる。

赤羽カルマは奥田愛美に恋情を寄せている。——私は巻き込まれてしまつたのだ。恋の相手とよく話すから。恋の相手の後ろの席だから。ついでに自分の横の席だから。

なんと低俗な妄想か。そうとわかつていながら、それでも実在しない状況を想像しなければ、その架空に憤らねば気が済まない。

赤羽カルマがこちらを見た。まるで、そんなことはないのだと言うように。

### 3

計画は極めて順調だつた。大まかには、こう。沖縄到着後、ホテルで昼食。昼食後、修学旅行の時の班に分かれて準備。そして、予約しておいた船上ディナー。

全て計画どおりだ。時間には余裕がある。例によつて乗り物酔いにかかるてくれたうえ、言いがかりをつけて奥の手を切らすことにも成功した。

これから、やつと暗殺の舞台へ向かう。ホテルの施設の一つ、水上パーティーームだ。そこで、二人のクラスメートが、精神攻撃のための動画を準備しているはずだった。

「いよいよですね」

船を降りて、短い道で、奥田さんがおずおずと口を開いた。

「そうだね」

答えて、私は次の言葉を待つた。

彼女は肩を丸めていた。幾らでも小さくなりたがつてゐるみたいだ。だが、首の上にあるのは笑顔だ。緊張はあるが無理はない。心身

共に、いたつて健康そうな。

誰も彼もそうだった。決意にうそがあるわけでもない。彼女の言葉に偽りはない。

「今日殺して、明日はいっぱい遊びましょうね」

大好きな先生を殺した後のこと、奥田さんは心底から楽しそうに告げた。

私は何も言わず、替わりに同じ笑顔でうなずいておく。それが最後だつた。

小屋の入り口で、私たちは別れた。奥田さんは、同じく触手を破壊する六名と、その触手の持ち主と、席に座った。正面中央にはディスプレイが一つ。再生される動画は一時間分。再生終了後、つまり一時間後、七人が触手を撃つのが暗殺開始の合図だ。

奥田さんの背中から視線を外すと、ちょうど小屋から明かりが失われた。

最後の最後までクラスメートの様子に異常は見られなかつた。ともすると、毒のことを忘れてしまいそうなくらいに。けれども確実に、毒はクラスメートの体をむしばんでいる。二杯めのトロピカルジュースは、毒ではなかつた。

後一時間は発症しないのだろう。今になつても影響が現れないということは。——恐らく犯人はこの計画を把握している。だから、誰かが、あるいは全員が毒に倒れるなら、この暗殺が決着してからだろう。あえて考えるまでもなく、犯人の狙いは先生で、それなら、どうせ失敗する暗殺の後、怪物が疲弊したところが好機ではないか。

この島には小さな診療所が一つあるのみ。それもこの時間には閉まっている。小さな島だから、よそから来ている可能性も十分ある。しかし仮に医者がいたところで、未知の毒を盛られたなら、解毒は望めないだろう。そして、そちらの方が今回の犯人には都合が良さそうだ。先生を殺すつもりなら、生徒を人質に取るのが一番効果的なのである。この夏、シロが実証したように。

誰かに相談することを二度は考えて、結局そうせずにはいる。私が毒に気づけたのはミュータントだからで、相談することは正体の露呈を

意味する。この現在では、かつてのアルファコンプレックスと違って、ミュータントはおろか超能力者すら明らかにされていないのだ。いつたい、どうなるだろう。私は反逆など証明したくない。

——たとえクラスメートが死んだとしても。

振り払うように頭を振ると、近くで水が跳ねた。暗殺開始まで十分を切っていた。水着とフライボード。今回の作戦の要の一つ。顔を上げると、暗がりでクラス委員が合図を出していた。

九人で円を描いて小屋を囲んだ。内や外に、銃やホースを構えたクラスメートがいる。誰かは陸地から、誰かは海から、誰かはボートから。海中には、しつけられたいるかがいる。鳥間先生とイエラビッチは、陸地の更に遠くから、現場を見ていた。

間もなく最後の合図で、フライボードを着けた九人が、一斉に飛び上がる。先生の姿を確認する暇はなかつた。小屋は壁を取り払われて、床だけを残している。その頂点へ達し、バランスを取ると、やつと困惑する先生を見下ろした。

水のおりが、できていた。私たちは、ただ先生だけを見つめる。ゴーグルも着けているが、彼に、こちらの視線にまで気を配る余裕はないだろう。右往左往、狼狽を隠すこともできていない。

クラスメートの銃弾があちらこちらから先生に向かつて飛んで、しかし決して先生には当たらない。自律思考固定砲台は、はつきりと宣言した。

#### 【照準、殺せんせーの周囲全周一メートル】

水の音に発砲音、その弾の転がる音。空を切る音。そこで黄色い頭が落ち着きをなくしている時間は、そう長くなかった。

ある一瞬のことだつた。突然、目がくらんだ。光がひらめいたのだと気づくやいなや、思わず目蓋を合わせる。直後、全く別の要因から体勢を崩して、背中から海に倒れ込んだ。——先生の体が弾けたのだ。そうとしか表現のしようがなかつた。恐らくは、本命のスナイパー二人の狙撃によつて。

海面から顔を出して、まず周囲を見回した。同じように頭を動かすクラスメートの姿は多々あれど、先生はどこにもいない。小屋のあつ

た所にも、水の上にも、空にも陸地にも。

鳥間先生の指示が飛んだ。全くもつともな言葉に従つて、全員が周囲を警戒する。先生には再生能力もあるのだ。けれど、

「あつ」

誰かが声を漏らした。大したことのない音だったのに、それが今はよく響いた。一人、また一人と、その誰かの目の先に、何かを見つけていく。

全員が同じ所を見た。ぶくぶくと、あぶくが立つていて。銃を持つ者は銃を構えた。私は唾を飲んで、少し安心した。

やはり先生は死なかつた。

間もなく海面に、透明な球状の物体が浮上する。

「これぞ、先生の奥の手中の奥の手——完全防護形態!!」

そのガラスのような膜の内側に、先生の頭だけが入り込んでいた。

4

一夜明けて、一人で部屋を抜け出した。皆、眠つているのだ。それから昼まで、ほとんど誰とも合わなかつた。よほど疲れたらしい。唯一話をできたのが、鳥間先生だ。といつても、不眠不休での完全防護形態の対処をしていたようで、結局、挨拶とそのくらいの簡単な言葉を交わしたきりになつていて。

風呂に入り、朝食をとり、適当に暇を潰し、もう昼になる。

昨日は本当に毒を盛られていた。にらんだとおり、症状が出たのは暗殺失敗後。ホテルに戻つて、テラスでくつろぎ始めた頃のことだ。祈りが通じたのか、発症者はおよそ半数といったところだ。

犯人の狙いは当然のように百億円の賞金首で、ついでに渚君だった。いや、もしかすると、先生の方がついでだつたかもしれない。  
鷹岡明は、渚君を恨んでいた。

そうした事件はあつたが、現在、とにかく全員が無事で、私はまだ人間をやつていて。

ザ、と毛色の違う足音がした。振り向くと、イエラビツチが砂浜を踏んでいる。ようやく起きてきたらしい。それとも、すれ違わなかつただけなのか。

花をあしらつた、というより最低限の布地を花で隠した、際どい水着姿だつた。ビーチとあだ名される女にふさわしいといえば、ふさわしいが。普段のビーチならよりどりみどりだつたものを、昨日から、この小さな島の半分ほどには、関係者と最低限のスタッフしかいない。そのビーチにいるのも、防衛省の職員だ。いつたい、ここで何をして過ごすつもりだろう。

彼女はドリンクを片手に、ゆっくりと歩いてきた。こちらに。あちらも私に気づいたらしい。

「おはようございます」

先に挨拶すれば、軽く返されて、

「早いのね」

続く言葉も軽い。

「いつもどおりに目が覚めちゃいました。先生も早いですね。まだ、みんな起きてこないですよ」

「こつちも習慣よ」

どうやらそれ違わなかつただけのようだ。

「——海も使えないのに、あんたは今まで何してたの。ジャージだし」視線が上へ下へと動く。

「他にお客さんもいないので。新鮮で楽しいですよ、人気のないリゾートホテル」

後から来るクラスメートも皆ジャージだろう。何となく。全員の勘だが、これは当たる。何となく予感がある。何となく。

「大分早かつたんじやない？ ちゃんと寝たの」

「ぐつすりと」

こちらは全くのうそ。彼女にしたら真偽の程はどうでもいいのか、追求はなかつた。何となく尋ねただけなのだろう。

「それにしても、やることがないわね」

「パラソル差しますか？ 私しばらくビーチにいるつもりなんですか？」

「あら。じゃあ雑誌でも読もうかしら。——あつ、あれ！」

イエラビッヂが一際高い声を上げた。

「——鳥間じゃない!!」

「不眠不休で指揮を執つてゐみたいですよ」

「ちよつと声かけてくるわ! パラソルは任せた!」

「はーい」

と、返事の前に飛び出した彼女は、一式を借りて戻つてみれば、すっかりふて腐れていた。

ようやくクラスメートに会えたとき、日はもう落ちようとしていた。ラウンジで出会つた彼は、予想どおりのジャージ姿だ。

そして目の前に立つなり、

「いつから」

「朝から。おはよう、赤羽君」

「おはよ。女子一人?」

「今朝はね。部屋に戻つてないから、今はわからないけど。——誰も下りてきてないと思うよ。男子は?」

「みんな寝てる。早起きだね、疲れとれてないんじゃない」

「ビッチ先生みたいなこと聞くんだね。大丈夫だよ。私がやつたのって、フライボードくらいだし。赤羽君こそ、なんじやない」

「はは、毒ガスつて使えるもんだね」

スプレーを使うようなしぐさをして、彼は横に腰を下ろした。手のひら二つ程は距離があるが、教室の席より近い。

「もう一個くらい欲しかつたな」

「——奥田さんに頼んだら。良いスプレー作れそう」

「それ良いね」

いや、良くない。提案しておきながら、なんだが。彼がもう一個を望むガスは強力な麻痺毒で、昨日の犯人の手駒の一つが作ったものだ。そのレベルには至らずとも、奥田さんが作るとしたら、いたずらにしては度が過ぎていることだろう。

うんうんとうなづく彼は、いつもの涼しい笑顔だ。表情は読めない。だが、どうせ、いつものように先生や寺坂君で試す算段でもつけていたのだろう。

「最初はあんたに試そつかなあ」

ほら。

「えー、しばらく先生たちから離れないようにしないと」

——やめろよ!

口が閉じて、反射的に叫んだ。声は出なかつた。意思に反して、口も開かなかつた。この私に、そうした振る舞いは許されない。矛盾しない範囲では、うかがうように隣を見やるのが精々だ。「冗談だよね」と言いたげに。

やがてそのとおり見た彼は、目に、逆に冷たい色を浮かべていた。気づけば笑みもない。考えていることは、わからないままだ。ただ、退屈というのとは、少し違うようだつた。記憶の限り、初めて向けられた顔だ。だが、誰かには向けていた。私ではなく。——その誰かが、いつたい誰だつたかまでは、

「やつぱ、むかつく」

——その誰かのことは、はつきりとは思い出せない。

奇妙なことだつた。

その不可思議も、また彼のつぶやきに追いやられてしまう。

「むかつくな、本当に」

本当に彼が、そうつぶやいたのだ。

私は何も言わなかつた。こういうときに返す発音を、私は持たないのだ。いや言い返せなかつた。返そうとするなら、どうしても同じ言葉を口にしなければならなかつたのだ。——本当にむかつく。

赤羽カルマは、このクラスメートのことははじめから気に食わなかつた。無駄に頭が回つて、無駄に評価が良くて、無駄にそれを利用して、無駄に秩序を乱す。乱された後の無駄を気に留めることはない。その外へ出ていくから。それがまた調和を崩して、わりを食うのは、いつだつて秩序の側だ。

おまえのような反逆者がいるから、私は六度も死んだのだ。おまえのような反逆者が、いつも全てを台なしにしていく。おまえのような反逆者が、私を六度も殺した。

おまえのような反逆者が——

当然私は、こんなことは言わない。赤羽カルマも言葉を続けない。

だから私も次の言葉を選べない。

二人の間に沈黙が流れた。いずれ、どちらからともなく立ち上がった。外へ出る。相変わらず鳥間先生は働いていて、イエラビツチはパラソルの下で夏を過ごしている。ビーチで、いつになくぼやりと、その姿を二人で眺めた。そして、クラスメートが起きてくると、私たちは別れてそれぞれへ向かつた。

夕日を背景に、海で大きな爆発が起きた。もうクラスメートが全員そろっていた。結果は、まあ当然と言うべきか。——先生は殺せなかつた。

日が沈んでいく。

## 八月、そして夏祭り

1

ぺたりと窓がたたかれたとき、一日をそこで終えるつもりでいた。快適な環境だった。夏休みの終わりの日のことだ。

ガラリと開いた窓から、柔らかい黄色が顔を出した。先生だ。この

風変わりな家庭訪問は、休暇中にも何度かあつたが、

「夏祭りに行きませんか」

今日は少し用件が異なるようだ。

「柵ヶ丘神社で、今晚七時からです。今日思い至つてみんなに声をかけて回つてるんですけど、断る人が多くて——」

彼はハンカチで鼻をかんでみせた。わざとらしい。そして結果も当然といえる。この昼間に今晚の予定だなんて、急すぎる。だが、彼の悲しみように、冗談の影はなかつた。一人も集まらなければ、死んでしまいそうだ。そうなつてしまえば、地球のためににはなるだろうか。

とまで考えておいて、

「みんなと夏祭りですか、良いですね」

この私はそうした考えを持たないのだ。この私は理由もなく断らない。私はただ一日を自室で終えるつもりでいたのだ。

突然のことなのに、友達と祭りへ行くのだと話せば、親は浴衣を出してくれた。白地に紫色の柄が入つていて。下駄と合わせると歩きにくいくことこのうえないが、これもまた断る理由がない。

指定の集合場所へ行くと、似たり寄つたりの人混みに、E組はすぐ見つかつた。時間ちょうどに先生が現れたときには、突然の呼びかけにしては、それなりの数になつていたように思う。それから、私は数名の女子と行動することになつた。男女で別れたわけではないけれど。

「たこ焼き食べたいね」

「そうだね。あそこに、あるみたい」  
こうした具合だ。

屋台の品は割高で、また祭りということでひどいにぎわいだが、この独特的の空間を食べ歩くのは嫌いではない。おいしい物をおいしく食べる。そのどこに不幸があろうか。

とはいって、その平凡な幸福も、とある所でとある背中を見つけると、砂が風に吹かれるように失われた。かえつて、あちらは当たりもしないような糸くじを握つて、小脇には箱を抱えている。いたく満足げに。よりもよつて、一緒に歩いていたクラスメートが声をかけたので、私たちはびたりと目を合わせることになった。

無視などできない。それどころか、彼はこちらへ向かつてくる。互いに気づいてしまった以上、この私が反応しないのは不自然だ。呼びかけた相手とだけ話しておけばいいのに、

「いやー、当たるもんだね」

などと私を見た。

「おめでとう」

答えながら奥田さんの姿を探しかけて、——今日、彼女はここにはいない。そう、いないのだ。いないのに赤羽カルマは話しかけてきた。やはり、あれは下世話な勘織りでしかなかつた。

しかし、もう用済みだろうと背を向けることは、許されない。

「五千で当てるんだけど、やつてみる？　ま、ゲーム機は俺のなんだけど」

「やらないよ」

集合したときには目も合わなかつたことが、まるでうそみたいだ。それどころか記憶によれば、私に対する最後の言葉は「むかつく」のに連続だつたわけだが。いつたい、どういう神経の持ち主だろう。いや、考える時間が無駄か。

元より、させたかつたわけではないのだろう。彼はそれ以上を言わなかつた。かわりに、私の買物袋を見た。

「どこで買ったの」

「たこ焼きなら、あそこの一――」

「連れてつてよ」

「えつ」

お断りします、と口が動くことはなかつた。「でも」と続けて、形式的に後ろを向く。今、私には同行者がいるのだから、彼女たちにこそ断りを入れなければならない。脳はそう判断したらしかつた。案内したくない本心は、この私とは無関係なのだ。

うかがつた先で一人が言つた。

「私たちのことは気にしないで」

同調するように、残りがうなずいた。一般的な女子中学生であるところの私は、それなら、と正面に向き直つた。

「たこ焼きの屋台だつたつけ」

「そうそう、よろしくね」

難しい道はなかつた。むしろ易しかつた。わざわざ案内するまでもなく、口頭説明で事足りる。特に赤羽カルマが相手なら。だが実際は、その易しい短い道のりを、並んで歩いた。

新しい同行者が手荷物を増やして戻つてくるのを見ても、礼を言われたつて、優越感はわかなかつた。

「焼きそば買つてないよね」

「買つてないけど」

答えて、隣の屋台を見る。最初に来たときも、こうして焼きそばを買う話をした。まだ一時間もたたないが、あのときは買わなかつた。対して、今度のクラスメートは、

「俺買つてくるから、待つてて」

それで終わりもしなかつた。二分と待たずに戻つてくると、次は反対側のお面を見たいと言う。断れず着いていけば、更にその隣でくじを引き、ジュースを買い、かき氷を吟味して、——なぜかいけ好かないクラスメートと屋台を回る羽目になつていた。

隣のクラスメートは、かき氷を片手に、その価格を笑つた。ぼつたくりだと言いたいらしい。それでも、たこ焼きも焼きそばも、ジュースも買った。射的もやつた。そこではE組きつてのスナイパーの顔が「出禁」の文字と共にでかでかと張り出されていることを笑つただつたか。

どうして、こうなつたのだろう。初めはたこ焼き屋を教えるだけ

だつたはずだ。理由がわからない。理由がない。彼は知り合いとすれ違つても、それが渚君であつても、彼らと合流しやしなかつた。でも、私とは歩いた。

ついには神社を一周した。最後の屋台はフライドポテト。四百円。「一番高いのと安いの買つて、半分にしようよ」「それつてポテトのこと?」

私たちは同じところを見ていた。

「うん。それで最後にしようぜ」

「いいけど、何かあるの」

「えつ、花火見ないの?」

えつ、花火まで一緒に見るのかよ。——顔に出てしまつたかもしない。ということは、そのくらいはこの私も考へるということだ。無理もない。彼との行動も、そもそも祭り自体が突然だつたのだ。何もなければ、私は今も部屋で本を読んでいて、そうでなくとも女子の隣で花火を見たのだろう。

「よく見える所、知つてるよ」

決して、この男の隣ではない。

2

百円のポテトを持つて、河原沿いをしばらく歩いた。いや、かなり歩かされた。隣の六百円がようやく腰を下ろしたので、私は間に袋を置いた。

周囲には少なかつたが、確かに花火はよく見えた。折良く上がつた一發めが、鮮やかに夜を照らす。大きな音が響く。私はたこ焼きを一つ口に運んだ。

赤、黄、緑、青、紫。何色ともつかずヒュルヒュルと上つては、色をつけて花開いた。夏らしい夜空だ。地球最期の、——と、突き刺そうとして、器が重さをなくしたことを思い出す。片付けて、次はフランクフルトをつかんだ。同じ容器に一本残つたが、それは同行者の分だ。彼はというと、今は焼きそばを食べている。

また花火が上がつた。

「その浴衣、似合つてないよ」

赤色の、ありきたりな一つ。大きな音がした。そんなところで彼が言つた。花火に紛らすようで、少しもできていない。否、そのつもりだつたのだろう。そうだ、と、それは確信に近かつた。そうであつたなら、一切合切の説明がつくのだ。ひどい嫌がらせだつた。

そんなことのために、こんな所まで歩かせるなんて。信じがたいけれど、こんなことのために。人生最後の夏休み、人生最後の夏祭り、それらの終わりを、私は付き合わされたのだ。

「せつかくなのに、嫌なこと言うよね」

「白、好きなんだ」

やつは返事など、まるで聞かなかつたように続けた。

「好きだよ」

私は律儀に返した。そう推測されるほど、身の回りに白色を置いているからだ。肯定した方が自然だつた。

花火を見ていた顔を横に向けた。隣の男がどんな顔をしているのか、ふと気になつて。今日も、そもそも五月から、彼の思考も目的も何もわからずにする。私たちの関係性はすっかり変わつてしまつた。私は、彼が嫌がらせどころか関心も持たないような、つまらないク拉斯メートでいたはずなのに。この実力主義の学校で、勉強ばかりして、A組に行くような友人を選んで、ありきたりに過ごしていたはずなのに。

不意に向けたはずの視線は、向かいの二つと重なつた。やはり意図はわからなかつた。奇麗な花火が上がつてゐるのに、彼はじつと見ていたのだ。

「あんたには黒が似合つてる」

空がまぶしく光つて、爆音が鳴つた。たちまち男の顔に陰ができる。表情が見えたのは一瞬だ。そして、言葉の意味をかみしめ、どくりと不規則な心音を聞いた。

「縁がなくて考えたこともなかつた」

私こそ表情が外に出るわけもないのに、無性に水を飲みたくなつた。ちょうど、水っぽくなつたかき氷を持っている。

「一つアドバイスつてことで」

「参考にするよ」

一言、それからストローでかき氷を飲んだ。甘い味が口に広がった。もう涼しさを覚えるほどにも冷たくない。だからだろうか、まだ飲み足りない。だがジュースを取り出す前に、赤羽カルマがつぶやいた。そして、そらすように正面を見る。

「そういうところが、むかつくんだよね」

「この間から嫌なこと言うよね」

「どうも、知つてたでしょ。ずっと同じクラスなんだから」

つい、の返事に、彼は傷ついた素振りも見せず返した。また嫌な言い方だつた。この私なら傷ついてしまうような。だから控えめに肯定した。少しためらつてみて。

それがまた、気に入らなかつたらしい。なぜか。

「ほんと、そういうところだよ。嫌なやつ」

まるで傷つけたがつているのに。

「俺ははつきり言つてやるけど。おまえみたいに嫌なやつ、他に知らないね」

そんなことを言う。私は、いつたいどんな顔をすればいいのだろう。笑つてみようか、泣いてみようか、それとも、——沖縄旅行でのトラブルを思い返せば、最低の評価だつた。具体例を挙げられる。つまり私は鷹岡明より醜悪な人間だと言われているのだ。

何から何まで無駄だつたのだ。私は無様にもがいていたのだ。ただ平和な世界で平穏を望んだだけで。あるいは先生に地球を破壊させたかつただけで。

その過不足ない幸福のブラックリストに、いつものように一人を追加して、それでは終わらなかつたのだ。

どうして、とどれだけ気にして、しかしみユータントパワーを使う氣は起きなかつた。なにも死ぬわけではないのだから。これは妥協だろうか。いや保身だ。ミユータントパワーはミユータントの証。「ミユータントのしわざ」は弁解の常套句だつたではないか。

「なに笑つてんの」

「だつて、あんまりひどいこと言うんだもん。私にも赤羽くんが嫌な

人間に見えてくる

「ずっと思つてたの間違いだろ」

よく、存じのようで。とは、答えてやらない。けれど、続きは決まつていたらしい。

「もう決めたんだ。三月までに、おまえのことも殺してやるよ」

花火が再び上がった。空に赤色がきらきらと輝いている。

## 九月、又は下着泥棒

1

柵ヶ丘に不審者が出たらしい。リビングで、両親が口をそろえて言つた。二学期開始からしばらく、大きな事件もない、平和に目覚めた朝のことだつた。

下着ドロ再び出没!!——これが差し出された朝刊の小さな見出しだ。読み進める中、市内で八月末からブラジャーノの盗難が多発しているとある。どれもFカップ以上のものであるため、巨乳専門でないかと警察は見て いるようだ。

「黄色い頭や大男、変な笑い声、それから不審な液体には気をつけなさい。どれも学校の近くで起きて いるからね。怪しい人を見たら、すぐに逃げるんだよ」

二人は日々に注意を促したが、娘はその犯人像を具体的に思い描くことができた。黄色い頭の大男が、ヌルフフフと笑い、謎の粘液を出す。私の担任ではないか。——まさか国家機密に覚えがあるとも言えないから、ただ気をつけると告げるにとどめたけれど。

登校してみると、さすがに教室でも話題に上がつっていた。

「まさか殺せんせーが、こんなことをするなんて」

奥田さんが不安げに目を伏せた。彼女だけではない。クラスメートの不信感は、いずれも同じ方向に傾いている。

なんと卑劣なわなだろう。わかつていながら、私は口にして いた。「本当に先生がしたと思う?」

「——へー、あんたは殺せんせーを信じるんだ」「信じるよ」

隣の席に人が座つていようと、訂正する気も起きない。

「もし私がマツハ二十の泥棒なら、証拠なんて隠滅するし。残すにしたつて、それなら別人のしわざに見せかけるもの」「そこは同感」

「でも、それなら——」

言葉にしかけて、そうする前に奥田さんは飲み込んだ。

「——まずは殺せんせーに聞いてみないと、ですね」

とはいえ、一時的な翻意だろう。赤羽カルマはともかく。十中八九、この校舎には覆ししようのない事実が用意されているからだ。

——そして先生は当然に疑われた。

「先生、全く身に覚えがありません!!」

彼も当然のように反論するが、

「この事件があつた昨日深夜、先生どこで何してた」

「高度一万メートルから三万メートルの間を、上がつたり下がつたりしながら、シャカシシャカポテトを振つてましたが」

いつたい誰に証明できるだろう。マツハ二十のアリバイ確認ほど無意味なものもあるまい。たつた一問答で、先生も生徒も同じ結論に達し、容疑者の方が潔白を証明することにした。

「準備室の先生の机に来なさい!! 先生の理性の強さを証明するため——今から机の中のグラビア全部捨てます!!」

と、バサバサとせわしなく引き出しから雑誌をつかんでは投げ、つかんでは投げ、——していたはずが、いつの間にかブラジャーを触手にからめていた。かと思うと、クラスの名簿の女子の欄にだけ、カツブ数らしきアルファベットの記載が発見される。おまけに、最後のページには市内のFカップ以上の女性の個人情報のメモときた。

「今からバーベキューしましよう、みなさん!! 放課後やろうと準備しておいたんです!! ほら見てこの串!!」

なんて取り出した串にも、もちろんブラジャーだ。

もはや信用などなかつた。ことごとくが、先生が犯人であることを物語っている。そもそも彼は国家機密なのだ。それも地球の存亡が懸かっていて、この触手の男の容姿を知らされているのはごく一部にすぎない。いたずらな証言である可能性は、同じだけ低かつた。報道された目撃情報こそが、何よりの証拠だつたのだ。——多少、不自然だととしても。

覆面の下でほくそ笑む白装束が、目に浮かぶようだつた。

一日中、冷たい視線が先生を刺していた。授業こそ行われたものの、拳手もなく、指名もない。ただつらつらと板書を写すだけの時間

だ。休憩時間になると、彼は追われるよう教室を去った。

放課後も、ホームルームのホの字もなく、先生は別れを告げる。返事はどこからもない。しかしそうして、ようやく教室はにぎわいを取り戻した。誰もがそそくさと帰つてしまつたけれど。奥田さんも、その一人だ。

いかに杜撰な犯行でも、これだけ証拠が挙がつてしまえば疑うしかないのだった。タイミングの悪いことに、今日校舎にいた大人は容疑者一人で、ろくに仲裁する者もいなかつた。

現段階での問題は、先生がどこへ向かうか。生徒の信用を失つた彼の行動など、手に取るようわかる。潔白の証明、すなわち真犯人の特定だ。それには現行犯確保が早い、と彼は考へるだろうか。——もつとも現行犯などおとりにすぎないだろうが、先生はこういつた事態にすこぶる弱いから、どれほど怪しくても次の現場へ向かつてしまふのだ。例えは巨乳限定イベントだとか。

「今夜、暇？」

隣の席から呼ばれて、荷物をまとめる手を休めてみる。そこには、彼の他に、寺坂君と渚君と茅野さん、そして不破優月がいた。

「何があるの」

「偽殺せんせーがいるんじゃないかつて話してたんだ」

渚君が答えて、隣人が続いた。

「まだ殺せんせーのこと信じてるんでしょ」

「うん」

「こんなことが続いたら、先生が逃げるかもしれないじやん。そういう前に俺たちで真犯人を見つけて、ついでに貸しも作つちやわない？」

？

「律に協力してもらつて、一連の事件について私が調べてみるからさ。殺せんせーの特徴をこんなに知つてゐる時点で、ただものじやないし。メンバーは多い方がいいと思うの」

なるほど。不破さんが企画して、赤羽カルマが便乗したといつたところか。この二人、やけに楽しげである。らしいといえば、らしい。決して同類ではないが、不破さんといえば少年漫画好きで、そのお陰

で非日常適応能力が高いと自称しているのだ。そして実際、情報分析能力は高かつた。

予定はない。断る理由もない。それどころか、先生に辞職されても困る。赤羽カルマの存在は気に入らないが、答えは一つしかなかつた。

「私も協力するよ」

これもシロのわなだつたとしても。

2

何もかもがシロのわなだつたことを、ここに記しておく。私が日記をつけていたなら、今日はそう書いただろう。そして、「嫌な予感がある」としめくくつたはずだ。

今晚、市内の合宿施設に侵入した。宣言どおり不破さん（と人工知能）が突き止めた場所だ。調べによると、ある芸能事務所の持ち物で、所属する巨乳アイドルがちようど使っているということだった。「合宿は明日までだから、真犯人ならこの極上の洗濯物を逃すはずがないわ」

彼女は自身げに言い切る。そのとおりだと、私も、そして筆頭容疑者も思った。誰もがそう考えると、シロは計算していた。——ほとんどが彼のおもわくどおりに進んだのだ。

報道された事件は、もちろん彼の筋書きの一部だ。犯人は堀部イトナで、ただし今晚に限っては烏間先生の部下が使われた。とかく、先生はみすみす釣られ、わなにはまり、再び不利な条件での戦闘を強いられた。それでも先生は生き延びたわけだが。

今晚の結果は、つまり堀部イトナの三度の失敗を意味する。シロは力不足であるとして、子供に見切りをつけた。これが「嫌な予感」の種なのである。

「送つてくよ」

もう一つ。

改札の外で、私は驚いて振り返った。

「や、え、駅」

などと、そのまま声にしてしまったことは見逃してほしい。

「めつずらしー、驚いた？ 別の扉から出てきたんだよね。気づかなかつたんだ」

あざ笑つて見逃してくれないクラスメートは、赤羽カルマだ。

あれから、生徒六人は先生と一緒に柵ヶ丘駅まで歩いた。自然な成り行きだ。全員が最後まで一緒だったわけではないから、電車に乗る頃に二人きりになつてしまつただけで。忘れてしまいたいことだが、柵ヶ丘駅からは電車の方向が一緒なのである。どちらも一本で、赤羽カルマの方が定期券の距離が長い。

車内では会話はなかつたが、この駅に着くときは月並みな言葉で別れた。そうして、ようやく平穏を取り戻したはずだった。

「何でわざわざ」

尋ねつつ、ある解は得ていた。この駅は利用者が少くないから。夕方から終電にかけては、例に漏れず混雑が発生するのだ。私は、クラスマートが次の駅へ向かうのを、わざわざ見送つたことなど一度もなかつた。——今日も今日とて振り返らないことを、彼は予測していたのだろう。

「家までしばらく歩くんでしょ。夜の一人歩きは危険だつて、先生も言つてたじゃん」

それはそうだが、おまえにも言えることである。いや、この男の場合は、逆に不審者を気遣うべきだが。まともな判断がつくなら逃げの一手、そうでなければたやすく倒されることだろう。

そして私とて丸腰のようでミュータントパワーがあり、そうした反逆を起こさずともそこらの不審者を倒せる自信はある。逃げの一手なら更に可能性がある。どの力も發揮させられないほうが望ましいことだが。

「訓練の成績、俺より下じゃん。おとなしく聞いとけつて」

しかしこちらのミュータント事情など、彼が知る由はなかつた。

自宅の場所を特定されること 자체は構わないが、そこへ至るまでの道のりが嫌だ。と、感情的に考えるが、そう言つて断るわけにはいかない。そうとなると、大した理由がないではないか。

それでも、その程度のことを口にした。

「送つてくれても、そこから駅まで歩くことになるし、赤羽くんが帰るときには一人でしょ。時間がかかるし、危ないのはどつちも同じだと思うよ」

ということは、彼の想定内だ。

「え、それマジで俺に言つてる？」

あちらも返す手を持つてゐるわけで。どうも私は足元を見られている。だというのに、私はありきたりなクラスメートの装いをやめられない。

「——俺が誘つたんだし」

「うん、じゃあ、ありがとう」

とどめの一言がなかろうと、私は同じ返事をしたのだろう。

3

二人分の足音だけが鼓膜をたたいていた。静かな夜道だ。何だか奇妙で、時々所在なく空を見上げた。だが星はない。三日月はあれほど存在を主張してゐるのに。旧校舎からとは全く違う空だ。あの山は自然が豊かで、眺めもいい。大した明かりがないから、夜空が奇麗なのである。

しかし、この星の見えない空すら、アルファコンプレックスでは思い描けなかつた。

「——ここまで、いいよ」

私は小路に入る前に足を止めた。

「今夜はありがとう。家はもう、すぐそこだから」

この狭い道を、あと何度も曲がると本当に自宅に着く。

「そつか」

そう答えを返して、けれど彼は引き返そうとはしない。沈黙の後、尋ねると、

「今日シロが来るつてわかつてたでしょ」

「ええつ、あそこに？」

「——最近、成績良いじやん」

「ありがとう。でも赤羽君に言われると、ちょっと複雑」

「イトナ、どこ行つたんだと思う」

話がころころと変わった。

「家、とか」

それでも素直に返したのは、私にそうする以外の選択肢がなかつたからだ。しかし、これについては正直でなかつた。そうであつてほしいと祈つてゐるだけだ。

堀部イトナには帰る家がない。と思う。自営業だつた父親とその妻は、おととしに消息を絶つてゐる。親戚の家に預けられたようだが、改造人間が一々そちらへ帰つただろうか。なにせ触手は国家機密で、彼のメンテナンスは大がかりなのだ。

——嫌な予感がする。

シロの嘲笑が目に浮かんだ。

触手の改造人間を一箇月維持するのに、およそ火力発電所三基分のエネルギーが要る。などという情報が、つい一時間前に思いがけずもたらされた。

先生は知つてゐるようだつた。もちろんシロも承知のうえで切り捨てたということだから、何らの処置も施すつもりはないのだろう。——その様を見せつけられて、一人残された不良品がいかにも不調なまま闇夜に紛れるのを、みすみす見逃す担任ではない。ごくあたりまえに、生徒も、おとりにされた部下も、彼を探して、そして見つけられなかつた。

「心配だね」

一月に億単位のコストのメンテナンスをしないということ。その影響はいかほどか。

「おまえつて、ほんと、思つてもないことをよく言うよ  
「何のこと?——死んだら苦しいよ」

## 九月、そして体育祭

1

堀部イトナは死ななかつた。生きている。復学した、という言葉はほとんど不適切か。とにかく、ついに教室へやつてきたのだ。それも、もう大分前のことになる。

頭に触手はない。かわりにバンダナを巻くようになつた。教室ではよく電子工作をしている。今は私の左隣の席で、その成果物を操作しているところだ。

「清潔ホワイトは何に出るの？」

これは右隣。そして呼ばれたのは、不本意ながら私である

「借り物競争かな。誘われたんだよね」

体育祭が間近に迫つていて。六月の球技大会と異なり、E組も正式に出場を認められていた。個人競技のみという制約があるため、優勝は夢のまた夢、——なのではあるが、クラスメートは燃えに燃えていた。こんな風に話題になることも増えていた。

「ああ、そんな話もしてたつけ」

うんうんと納得げにうなづくこの男は、徒競走と棒倒しに出場する。徒競走は全員参加で、棒倒しも男子は全員参加なのだ。他の種目はさてどうだろう。

それより、

「もうコードネームで呼ばないでよ」

「えー、何。恥ずかしい？」

「恥ずかしい。一日だけだと思つてたのに」

イトナ君が来て間もなく、コードネームで呼びあつたことがある。生徒のみならず先生まで、全員が全員のコードネームを考えて、ランダムに選ばれたものを一日中名乗らされて、私の場合は「清潔ホワイト」だつた。本名を禁止されたため、授業でも訓練でも休み時間でも、はたまた放課後にまでそのふざけた名前で呼ばれ続けたのである。もう終わつたことはすが、時々中二半は私をコードネームで呼んだ。

「なんだ、気に食わないか」

とは、左隣から意外な横やり。

「気に入らないとかじやなくて、恥ずかしいよ。もう誰もコードネーム使つてないじやん。それより偵察はいいの、イトナ君」

今一番気を張っているはずのクラスメートは、だが無表情にうなずいた。

「録音中だからな。しばらく人は通らないし、カメラは三人がかりで見てる」

なるほど、A組の教室まで無事にたどり着けたらしい。

『コロコロあがり』だつたつけ

「そうだつたな。そつちのは『中一半』か」

イトナ君は、私を挟んで赤羽カルマを見た。聞かれて、彼はにやりと笑う。

「実は結構気に入ってるんだよね」

「狭間に伝えておこう」

「なるほど狭間さんだつたか」

「清潔ホワイトは俺が付けた」

「えつ

「おつ」

ぎよつとして左を見ると、涼しい顔と目が合った。触手から解放されて変わつたことと変わらなかつたことがあって、後者の一つが表情だ。脳の働きが悪くなつていたことは確かだが、元々寡黙なたちであつたらしい。

「——そうだつたんだ」

「持ち物が白くて、あと清潔そだつた。『隣の席の人』とどつちが迷つたんだが」

まだ復学から日が浅かつた。彼にはかなりむずかしかつただろう。右側で、ガタ、と椅子が音を立てた。

「残念、『シロもどき』はイトナに負けたのか——」

「寺坂君の『鷹岡もどき』は赤坂君だつたんだね」

あれはひどいあだ名だつた。髪型に体格に行動に、なにかと納得の

いくものでもあつたのだが。あだ名された本人は当然のように憤慨した。

私も、それと比べれば、幾分も良かつたのではなかろうか。いくら身の回りに白色が多いからといって、あのシロと一緒にされてはならない。——たつたそれだけが判断材料ではなかつたとしても。

「そつちは寺坂に伝えておく」

シロは堀部イトナを運用していた。その詳細を運用させていた子供は明かさなかつたが、先生の弱点は教えてくれた。心臓だ。いわゆる心臓があることを、シロは突き止めたのだという。

次にシロが来るまでに、三月を迎えるまでに、心臓を攻撃できれば、地球は壊されない。先生だけが死ぬ。

イトナ君が来て、選択肢が増えて、弱点が知れて、この教室の暗殺はますます盛り上がつた。そうして殺せるのなら、それが最善なのだろう。もちろん幸福なことに、時間はたっぷりあるのだ。

シロは三月まで来ないだろう。イトナ君より優れた素体を探して、調整に時間をかけて、そしてより確実な作戦を立てるからだ。そのためには、彼は三月の制限時間の間際を待たねばならない。——今度こそ生徒を殺すために。

先生を殺すために。

もう生徒であることに、こだわりはすまい。誰を選ぶかなどわかりもしないが、今度彼に目をつけられた素体は、イトナ君よりはるかに過酷な調整を受けて、終わつた後のことなど考慮もされないので。

「イトナ君」

「何だ」

イトナ君には守秘義務がある。

「借り物競争に出るかもしれないんだけど、そのときはよろしくね」

そもそも大したことを見られてはいられない。だから触手兵器の研究の実態など、当然、教えることもできないのだ。彼はただ先生の心臓を貫くためだけの武器だつた。

——よろしくと口にした私に、武器だつた子供は素つ気なく返事した。

体育祭、結局、私は借り物競走に出場した。イトナ君も一緒だ。男子から順に男女別だが、集合は同時だった。待機列は分かれていて、それぞれ三年生の列が一つはみ出す。一クラス多いのだから当然だが、露骨を通り越して異様なほど距離を空けられている。

A組から順にD組まで、あるいは横の下級生も、ひそひそと顔を合わせ、うかがうように時折こちらを見た。その中で決して振り返らないのが一人。先頭の三年A組。思い返せば、同じD組でとりわけ仲良くしていたクラスメートだ。どうやら正しくエースのA組に進級したらしい。——まさか暴力沙汰で自宅謹慎処分になるような人間と仲良くしていた過去など、忘れてしまいたいことだろう。

そうした考えにふけるうち、競技が始まつた。まずは一年生男子から、やがてイトナ君の番になる。A組の出だしは好調だ。一番にくじを引いて、彼は自分のクラスの席へ向かつた。残りの三クラスもたどり着くと、最後のイトナ君がのろのろとくじを引いた。らしくないうごきだが、ある作戦の一環なので、クラスメートも気に留めない。何が書かれていたのか、クラスの席からイエラビツチを引っ張り出すと、予定どおり最後にゴールテープを切つた。

私の番も来た。お題は「いちご煮オレ」なる謎の——多分、飲物だ。考へてもわからない。後ろの邪魔になるのは翻意でないので、私もまた席へ向かう。

クラスの席では、国家機密が興味津々に身を乗り出していた。

「お題は何でしたか」

ジャージに帽子にタオルに、何重にも巻いて姿を隠して、肌の色もヒトらしくして、先生は観客席にいる。大男と思うしかない程度にまでして、ようやく鳥間先生から許可が下りたのだ。競技エリアに近いから目立たないはずだと強弁する先生に折れた、とも言う。

さておき、この謎の飲物について尋ねると、渚君が答えた。

「煮オレならカルマ君が飲んでるよね」

いきなり最適解だ。非常に望ましくないことだが、耳ざとい彼の言葉で、それも特に親しくしているのだから、まず正しいだろう。幾ら

待つてもそこに他の名前がないということも、つまり、——いや、いつそ、ここになくてもいいのだ。借り物競争のお題にも一応のルールがあつて、必ず校内にある（ことが予想される）物でなければならぬ。だから、これが飲物であると判明した以上、校内の自販機を探せばいい。味を想像しづらい名前だから、飲むことに慎重にはなるが、飲めないものでもないのだろう。

よし、誰かに買ってもらおう。

——私の決意を他所に、渚君は友人を呼んだ。名前の挙がつていた彼は、笑いながらこちらへ来る。

「何。煮オレだつて？」

「うん。よく飲んでるつて、渚君から聞いたんだけど」

私は見たことがない。

「へー、ちょうど良かつたね。後で飲もうと思つて、買つてたのがあるんだけど」

「いちご？」

「ちょっと待つてて」

彼は返さずに背を向けて、またくるりとこちらを見る。手に何かを持つていて。ピンク色の缶ドリンク。いちごだ。

ロゴを認めてしまえば、こう切り出すほかない。

「もし良かつたら——」

「いいよ、貸す貸す。どうせ、すぐでしょ」

と、赤羽カルマは腕を伸ばして、差し出した手を抜かした。  
ほおに、

「冷たつ！」

ほおに、ぶつけてきやがつた。まるで氷水に漬けていたみたいに冷たい。慌てて離れると、してやつたりと笑つている。

「貸し一つね。後で返してよ」

そのまま飲んじやつてもいいけど。——などと続けられたとおりには、絶対にしない。

高々体育祭の種目だと、安易に引き受けるのではなかつた。コースへ戻る道すがら、押し潰されそうなほどの後悔を感じたが、一方で競

技は何もかも速やかだった。円滑にやりとりの済んだ最初の一人だつたようで、特に競り合いもなく、そのままゴールテープを切つてしまつた。だがスピーカーがゴールを伝えたのは、次、二着が決定したときだ。私には「おめでとう」も笑顔も向けなかつた係の生徒は、元クラスメートの彼女には平等の勝算を浴びせた。三位にも四位にも、はたまた五位にも。戻るのだつて早ければ早いほど良いはずなのに、その様子を離れた場所からとろとろと眺めている。

手には口の閉じた缶ドリンクがあつた。まあ、席に戻るのを遅らせる理由など、それくらいしかなかつた。

「一等賞おめでとう」

借りを作つてしまつた相手が、ゴールを少し離れた所で私を待つていたのだ。E組の席からは遠かつた。自意識過剰でもないだろう。事実、私が飲物を返せば、彼は並んで席へ引き返したのだから。

初めての賛辞に、私は素直に返した。

「ありがとう。飲物も。おかげで一位になれたよ」

「どーも。——飲んだことないんだっけ」

彼はプルタブを引く。

「うん」

名前も初めて知つたくらいだ。恐らく自販機にしか並ばない商品なのだろう。

「自販機、使わなそくだもんね」

「あまり確認しないかな」

確認したところで、進んで手に取ることもなかつただろう。こうした機会でもなければ。いちごオレならともかく、いちご煮オレとは。いちごを煮て、牛乳と混ぜる。果物を煮るというとジャムを連想するが、そうするといちごジャムを牛乳と混ぜたような味なのだろうか。

駄目だ。想像がつかない。しかし尋ねたときのクラスメートの反応から察するに、メジャーではないものの、こんなものがシリーズ展開されているという。根強い人気というやつがあるのであるのだろうか。それとも、

「じゃ、飲んでみる?」

思案を遮つて、隣から口の開いたドリンクが差し出された。流れるような動作の奥に、桃色らしい液体が見える。まだ口はつけられない。ただ開けられただけ。

などと確認はしてみるが、

「悪いよ、それ赤羽くんのでしょ」

飲むわけがない。当然の反応だ。ありきたりなクラスメートとしても。

「いや、その俺が飲んでいいよって言つてんだけど」と、なぜか、彼は考えなかつたらしい。

「飲みたくて買つたんじやないの」

「え、全部飲むつもり? 精々半分くらい。せめて一口。どつちにしろ、俺は残つた分を飲むからさあ」

「せめて、つて」

「口はつけてないよ」

そんなわかりきつたことを問題にしているわけではないのだ。というか、問題などない。ただ飲みたくない。強いて言えば、それだけが問題だ。あるいは、珍しく食い下がつてくるのが気にかかつた。口をつけていないどころか、小細工の一つもないことを、私は承知している。得意のいたずらの可能性が、今回はゼロに等しいのだ。だからこそ怪しい。

相當に人を選ぶ味であることは考えられるが、それでも一定数が飲めない味なら、この学校の自販機に並ぶことはないだろう。ということで、一応は飲めるはずだつた。全く想像もつかないけれど。

「ほら、なんにもしてないし。ただ開けちゃつただけ」

「うん、それはわかつてるよ。あんまり飲みたい気分じやないんだよね、そもそも」

「——さつきの貸し」

何でもないことのように、彼はその権利をかざした。

「こんなことで?」

返してしまつた言葉は本心だ。

「こんなことで」

赤羽カルマは肯定する。

「ま、あわよくば煮オレ飲みを増やそうつて魂胆があるとでも思つて。そもそも、これ貸した借りなんだし、これくらいで済ますのが妥当じゃない？」

言われてみれば、そのとおりだ。ただ前提に彼という貸し主がいるから難しく考えてしまつただけで。

まるで自分を納得させるように、そんなことを考えた。こんなことで清算できるなら、それに越したことはないのである。あまり引き下がつて複雑にしてしまうのもまずい。

ただ口の開いていたそれを、左手で受け取つた。前方の視線を無視して、口に付ける。傾ける。ぐくり。そんな風に喉を鳴らして、口を離した。

「これでいい？」

「どうだつた」

私には一口で十分だつた。好んで飲もうとは思わない部類の物だつた。味は独特で、恐らく煮オレシリーズに共通のもの。と思えば、他の味を飲む気にもならない。

とりたててまずかつたわけでもないので、

「好きじやなかつた、かな。おいしくなくはないんだけど」

もつとおいしい味のする食べ物を、今は山程知つてゐるのだ。

「何その感想」

赤羽カルマが笑う。私はもう口を付けずに、返そうとして、

「そういえば、拭く物持つてなかつた」

「ん、いいよ」

「持つてる？」

「持つてないけど、ぬるくなるじゃん」

受け取つて、彼はそのまま口をつけた。

エ、と、私の開いた口など氣にも留めずに、傾ける。ぐくり。そんな風に喉を鳴らして、口を離した。

声が出せなかつた。衝撃のあまり。このような形で、このように、

こんな風に、危機感の欠如した姿を見ることになるとは、思いもしなかつたのだ。それなら毒でも塗つておけばよかつた。

こんな、正気の沙汰ではなしえない、こんな、致命的な。

あるいは、この私の反応が狙いだつたのだろうか。いや、まさか。だつて、私は自己暗示をかけている。私の表情は絶対に致命的には崩れない。私の声は絶対に致命的には揺らがない。私の喉は絶対に致命的な発声を許さない。私は絶対に、ありきたりな、誰かのクラスメートだ。

そうした表情をしているはずだ。そうした声を出したはずだ。そうした言葉を紡いだはずだ。

もし予定どおりA組に進級していれば、あの元クラスメートとは今なお良き友人だつたことだろう。そして一緒に同じ表情を、ありきたりにE組に向けて、ありきたりに脅えて、ありきたりにあざ笑つたりしたのだ。そんなことを、ふと考えるような、ありきたりな二年E組。だからこの場合は、この狂気に満ちた男を、いつたい、けれど。私は幸福です。ゆえに、ありきたりでないことを私は選べない。

何も起こらなかつた人間の顔で、奇麗な唇が満足げにゆがめられた。

「やつぱ、うまいね、これ」

## 十月、又は中間テスト

1

中間テストがあつた。毎度のごとく成績発表は翌日で、今日、クラスメートの表情は浮かない。理由は明白だ。数字が芳しくなかつたのである。原因もわかりきつていた。

テスト直前のちょうど二週間、先生が授業をしなかつたのだ。それとも彼なら別の授業をしたのだと言うだろうか。——かわりに、E組は市内の保育施設にかよつた。クラスメートの一部が暗殺のための技術で不幸にも部外者を負傷させてしまつたことが、事の発端だ。二週間の入院を余儀なくされた被害者の代わりに、彼が園長を務める施設で働いてきたのだ。

重い空氣に押し潰されて、というわけではないけれど、私も気分が重い。二週間の課外活動にも良い側面はあつたのだ。連帶責任のやるせなさも、子供の相手も、当分は御免だが。それでも、二週間も赤羽カルマから離れられたと思えば、全てを納得ずくで受け入れられる。中間テストの成績にも大した意味はないのだし。

昨日、隣の席で涼しくテストを終えたクラスメートは、ここでは顔色を見せていない。おもんぱかることでも覚えたのだろうか。おめでたいことだ。本当に。

荷物をまとめて立ち上がると、彼も椅子を引いた。山を下りる最短ルートは一つ、ということは、必然的に同じ道を歩くことになる。そこから校門までを無言で過ぎて、

「何考えてたか、当ててあげよっか」  
「おめでとう、つて思つてたんだよ」

「どーも」

教室では、なかなか口にできなかつた言葉だ。できたからといつて素直に言つたかといえば、また別だが。

こうして並んで帰るのも久しぶりだつた。昨日も、あの二週間も、いや遡れば体育祭の前が最後だつたのではないか。偶然にタイミングが重なるか、それとも誘われるか、というのがパターンだつた。何

も話さないわけにはいかなかつた。彼と帰ることになるとき、たいてい渚君や奥田さんがいて、茅野さんや杉野くん、神崎さんもいた。今の状況は、だからパターンに照らせば珍しい部類に入る。

この珍しいパターンでの前例どおり、私たちは、ここでは他に話をしなかつた。そのうち山道を抜けた。

間もなく本校舎の校門に差しかかるというところで、知つた声を聞いた。ちょうど進行方向からだ。私たちは顔を見合させた。不穏な気配があつたのである。

先に動いたのは赤羽カルマだつた。しかたなく続くと、そこではクラスメートの三人がA組の五人と向かい合つていた。クラスメートはもちろん、五人組にも見覚えがある。そもそもA組だとわかつたのだつて、彼らが五英傑と呼ばれているからなのだけれども。待ち伏せされていたのか、はたまた偶然か、浅野君の取り巻きの方が、口々にE組の成績をけなしていた。

「この学校では成績が全て。下の者には上に対しても発言権がないからね」

顔面偏差値も評判の男が、きざつたらしく言った。そういうことを口にしてしまうから、

「へー。じゃ、あんたちは、俺に何も言えないわけね」

隣人がA組の前に立ちはだかる。取り巻きは言葉を失つた。浅野君が一位で、この男が二位で、その下は順当に取り巻き共が六位までを独占していたはずだ。まさか学年順位を確認しなかつたわけでもあるまいに。

隣人は畳み掛けた。

「今回、本気でやつたの俺だけだよ。他のみんなは、おまえらのために手加減してた。——おまえらも毎回負けてちゃ立ち場がないだろうから、つて」

彼がするりと通り抜けても、浅野君は終始無言で、ただ二位の男をにらんだ。続いて、私たち全員が本校舎から離れると、クラスメートの一人、渚君がこちらを見た。

「一緒だつたんだ」

「うん。けがはないみたいだね」

「ありがとう。大丈夫だよ」

「そうそう、ねちねち言われてただけだからさ」

と、こちらは渚君と一緒にた杉野君に、

「邪魔したな、カルマ！」

もう一人のクラスメート。彼に「どんでもない！」と叫んで返しそうになるのをこらえて、私は前を行く男を見た。渚君もいることだから、どうせこれから五人で帰ることになる。会話が増えることも、思春期の同級生の下世話なにやけ顔も、どちらも煩わしくはあるが、二人口きりで帰ることに比べたらはるかに良い。たとえ駅までだとしても。

ところが、

「じゃ、またあしたね」

「えつ」

にここにこと、赤羽カルマは手を振った。三人のクラスメートに。私に対しても明確に手招きを見せる。

「またあしたね」

追い打ちをかけるように、渚君も手を振った。そんな自覚もないだろうけれど、彼に残りの二人も続いた。見送られるようになつて、横に並ぶ。

「まつすぐ帰らないの？」

「予定ないでしょ、どこ行きたい」

「いや、行きたいも何も、聞いてないし」

「——ならカラオケにするか」

その場限りの冗談ではなかつた。本当にカラオケに来た。初めてではない。家族ともクラスメートとも、ごくあたりまえの付き合いの一環で来たことがある。だが、赤羽カルマとは初めてだつた。何を歌うかも想像がつかない。いや、そもそも歌うのだろうか。

彼が手続をする間に考えた幾ばくかのことは、待ち時間もなく案内された部屋で霧散した。テーブルにジュースを置く前に、彼がコントローラーを取つたからだ。いつものように、もはや何を考えても無駄

らしい。全て荷物を置いて、しばらく、彼は操作の一つもしなかった。

「歌わないの」

さすがに問うた。

「えつ、歌うつもりだつたの」

「カラオケにするつて言つたの、赤羽君じゃん」

「それもそうか」

しかし何もしない。本当に何をしに来たんだ。そう尋ねれば、今度はカラオケと返つてくる。らちが明かない。

「先に入れるよ」

「どうぞ」

——言われて、本当に曲を入れてやつた。予約したイントロが流れたのでマイクを取る。歌う。そして一曲を終えたが、次の曲は流れなかつた。コントローラーの位置も変わつていない。かわりにジユースが半分になつていた。

「うわー、おもしろみないね」

「聞くだけ聞いてそれ？」

「次の曲入れなよ」

「赤羽君が入れなよ」

「そうきたか、しかたない」

彼は手早くコントローラーを操作した。すぐに曲が流れた。演歌だ。覚えがあるような、ないような。だが、前奏が終わつても、彼はマイクを取らなかつた。

「歌わないの」

「歌えねえもん。履歴から適当に選んだだけ」

なぜ、そんな曲を入れたのか。いや、そもそも、歌わないのならなぜカラオケを選んだのか。私はまた無駄なことを考えそうになつた。

「——さつきの覚えてる?」

くしくも張本人のお陰で思考は回避されたが、はて、さつきのとは何だろう。と、正直に聞き返してみる。

「この学校では成績が全て」

「——下の者は上に対して発言権がない」

「数学百点で、残り九十八点の、四九二一点なんだけど」

なるほど、言わんとすることはわかつた。

「それ言わなきやだめ？」

「べつに恥ずかしいとかないでしょ」

私にも得点の内訳を明かせというのだ。全く、先ほどのクラスメートとはひどい扱いの差だった。

「いや恥ずかしいってば。——四七五点だから何も言えないんだけど」

その時、演歌の一一番が終わつた。彼は二番の歌詞が始まると黙つていた。

「そうだ、好きな食べ物がカレーってマジ？」

私はうなずいた。彼に話した覚えはないが。ジュースが半分になつた。彼は笑う。良からぬことをたくさんでいるときの、例えば奥田さんから新しい作品を受け取つたときと同じ顔だ。だからといって何をしたかといえば、ジュースを飲み干しただけだつたけれど。

「これで最後にするけど、歌わないの」

「歌わねえよ。元々歌うつもりなんてなかつたし。そつちも気分じゃないでしょ」

そのとおりではある。

「——ああでも、曲は入れたいかも。殺せんせーにすっぱ抜かれるからさ」

「そういうことなら、ランキング順に入れる？」

先生のストーキングはよく知られている。のぞきも盗撮もお手の物。なかでも生徒の恋愛模様の妄想が好きで、長じて卒業アルバムにノンフィクション恋愛小説を載せようとしている。ゆえに、例えば生徒が男女二人きりでカラオケを利用する、などというできごとは格好のネタになるのだ。今だつて、扉や壁に張り付かれているかもしれない。

マツハ二十のホラーシーンはさておき、ふたりでそれぞれコントローラーを操作して、適当に選曲した。入れたばかりの曲が流れ始める。さすがはランキング一位。はやりというより定番の、聞き覚えの

あるサビが、小さな部屋に響いた。

「わかばパーク、楽しそうだつたね」

「初めてのことばかりだつたからね。あんな機会、もう二度となさそう。——そつちの劇も評判だつたよ」

「あれね。やっぱMVPは茅野ちゃんと奥田さんかな」

テスト前にもかかわらずかよつた保育施設・わかばパークには、うんざりするほど子供がいた。そのくせ、従業員は例の園長と女性職員のたつた二人だ。普段から人でが足りていなることはもちろん、他にも不備は幾つも目についた。

一方、E組には三十人の生徒がいた。彼らは、うち一段とひどかつた建物の老朽化を中心に、問題に対処しようと考へた。ちょうど、鳥間先生の部下に建築士の資格者がいた。当然リフォームにかかりきりになるわけにはいかないから、と瞬く間に班が形成されて、赤羽カルマはレクリエーション班だつたのだ。

「魔女のクロロホルム、本物だつたんでしょ」

読み聞かせに紙芝居にワーカーショップに、色々と手を出していたが、劇は特に好評だつた。魔王テラサカに囚われたカエデ姫を騎士カルマが助けにいく王道、最後、魔王は魔女オクダのクロロホルムで眠らされる。台本がどうなつていたかはともかく、最後、彼は寝たふりどころか、本当に眠つていたように見えた。

騎士役はあつさりと肯定した。ついでに、

「殺陣やつたじやん。あれも台本じや寸止めつてことになつてたんだよね」

とにかく寺坂君がひどい目に遭つた。まあ、茅野さんは手慣れた様子で非常にうまく場を盛り上げたし、魔王は倒されたし、大きな問題も起きなかつたので、めでたしめでたし、なのである。

「そつちもカレーうまかつたよ」

「ありがとう。原さんたちにも言つてあげてね。きっと喜ぶから」

「考え方」

赤羽カルマは無表情にうなずいた。

それから、たわいない話をして一時間を過ごした。一度と歌わず、

何事もなく。

「カレーのどこが好きなの」

「どこつて、そんなの言い切れないよ」

「つまんねえの」

「——嫌な人」

「ずっと、そう思つてたでしょ」

カラオケをあとにして、無言で道路を歩き、電車に乗る。いつかの  
ように、改札で再び会うことはなかつた。

しかし再会は想像よりずっと早く訪れた。

「おはよう」

翌朝、最寄り駅のホームに、彼は参考書を片手に立つていた。

2

トイレに寄つたのだと告げたクラスメートは、翌々日まで最寄り駅  
にいた。昨日と同じく偶然だと笑つてみせるが、どうだか疑わしいも  
のだ。いつだつて、赤羽カルマは私の後に教室に来るものだつた。理  
由はわからないが、信じろと言われても無理な相談だ。とはいえ、こ  
こから学校までの道筋は同じであるため、一緒に登校するしかないの  
が現実だつた。

「プレゼント考へてきた？」

意に介さず、彼は言った。

「無難なものでよければ」

昨夜、クラス内で「ビツチ＆鳥間 くつつけ計画第二弾」が共有さ  
れた。第二とあるからには第一もあつて、それはちようど、イエラ  
ビツチが鳥間先生へ向ける恋情が明らかになつた頃、沖縄旅行の最後  
の夜に実行された。二人きりのディナーを、生徒でそれらしく演出し  
てやつたのだ。

そして今回の目標は、彼女の誕生日を祝うこと。クラスメートたち  
は、鳥間先生にプレゼントされたら喜ぶだろうと考えたらしい。単純  
な行為と、下世話と、そして謎の責任から生じた計画である。

誕生日自体はどうに過ぎていた。ちょうど例の二週間の、ある一日  
だつた。そもそもテスト前だつたこともあり、生徒がそちらへ関心を

向ける余裕はなかったのだ。日頃多忙な烏間先生は言わずもがな、だらうか。ともかく、そういうことだつた。

早くも決行は翌日、つまり今日。放課後の買い出しと、烏間先生の説得が肝だ。

「お菓子か花かな」

「かなり絞つたね」

「予算が予算だから」

などと答えながら、難問以外の何ものでもないように思う。昨日の今日といえ、予算五千円は大問題だ。前提として、プレゼントを贈ることになつてゐる烏間先生は大人で、贈られることになつてゐるイエラビツチも大人。一般的な感覚として、大人の交際コストはそれを上回るはずだ。そのうえどちらも、特にイリーナ・イエラビツチというプロの殺し屋はかなり稼いでいて、彼女の金銭感覚はセレブのそれに等しい。

いや、幾つかのラブストーリーを真に受けてみるなら、大切な相手からもらえるものは、真心さえ籠もつていれば何だつていいという。

——だが、そこが、何よりの問題なのだけれど。

「これでも無理あるかな、つて思うんだよね」

「花は駄目なの」

「烏間先生が用意すると思う? 偏見だけど」

「言えてる」

「例外的におそろいは効きそうだけど。それでも烏間先生からつていふのは、ちょっと想像できないな」

「——よく考えてるじやん」

「買い出し班になつちゃつたからね」

昨日のうちに、粗方のことは決められた。だが肝心のプレゼントについては、決定打が見つからず。よつて、美的センスに一定の信頼がおけるとして神崎さんに白羽の矢が立ち、巻き込まれる形で四班が買い出し担当になつたのだ。

「正直、無理があるけど。どうしても買うなら花かな」

「いつになく正直」

「本当のことだよ。沖縄のデイナーとは違う。趣旨がわからなくなるけど、どうせならきちんと私たちから贈った方が、勝算があるよね」「でも、やるんだ」

「もう決まったことだから」

2

放課後、買い出し班は、悩み抜いて結局は花を選んだ。私の提案ではない。最後までプレゼントに関しては何も決まらなかつたところ、花屋が現れたのである。偶然通りがかつたと言う方が正しいか。

とにかく、花屋に話しかけられた。

「やつぱり、そうだ。ねえ、君たち!!」

彼は住宅街から通りへ出る道で移動販売をしていた。愛嬌を感じさせる男だが、誰にも知った風に呼び止められる覚えはない。と、疑問を抱くより先に続けられた言葉で、渚君と杉野君が反応を示した。いわく、二週間前に救急車を呼んでくれた人である。

男は二週間も前のできごとを覚えていて、この近辺にはありきたりな制服の一団に、当時居合させたたつた二人を見いだしたらしい。事の顛末を聞いて、表情を和らげた。

「そつか、大事にならなくて良かつたね」

——ここまでが花屋にしてみたらサービスのようなもので、

「それと今、プレゼントが欲しいとか言つてたね。——大人にあげるにふさわしい」

うなずいた神崎さんに、商売人は一輪の花を差し出す。突然のことには顔を赤らめる少女を前に、もつともらしい言説も付いてきた。——

これが中々の説得力で、満場一致でプレゼントが決定した次第だ。教室に残してきたクラスメートからは全てを任せられているため、一々確認を取るまでもない。あつという間に五千円と引き換えられて、神崎さんの腕の中で花束が輝いた。

「きっと喜んでもらえるよ」

花屋はほほ笑んだ。穏やかな声だ。どこか落ち着かされて、それどころか安心すら覚えてしまう。まるで花のようで、それ以上に先生に近しいと思つた。

しかし花屋の言葉に反して、あるいは予想どおり、イエラビツチが喜ぶことはなかつた。計画は失敗したのだ。勝算など端からなかつたのだから、驚くことでもない。とはいえ、考えうる限り最悪の道筋をたどつたと言える。

鳥間先生はただ渡すのみならず、「堅物」といういつかのコードネームにぴつたりの言葉をも投げかけた。

「色恋で鈍るような刃なら、ここでしじ」とする資格はない」

とは彼女が去つた後のことだが。——彼女は、彼と言葉を交わすやいなや、我に返つた。冷静になつてみれば、鳥間惟臣が誕生日に花を贈ろうなど考えつくはずもない。そうと気づけば、もはや誰がしくんだかは、考えるまでもなかつた。

あつけなくたぐらみが露見し、当然の結果としてイエラビツチは機嫌を損ね、教室から出ていった。

「ほんとに失敗したね」

赤羽カルマが表情もなく言つた。

「心配だね」

「すぐ、うそつく」

「いや、ほんとだつてば。もう三日だよ」

あれから今日まで三日間、彼女は姿を消したままだ。あの時は、日をまたげば、などと楽観していた。だから鳥間先生はもちろん、生徒も担任も、追いかけることをしなかつたのだ。

しかし三日。連絡すら取れずにいる。

授業の進行に困るわけではない。彼女の担当は英語の授業の半分だけで、それも元は担任の管轄だつた。だがクラスメートが心配しているのは、授業のことなどではないのだ。

「まあ、大人の気分転換には時間がかかる、つてことらしいけど」

「あー、殺せんせー、そんなこと言つてたつけ」

なまじ生徒より自由度が高い分、特にあのセレブなら思い立つて二泊三日の旅行に出るくらい、全く自然である。マツハ二十の改造人間は論外にしても。彼はこの放課後、サッカー観戦にブラジルへ飛び立つたばかりだ。

何にせよ、軽率な判断が最悪の事態を引き起こすのでなければ、それで構わないのだが。もう三日。まだ三日。気分転換で済んで、何事もなくサッカーの試合が終わって、そして鳥間先生も無事にしごとを終えて、明日が来るのなら。

——あの花は、まだ教室にある。飾られることはないだろうが、捨てられることもない。花屋から買つたときの、そのままの状態で、何となしに放置されている。

危機感は確かにあるのに、しかし燃やそうと提案することはできなかつた。もう手遅れだと考えたからか、それとも、私は何もしないからか。

「帰り、花屋寄る？」

前提を飛ばして、赤羽カルマが尋ねた。視線をたどつたのだろう。でも、私はうなずかない。それが当然のように、一緒に帰ることの否定でなくなつてから、どれほどたつのか。

「最近よく見てるから」

「あの花屋さんのこと、思い出してただけだよ」

その時、誰かが廊下で足音を立てた。

3

横で幾度もほうきの柄が振り下ろされた。物の壊れゆく音がうるさい。足元に、三日前の花束が転がつている。私は小刻みに手を動かして、花弁を片付けた。向かつて最後列、人工知能がイエラビツチの姿を映している。

最悪の計画が最悪の結果を導き、最悪の事態すら引き起こした。この教室で教師をやっているイリーナ・イエラビツチという殺し屋が人質に取られたのだ。それが真であるかはさておき、どうとクラスメートが認識してしまつたことが、まず最悪だ。

画面の奥の人質は、手足を縛られ、箱に眠らされている。先程受け取つたばかりの、ごく最近の写真だ。大きなけがは見られない。

犯人は「死神」とありきたりに呼ばれる殺し屋だ。しかし業界で死神と聞けば、名前も声も姿も形も誰も何も知りもしない、特定の殺し屋を指すという。それが、この教室に来た。——花屋の装いで。

イエラビツチを人質に取つて、十中八九、E組全生徒をもそこに加えるつもりでいる。私たちという人質は、間違なく先生に有効だ。

磯貝君が私を呼んだ。

「B班いいか」

「ビッヂ先生を助けるグループだよね」

自称・死神の要求はこうだ。今夜十八時までに生徒全員で指定の場所に来ること。他言ないこと。指示に背けば、人質を殺し、今度は生徒の中から人質を選ぶ。そうして指定された地点には、ある建物があるらしい。

指示に背くべきだ。行くべきでない。せめて先生に知らせるべきだ。密室に閉じ込められる以上の最悪を想定すべきだ。死神は確實に先生をしとめるつもりで、そのためなら手段を選ばないだろうから。だから、イエラビツチを見殺しにしよう。

そうしたことを言うべきだつた。決してこの私は言わないけれど。自称とはいえ、さすがは死神。たとえどれほどの悪条件を突きつけられても、生徒たちにこうした選択が存在しないことを知っているのだ。

「床片付けたら、片岡さんのどこに行くよ」

こちらも、さすがに作戦くらいは立てる。状況によつては三手に分かれよう、とか。戦闘に秀でたA班、人質を助けるB班、偵察等情報収集担当のC班。

「よろしく。それと床、ありがとうな」

「ううん。戻ってきた鳥間先生が、誰もいないので不思議がつてくれればいいんだけど」

磯貝君は苦笑いを返した。

顔を上げると、既に大半のクラスメートが体育着で、三箇所に分かれている。私も着替えなければ。足元は、もう奇麗なものだつた。外も汚されていない。せめてもの抵抗として、窓は早々に閉めておいたけれど。いくら先生の嗅覚が優れているといったつて、サッカーの試合が終わるのは数時間後だ。

「多分この先が、ビッチ先生が捕まってる部屋」

何時間も待つことはできなかつた。私たちは、のこのこ敵地へ飛び込むしかなかつたのだ。今はその地下。乗り込んだ途端、地上の建物全体が昇降式エレベータだつた。そのしあげに無様にやられて、見かけ以上の空間に閉じ込められている。

その一画で、B班は扉に爆弾をしかけていた。脱出には死神専用虹彩認証をクリアする必要があつても、作戦開始一分足らずでA班が全滅しても、諦めるわけにはいかないのだ。三分の一で無理なら三分の二で。

二十九人が束になつても、もしイエラビツチと合わせて三十人だつたとしても、死神一人倒せないことはわかりきつているのに。

はるか前方で爆発音がした。班員が突入する。見張る廊下には他に足音も気配もない。

「ビッチ先生！」

クラスメートは口々に安否を心配した。まだ死神の影はない。

「ビッチ先生は解放できたよ」

「こつちは異常なし」

見張り役同士、確認の後、部屋の中では方針が固まつていつた。まだ無事らしいC班と合流して、A班を救出しつつ脱出。イエラビツチを背負う杉野君を守りながら、戦闘に男子をおく、と。

指示されたとおり、男子が先に出てきた。まだ外に敵はない。気配がない。消している可能性は低くないが、だから警戒すべきは、人質その人だつた。

ドサ、と、誰かが崩れ落ちた。背後だ。その音に、クラスメートは順々に反応して振り返る。通路に出ていた男子も足を止めた。合わせて同じ方向へ目を向ける。

「六箇月くらい眠つてたわ。自分の本来の姿も忘れて——」

彼女はいたつて健全に立ち上がつた。両手にハイジエッター、足元に主力の二人。それさえなければ、クラスメートは皆、手放しに喜んだだらうに。

仲間が続々と倒れた。これだつて一分とたたないうちのできごと

だつた。彼女はちょうど出入り口で、ぴたりと足を止めた。

「降伏のつもり？」

「はい、降伏です」

私は挙げた両手を、愚か者にもわかるように、ひらひらと振った。スタンガンにモデルガン、催涙スプレーに爆薬、はてはスマートフォンまで、所持品のほとんど全てを足元に落としてある。わけのわからぬ薬で眠らされるより、よほど良い。

彼女も武器を下ろした。

「ずっとそうしてなさい。どうせ彼にはかなわないんだから」「わかっています」

答えた後ろに、男の声が響いた。

「君一人に負けちゃったか。——そつちの君、全部拾つてもいいよ」花屋だつた男が笑っていた。

「この子たちと僕らとじや、住む世界が違うんだ。わかつただろう」「ええ。やっぱ組む価値がない」

殺し屋の女は、ちらりと私をうかがつて、そして部屋の奥へ目をそらした。

その後、また僅かで全てが決した。らしい。

「あつちは降伏ですって」

「良かった」

「着いてきなさい。御褒美に、一番最初に手錠着けたげるから」

「それ、とつても幸福ですね」

# 十一月、又は進路相談

1

月をまたいでも、朝の駅には赤羽カルマがいた。毎朝彼は参考書を読んでいるのを、私に気づくとバッグにしまう。今日も変わらない。電車が来るまでに時間がないのも、いつものことだ。

挨拶だけすると、すぐにアナウンスが響く。そのとおり、続けて轟音がやつてきて、電車がとまる。特に会話もなく乗り込むと、私たちはどうちらからともなくつり革をつかんだ。扉が閉まる。

発車してからも、やはり無言だ。彼は今度はスマートフォンを操作していく、私は本を読んでいる。ようやく発声したのは、降車駅を次に控えたときだつた。

「次」

ほとんど同時に顔を見合わせて、本をしまう。バッグを閉じて、窓の外に流れる景色を何となしに見る。近づくにつれ、工事現場が目につくようになった。次の三月を連想せずにはいられない。

「ねえ、もうすぐテストじゃん」

駅が見えて来た頃、彼がこぼした。話し相手は私しかいない。うなずくと、ちょうど電車が止まつた。

「勝負しようよ」

それはテストの点を競うということか。尋ねることは、すぐにはできなかつた。扉が開いたからだ。外の喧騒と降車する足音とが混ざり合つて、音が奪われる。

尋ねることができたとき、私たちは改札を抜けていた。  
「テストで勝負つつたら、そうでしょ」

赤羽カルマは小馬鹿にした笑みを浮かべている。そんなことは、わかつてているのだ。だが、

「そんなの勝負にならないよ——」

前回の結果だつて。と、続けることはできなかつた。目が合つた。口元とは裏腹に、そちらはちつとも笑つていない。作り笑いが深まる。

「そんなこと、ないってば。一学期中間は七十点でも、期末は九十、前回もあんなことがあつたのに九十五点じやん。次は百点つしょ」

「平均点の話？」

だとしたら、どんな理屈だろう。彼は肯定した。

「悪い話ばつかじやないとと思うけど。前の期末覚えてるでしょ。A組とやつたやつ、あれやろうよ。今回は個人だから、単純に点数を競つて」

「総合点の高い方が、低かつた方に一回分の命令権を得るつて？」「どう、やる気出ない？ 僕は出る。——どつちにしたつて、トップは取るんだけど」

続いた言葉が嫌みだが、なぜか、とにかく勝負をしたいようだ。各教科平均五点以上勝つている相手に対して。そしてどうも、命令したいことがある、と。

ろくなことがなさそうだ。

理性は、そう言つていた。

「なるほど早めが良いわけね」

「そ。今は無理でも、こつから一箇月がんばれば、おまえも満点トップ取れるかも」

「それで、赤羽君も同じだけ勉強して、引き離しにかかるのかあ」  
今度は彼は返さなかつた。

私は唾を飲んだ。

「命令はどんなものでもいいの」

「あの時と一緒だから一つだけど」

「要求は一つだけ、どんな内容も可」

「俺を殺すとかは、殺せんせーがいるから無理だと思うけど」

「そんなことしないよ」

「要は私が満点を取ればいいのだ。

「わかってるじやん」

クラスメートは、にたりと笑つた。

祭より、——手元の紙切れに目を落とす。氏名と、学校の名前と、職業を二つまで書く欄がある。志望校と、将来の夢というやつだ。後者に関して、まさか先生がそうした曖昧を放置してくれるとも思つてはいなけれど。

ペンは志望校までで止まっている。クラスを見渡しても、全員がすんなりと埋めた様子はない。そうした中、隣の席のクラスメートは左右どちらも、わりにさりと書き上げたようだつた。

——まだ余裕があるとはいえ、はつきりとした将来の展望はない。そもそも来年の十一月が来ない虞すらあるのだが。

クラスメートが順番に、担任との二者面談のために教員室へ呼び出されている。右のクラスメートは適当に済ますと言つて教室を出て、本当に速やかに戻ってきた。それからまた数人が教室を出て、私は空欄を抱えたまま教員室の戸をたたく。

「さあ、座つてください」

「はい、先生」

「書けましたか」

「志望校は」

「——ほう、柵ヶ丘ですか」

先生は用紙を触手で持つた。

「どうして」

「ここを受験したのは、元々は父が勧めてくれたからなんです。特別強化クラスなんでものがあつても、まあ落ちないかなつて。いざ入学したら、暴力沙汰に巻き込まれちゃつたんですけど。——ショックを受けたみたいで。

当時の状況が状況だから、元の担任が復帰を受け入れてくれるとも思えないですし、本校舎に戻りたいとも思つてはいなんですけどね

「それもまた、一つの親孝行の形ですね」

いつか誰かがつぶらだと表現した瞳が、まっすぐこちらを見ていた。それだけではないですね、と言つてはいるようだつた。そうだつた。あるいは、全てが出まかせだつた。言うべきか言わないべきか、

僅かに迷っていたことまでも。

けれど。

「先生は『死神』という殺し屋を『存じですね』  
そんな聞き方をしてしまった。

「覚えていますよ」

当然のよう先生はそう答えた。先生は、その殺し屋に殺されかけた張本人ですからね。そんな体で。

「そうじやない人のことは?」

「先日のことではないんですね?」

「違います」

「そうですか」

「——突然ごめんなさい」

頭を下げるしかなかつた。先生がいつもと同じ表情であるのを見ないようにした。どんな表情であるのかも見えないけれど、彼は許した。

「良いんですよ」

「もう尋ねないことになります。あなたの暗殺が終わつたときのことを考えました」

先生は黙つていた。

「そしたら、もつとショックを受けると思つたんです。だから、せめて私が望んでここにいたことを証明しようと思って」

この私はそういう人間なのだ。ありきたりに、じごく当然のこととして、親孝行の道を選ぶ。

「なるほど。良い考えです。ですが、それなら。あなたの学力なら、難関校を目指す選択肢もあることも考えてみてくださいね」

「それは——ものすぐがんばらないといけないですね。ありがとうございます」

「いいえ」

「志望校から考えるのも良いですが、職業は——」

先生は用紙を私へ見せるように置いた。指がわりの触手は、二つの空欄を指している。

「まだ考えられてなくて。やりたくないことはあるんですけど」

政治家に芸能人、医者は、絶対に選択肢に數えたくない。ミュータントがやるにはリスクが大きすぎるのだ。

理由はぼかして業種だけ伝えると、彼はうなづくように頭を動かした。

「目立つことが苦手ですか」

「実は」

「苦手科目がない一方、英語が得意ですね。それに、よく本を読んでいます。管理社会に興味があるんですか」

「確かによく読みますね」

「A-Iが登場するものが多いんですねえ」

「そんなところまで見てたなんて、さすがです」

「マツハ二十の教師として当然のこととしたまでですよ」

先生は胸を張るが、決して褒めたつもりはない。とはいって、彼が國內の中学三年生用参考書・問題集の類いを全て読んでるものにしていたとしても、驚きはすまい。マツハ二十の教師なのだから。

「例えばA-Iとか、そういう興味を将来にまで広げて考えてみるのは、いかがですか」

「開発、とかですか」

「ええ。もちろん、それには――何をするにもスキルが必要ですが。最近、烏間先生から護身術を学んでいるのだと」

「この間、あの死神に襲われてから、何人かで頼みに行つたんです」

「身に着けた技術が多いほど、選択肢が広がりますからね。あなたの中に幾つもスキルがあることを、先生は知っていますよ」

「そんな――」

「――特に想定する力がある。先日の事件でも、進学先についても、最悪の事態を想定できたらこそその選択です。降伏したそうですね」

「買いかぶりですよ。あんなの、かないつけないですもん。全員が目の前で倒されなければ、さすがに」

「それも立派な才能です。――今後、何度も分けて、今日のように相談に乗ります。また進学についても、将来のことについても、考えて

みてくださいね」

「はい」

「そして良かつたら、暗殺にも来てくださいね」

気づけば、手がスカートにしわを刻んでいた。いつからだろう。そこが、じわりと湿っている。

「毎日殺されかけて、まだ足りないんですか」

「ええ。私はあなた個人からの暗殺も楽しみにしているんです」

相変わらず先生は笑顔だ。つぶらな瞳も、大きな口も、大抵は笑顔を作っている。緑がしま模様を描くのでも、桃色に染まるのでもない。かといって真顔の真っ白でもなく。いつもどおりの黄色の殺せんせー。

「先生には一度やつた方法が使えないから。勝算のある計画を、まだ練っている最中なんです」

「おや。それは楽しみですね。でも将来の良い展望を考えるのも、中々良いものですよ」

その言葉が最後だった。頭を下げて教員室を出る。扉をつかむ手は、いつの間にか乾いていた。突然変異体、実験台、隔離施設、管理社会、コンピュータ。アルファコンプレックス。

教室の入り口で、うつむきがちな渚君とすれ違った。

# 十一月、そして学園祭

1

学園祭がある。例年、十一月中旬の土日二日間に開催される、柄ヶ丘学園最大の行事だ。高校と同時開催で、学年を問わずクラスの売り上げを競う独自の風習も相まって、このところ学校はにぎわっている。

クラスごとに飲食店かイベントをすることになつていて、E組はどんぐりつけ麺を中心、山の幸を出す飲食店を選んだ。参加できるというだけで、例によつて待遇が悪いことに変わりはないのだが。立地が最悪なのだ。

「おい、店、外だつてよ」

「だよね、オーケー。配置は」

「磯貝がやつてる」

「ありがとね、寺坂君」

「おー」

「人力車の話、聞いた？」

「人力車だア？」

「まだか。来てくれるお客様を、中腹まで送るの。一応まだ決定じやないんだけど。——引く人が要るからね」

「で？ それが俺と——」

「吉田君には声をかけたつて、赤羽君が」

「クソカルマ！ 直接言えよ！」

「どう？」

クラスの教室がある校舎に店を出さなければならない。もつともらしい規則だが、これはE組にとつては大打撃だ。十二クラスが本校舎で店を出す裏で、E組だけは山の上に留め置かれるのだ。その距離、およそ一キロメートル。

登り慣れている、登るしかない生徒ならともかく、ただの客が、なだらかとはいえそれだけの坂を登ろうと思うだろうか。それも舗装のされていない山道だ。

ということで、形式的に尋ねただけで、人力車は決定事項だつた。人員も。見るからに体格が良く、そこに体力も伴っているのが、現状寺坂君と後二人。うち一人がメインシェフとして引き抜かれた以上、ぎりぎりの人選だった。

「良いぜ、休憩できるなんならな」

寺坂君は理解した——いや諦めたようだ。赤羽カルマの名前を出しておいたのは正解だつたか。

「もちろん。基本は一人にお願いすることになるけど、スペアは用意するよ。——次は吉田君とイトナ君の所に行つて。グラウンドにいるはずだから。人力車の件で確認することがあるんだつて」

寺坂君は最後にもう一度悪態をついた。外へ向かうのを見送つて、私はモニタを見る。幾つか操作すると、タスクが一つ消えて、二つ増えた。画面の端で通知が一件、薰製について。  
ちようど良く渚君が来た。

「薰製のこと?」

「うん。みんなの確認が取れたから、倉庫でやるよ。道具も用意できただんだ」

通知されたメッセージを確認してみると、彼の他に、茅野さんと杉野君の名前が挙がっている。

「メンバーもそれで大丈夫だよ。薰製なんて誰が考えたの」

「茅野だつたかな」

また、誰かが来た。そんな体で顔を上げると、今度は赤羽カルマが見下ろしていた。

「忙しそうだね、マネージャー」

などと、まるで他人事だ。事実、こうなつては他人事だが。彼は推薦してくれただけなのだ。

「そつちもね、おつかれさま」

「どーも。——嫌がらせ対策なんだけど、やっぱ何人か置くことにした」

最初にマネージャーなどに私を推薦してくれた彼は、防犯回りのブレーンとして器用された。ないに越したことはないが、決してそうと

言い切れないことを、E組の生徒は経験から学びに学んでしまつてい  
る。もつとも、マツハ二十の担任が目を光らせる中で、異物混入など  
を試みることは至難の業だろう。担任とされている鳥間先生とて、あ  
の時自称・死神を倒してしまつた猛者なのだし。

「律から聞いてる。材料班でローテ組なんだよね」

「それ。麓のやつらも制服つてことになつたから。エプロンは着けな  
いけど」

「確認しとく」

「——うまくやれてるみたいで、なにより」

「自分が推薦したくせに」

「向いてると思つたからね」

彼は背後に立つて、同じディスプレイをのぞきこんだ。実際、目に  
狂いはなかつたわけだ。私はコンピュータにも情報処理にも強い方  
であつたのだから。情報分析といえばの不破さんは、イトナ君の偵察  
へりや他数名と敵情視察に回つた。

まあ、私の働きなど、そもそもの人工知能に比べればかすむものだ。  
全ての情報はあれに集約されて、私はほとんど整然とした情報を眺め  
ていれば良かつた。

「ありがたいけど、そういうのは律にも言つてよね」

看板メニューのステップは豚骨醤油になりそうだ。検証の最中だが、  
メインシェフと担任の判断が一致している。採れる材料と、そこから  
サイドメニューも固まってきた。

人力車は自転車タクシーに。客引きも広報も、ひとまずこのまま進  
めていいだろう。食器は家庭科の授業で使うものを流用できる。机  
を合わせてテーブルにして、そこに花を飾るのも良し。

学園祭まで、後五日。

2

大きな問題もなく五日が過ぎた。——わけがない。色々なことが  
あつた。

「やつぱりウエイター陣には執事服・メイド服を着せたい」  
「オプションとかどうかな。ツーショット千円とか」

「先生も、もつとちゃんと、お店の様子を見たいです」

「先生も、今までに仲良くなつた方々を招待してもいいですか」

前半は即否決。後半は鳥間先生に相談の後、条件付きで許可。オブジエに徹すること。一日め午後、昼食時を外してまとめて呼ぶこと。など。意図せず苦労の一端を垣間見た。

そして当日、

「やー、おつかれ」

「まだ始まつてもないんだけど」

「まあまあ」

もはや驚くことでもないが、一緒に電車に乗り、一緒に電車を降りた。赤羽カルマと。

彼のふざけた言葉の真意は、わからないでもない。マネージャーという役職を、私は今朝いっぱい離れるのだ。準備期間だけのしごとなので、以後ほとんど不要なのである。仮に要件が生えたとして、それらは全て人工知能が片付けてしまうだろう。

というか、厄介事の半分は、この男が引っ提げてきたのではなかつたか。

「勝てると思う？」

「勝ちたいね」

「うわ出た、模範解答」

「——何それ」

「そういうのじゃないって、わかってるくせに」

彼は足を速めた。何となしに合わせられる程度ではあつたが。僅か間をおいて、ため息。

「期末までは言つてやるけど。俺は客観的な意見を聞きたいわけ」

「私、真面目に答えたつもりだよ」

はつきり言うと、勝てないと思う。仮に客が来たとしても。可能性があるとしたら、そのうえで、両三年A組がよほどへたを打つてくれた場合くらいのものだ。

高校まで無差別に売り上げを競うなかでも、中学三年A組の優勝は揺るぎない。浅野君がいるからだ。同じ学校で同級生を三年もやつ

ていれば、わかることがある。諦めているのではないだろうか。浅野君にはエースばかりでもない有象無象を優勝へ導いた前例がある。

昨日パンフレットが配布された。偵察ヘリにもなかなか手の内を明かさなかつたA組だが、例年どおり彼はイベントを選択したようだ。今年は生徒同士のグループが出しものをするらしい。要約すると——飲み食い無料、芸能人のライブもあるよ！

「そんなこと聞かないでほしいな、士気問題だよ」

「なるほどね」

おまえには答えてやるけれど。

「他の人には言わないでね」

山道を登つて、クラスメートとすれ違つて、校舎に着いたとき、青空には三日月が浮かんでいた。

始まつてみれば、A組は凶悪に売り上げを伸ばした。偵察ヘリの映像を見たなら、誰もその勝利を疑うまい。一方こちらは、立地の割に客入りは良い。——とにかく場所の影響がひどかつた。

準備期間の専属業務から解放されて、私は調理班に入つた。技量の問われる作業にはそれぞれ専門の料理人がついたので、おもには食器を出すのと洗うのと、盛り付けがしごとだ。

昼食時になると、調理場はにわかに忙しくなつた。招待客が入つたのだ。時々、招待したらしい班員が出ていつた。それでも暇があつたので外を見てみると、そのときはわかばパークの園長が子供を引き連れていた。渚君が応対していたので、彼が呼んだのだろう。

窓から視線を外して、洗いものに戻る。食器を出す。途中、何度か盛り付けに呼ばれた。

そんな風に暇を持て余していた。

「カルマのやつが呼んでる」

同じく調理場にいた磯貝君が、十四時前に私を呼んだ。いや、赤羽カルマが呼んだらしい。何があつたのかと、素直に出口へ行くと、「家族が来てる」と言う。

私の家族だろう。彼の家族が来たからといって、私が呼ばれる道理

はない。

十四時前。まだ先生の客は来ない。余裕もある。肩の力が抜けた。

「教えてくれてありがとう。お母さん？ それともお父さん？」

「どつちも、じゃないの。一人だつた」

「そつか。先生のお客さんが来る前でよかつた」

「麓で注文したみたいだから、あれじゃない？ みんなには伝えとくから、持つてけば」

そんなここまで。

「何から何まで、ありがとう」

手際が良すぎるのは気持ち悪かつたけれど。彼は表情を変えずに手を振つた。

「良いって。テストで決着つけるんだから」

——彼の言うとおり、ちょうど用意された料理が両親の注文だつた。私は持つていくだけでよかつた。

私に遺伝子の半分ずつを提供しようとした二人組が、外で待つていた。彼らは娘に気づくと、人の良い声で口々に呼ぶ。笑みを浮かべて近づくと、二人してそれ以上の笑みを浮かべてみせた。

「がんばってるね」

「ありがとうございます。つけ麺おいしいから、冷めないうちに食べちゃつて」

「あなたはもう食べたの」

「うん、同じのを。デザートもね。モンブランとゼリーを頼んでくれたんだよね。今作つてるところだから、食べ終わつたら私が持つてくるよ」

父親が麺をスープに漬けた。母親が麺を口に運んだ。ズルズルと音を立ててさもうまそうに胃に収めるのを、向かいに座つて私はじつと眺めた。

店はガヤガヤと活氣づいている。知らない制服に、知らない大人に、知らない子供に。大体がつけ麺とデザートを注文して、時々サイドメニューが付いたり、あるいはデザートだけだつたりする。

学園全体としてはイベントと飲食店の数にほとんど差はないが、ど

ちらかというとイベントが少数。多数派のうち半分ほどはデザート主体。そしてまた半分ほどが、実は食事の提供が主ではない。

「うまいね」

どちらかが言つた。

「料理上手が一人いるんだ。一人はラーメン屋を目指しててね」

「あなたは」

「私は皿洗いだつてば」

「ホームページもポスターも、メニューもよくできてる。それに、まつたけ！ 本当に山に生えてるの？」

「びっくりしちゃうよね」

どんぐりから、まつたけまで。本当に生えている。客引き担当に、二人にぴたりの文句で口説かれただろうから、今更詳しくは言うまい。

「ずっと心配してたけど、ちゃんと良い雰囲気のクラスだね」

どちらもほほ笑んだ。間もなく丼を空にして、入れ替わりのデザートに手をつけると、また笑顔だ。それだけで良かつた。この様子なら、私は三月までこのクラスにいられる。

ついにデザートまで食べてしまつて、両親は山を下りた。後片付けがてら、十数分ぶりに職場へ戻る。と、来客を教えてくれたクラスメートが、バッグに何かを片付けていた。声をかけたわけでもないのに気付かれて、それを見せびらかす。メイド服だ。あえて思い出すほどのことでもないが、ついでのコスプレ喫茶を熱心に訴えた一人も彼だつたか。

「着る？」

「着ないよ。何で持つてきてるの」

「万が一のためにね」

どんな方が一だ。よく見れば、他にセーラー服、サンタ服。本当に、どんな——。ウエイター役のうち女子は頭にヘッドドレスを着けていても、後は男子と共にただ制服の上からのエプロンである。きちんと否決されたので、コスプレ喫茶ではないのだ。このクラスは。

「ねえ、渚君にはどれが似合うと思う」

「あー、なるほどね」

後で話を聞いたところ、沖縄で起きたトラブルの最中のごく小さなトラブルがここにきて思い出されるような、これまた小さなトラブルが彼には発生したらしい。

3

一日め、日曜にもかかわらず、朝の電車が混んでいた。だが、予想を突き合わせるようなまねはしない。私たちは答えを知っている。

誰も彼もが柵ヶ丘駅で降りた。浅野君の商売が恐ろしくうまくいったのだ。否。彼らの目的地は本校舎を過ぎて先、旧校舎。――昨日の渚君の小さなトラブルが、思わぬ益をもたらしたのだつた。コスプレ撮影会で金をとることはかなわなかつたけれど。

「まさか、女装した自分に一目ぼれした男が、超有名グルメブロガーだなんてね」

山道を上りながらでこそ、こんなことを赤羽カルマは口にするが、ホームでわざわざ話したときには、

「コスプレ撮影会までやれば良かつた！」

とかなんとか、いたく惜しんでいた。

「あつちも、まさか渚ちゃんが君だつたなんて、思いもしなかつたでしょ」

「だろうね。もう寺坂たち要らないね」

言い方は悪いが、そのとおりだ。ついに開店待ちの客とすれ違つた。まだ中腹にもたどり着いていないのに。これなら人力車もとい自転車タクシーは不要である。注文も上で取つたほうが良さそうだ。客引きは置いておくとして、ガードマンを一人つける。

「シフトCかな」

もう偵察に当てる人員も惜しい。

「マネージャーが言うなら、そうなんじやない」

「いや最終的には律が計算するんだけどね」

まあ、上に着いたら、すぐさまCのシフトを言い渡された。

ＴＶ番組のライブ中継が入つた。クラス委員二人と料理人二人がインタビューされて、担任として鳥間先生が挨拶をした。もちろん看

板メニューも映つて。

それからというもの、客足はますます伸びた。開店前から五百メートルもあつた行列が、正午には一キロだ。大盛況である。

そして十四時を迎える頃、大きな問題もなく麺の在庫が切れた。先生は打ち止めを言い渡す。

「これ以上採ると、山の生態系を崩しかねない」

そう授業に持ち込まれて、反論は出なかつた。

人工知能が休みなく計算して、少しずつメニューが減つた。やがて完売。E組は一足先に店じまいと相成つた。

A組には勝てなかつた。もちろん高校の方にも負けた。だが中途閉店にしては良い結果を出せたのではないか。

「マジで勝てなかつたね」

「でも三位だよ」と、心から思う。

## 十二月

1

前の席から奥田さんが呼んだ。振り返って、問題集とノートを机に置く。赤色で複数の回答が訂正されていた。

「順番にお願いします」

彼女は迷わず口にした。

席が前後という程度の付き合いから、よくここまで打ち解けたものだ。模範解答と解説を並べて、いつかのことを懐かしんだ。――十二の月、再び期末テストが迫っている。

夏の日とは違つて皆長袖の制服で、大抵教室か廊下に詰めている。目標ももはやラッキーチャンスなどではない。最初の中間テストに立ち返つて、今度こそ五十位以内を目指している。これが最後のテストなのだ。三学期から、内部進学の本校舎と外部進学の旧校舎とでは授業が変わつて、テストも全く異なつてしまうから。クラスメートも先生もあまりに必死で、担任の分身などは形を乱すほどだつた。深くは考へるまい。

「どうかしましたか」

「ううん。ええと、この記述問題だけどね。大体設問にヒントがあつて――そう、今回はこれとこれがキーワードだつたんだ」

ペンを握つた手が、意思とは関係なく、しかし適当に動いた。奥田さんは長文の一部を指し示して、悩ましげに線をなぞる。大抵はこの付近に、問われていることの最重要フレーズがあるもので――。また口から適当な解説を吐き出して、

「これは特殊解に持つてくやつ」

耳は別の科目を教えるクラスメートの声を拾つてゐる。私が奥田さんに英語を教えるように、隣の席でも誰かに数学を教えていて、奥田さんもまた誰かに理科を教えて。――これも夏とは違う光景だつた。先生が提案した新手の勉強法は、今のところうまくいつてゐる。朝に昼休みに放課後に、総合一位を期待される赤羽カルマなどは引つ張りだこだ。

更に月をまたいでも、一緒に登校は続いている。わざとらしく参考書をしまつてみせるくらいなら、さつさと教室へ向かえればいいものを、彼は一度もそうしたことがない。

特に会話が増えたり減つたりもしない。ただ、期末テストでの個人的な勝負については、学園祭以来まるで忘れられたかのように、話題に上がらなかつた。

彼にしてみたら目標は総合一位で、それは他からも期待されるほどで。まるで不利な勝負ではないか。相手は当然に勝てるのだ。精々モチベーションの維持、向上につながれば良いところ、くらいの。

私はどうして、こんな勝負を引き受けてしまったのだろう。いや改めて考えるまでもない。理由はわかっている。ただ一つの命令権が、どうしようもなく魅力的だつた。

「——だから、後はやることは同じだよ。先生が教えてくれたとおりにやれば、部分点でも取れる。離れてると焦っちゃうけどね」

「はい！ ありがとうございます」

「うん。私もがんばらなきや」

これで最後なのだ。ちかちかと一瞬、目の前が光つた。ペンを置く。ぐつと体をほぐすように伸びをすると、今度は血管に熱を感じた。

私も全力でいかなくては。——理由を問う者は、どこにもいない。期末テストの翌日、結果が出てから個人的な約束が果たされるまでに、少しの事件があつた。

三年E組は目標を達成した。すなわち、クラス最下位・寺坂君の名前が、成績上位者の表の下から数えた方が早い所にあつたのだ。それは柵ヶ丘学園のシステムの崩壊をも意味した。そこに端を発したのだが、一つ二つの騒ぎを起こして、平和裏に終結した。

日の沈むころ、生徒はようやく解散となつた。スクールバッグを片手に、赤羽カルマと私は顔を見合わせる。言葉はない。それでも二人で向かつたのは裏山だつた。ちょっと人目を忍んで話をするなら、こしかない。突き刺すような寒さに構わず奥へ走り、隠れるように幹

を背にする。

「おめでとう」

どちらからともなく口にした。乾いた言葉があつた。先に満足げに笑ったのは、赤羽カルマだつた。——上から二番めに、私の名前。一つ下に浅野君、更に下に同じクラスの中村さん。私は負けたのだ。「あれ、やつぱり、そういうしくみだつたの」

「そうだつたのかな。先生の教え方が上手だつたんだと思うよ」平然とした声が出た。私の自己暗示はいつだつて完璧だ。

「——あ、信じてない顔だ」

「ばれた?」

「それがあの命令?」

「まさか!」

彼はおもしろがつて叫んだ。一人で話した中で最高の笑顔だつた。「もつたいないじやん、こんなわかりきつてるの」

「そつか」

勝負を彼は忘れてはいなかつたのだ。私は全力を出して、たつた一つの命令のために全てを棒に振つた。

「後悔してる?」

「うん」

「即答かよ」

「だつて、何を命令されるのかわからないもん」

「悪い悪い」

そうとは、かけらも思つていらないだろうけれど。だが、なぜか、苛立つよりかえつて安心した。命令がわからなくて後悔していることは本当なのに。

いつからだつたか忘れてしまいたいほど、もう赤羽カルマの考えがわからなかつた。奥田さんの思考など手に取るようになるのに。先生の心の内だつて。

「夏祭りに行つたじやん」

「夏休みの最後の日だね」

「あそこで言つたこと覚えてる?」

忘れるはずがない。もうずっと、この男の気まぐれに振り回されていて、沖縄ではむかつくと言われて、何も似合っていないと言われて、嫌な人間だと言われて、

「それが今だつて？」

「そう。おまえは今殺す。ここで殺す」

三月まで後三箇月。巻きに巻いて、彼は私を見た。目が合う。強い風が皮膚を刺した。

「隠してること、あるでしょ」

「スリーサイズとか」

「気にならなくはないけど、俺がそんなこと言つてんじやないの、わかつてるだろ」

それには、この私は黙り込むしかなかつた。この期に及んで完璧な自己暗示が、何よりの答えを差し出す。

「あんたの秘密を教えてよ」

「私しか知らない秘密なんてもの、明かしたとして、赤羽君は信じるの」

「信じるよ」

後ろで赤羽カルマがうなずいた。カサカサと音がする。

「あれだけ嫌なこと言つてきて、それなのに信じるだなんて、変わつてるよね」

「おまえも相当だつて」

「そんなこと初めて言われた」

「だろうね。ま、何にしたつて、俺はおまえというか、考え方を信じてるよ」

なんとも赤羽カルマらしいやり口だ。そういうところが嫌なのだ。土を踏みながら、考える頭はらしくもなく穏やかだつた。

過程を大切にして、そのうえで結果を出す人間だつた。信用、信頼、そうした社会の最重要事項をよく理解している。彼が初めて先生を暗殺したとき、いち早く「先生をやること」を天秤にかけさせていた。——私は今きっと「三年E組でただの生徒をやること」を天秤にかけさせられている。ずっと天秤にかけてきた。ミュータントで

なく、ヒトをやるということ。

「一緒に登下校するの嫌だつたでしょ。何でとか言わないでよね、俺にはばれればだつたから。で、あんたは一度もやめようとか言わなかつた。ちゃんとした理由が見つかなかつたからだろ。——別にさ、理由なんてたつた一つで十分じやん。嫌だつて言えば良かつたんだ。嫌だつて言われたら、俺だつて引くしかなかつたんだからさ」

クラスメートからの誘いを断ることを、ありきたりな人間としてずつと想えていた。普通のクラスメートらしく断る方法をずつと探していく、そこに舞い込んできたのが護身術の訓練だ。磯貝君に誘われて、私はこれ幸いとばかりに飛びつき。そうしてようやくのことだつた。文化祭準備期間に入つて、すぐに意味をなさなくなつたけれど。

「普通、嫌でしょ。俺のせい——まず俺のせいだと思わない？ 何も関係ないのに、ただ居合わせただけでE組落ちに停学沙汰。巻き添えだぜ」

「——わかつた」

いつしか目的地に着いていた。場所を帰る提案が一も二もなく承諾されてしまふ。制服だからと、ただ歩いて。

先生は今、旧校舎にいない。気配がない。いつものように海を越えたのだろう。信じない道理はない。もうしばらく時間がある。鳥間先生もイエラビツチも、他クラスメートも周辺にはいない。どれだけ急いでも、駆けつけるには十数分かかる。

赤羽カルマの所持品のうち注意すべきはスマートフォンだろうか。  
——もつとも、どれも杞憂に済むのだが。

「命令、それでいいんだね」

「もちろん」

赤羽カルマはにこりと笑つた。そして指し示された方向を見て、

「意外と大胆だね」

そんな軽口を私は無視した。

裏山ほど内緒事に向いた場所はない。隠れやすく、隠しやすく、明るく、暗く、広く、狭い。この環境を、E組の面々は熟知している。だ

からこそ。

例えば、多く見積もつて定員三名の洞穴、だとか。

「何持つてんの」

「気にしてないで。先生はいないから。それとも、こんなことに権利を使う？ 私はそっちの方がうれしいな」

奥は行き止まりで、出入り口はたつたの一つ。そちらに赤羽カルマの背を向けさせると、そこは真っ暗になつた。狭くはない。二人で座る程度の余裕はある。私はスマートフォンのライトで周囲を照らした。

彼はようやく私の持ち物を目にする。

「きのこじyan」

「覚えてる？」

「あー、それは——」

拾つたうちの一つに、思い当たつた名を答えさせる前に、

「——タマゴタケだよ」

口へ放り込む。きのこ特有のやわらかな食感を、歯で捉える。かも。傘が大きくて、全ては口に入らない。構いやしない。かむ。また、かむ。ハラタケ目テングタケ科テングタケ属。

「馬鹿！」

強い衝撃に体勢を崩した。柄の部分が、まるつと手からこぼれる。だが、もう大事なところは口の中、食堂を通り抜けている。

「吐け！ 早くこつから出て——」

「落ち着いてよ」

「それはベニテングタケだ！」

「知つてる」

「なら！」

「——先生が言つてたもんね、タマゴタケに似てるけど、毒キノコだから氣を付けろって」

そんな、狂氣を見るような目をされても、いたつて正氣なのだ。——いや正氣ではなかつたかもしれない。生で食うものじやない。調理されるから、きのこはうまいのだ。少なくとも、私の味覚はそうと

らえたようだつた。

それと、

「ちよつと重い」

言葉にしてやつて、けれど赤羽カルマは自身の体勢を見直そそうとはしなかつた。私の肩をつかんで押し倒したまま、びくともしない。言つていることとやつていることが真逆だと、そろそろ気づいてほしい。

「いや、でも、どいて。それに先生を呼ぶ必要もないよ。これには下痢や嘔吐、幻覚なんかを引き起こす作用があるらしいけど、何時間しあつて症状は出ないだろうからね。それに、そもそもスマホは使いないだろうし」

そこで一つ、手が肩を離れた。右手だ。ポケットに伸びて、たつた今指摘されたものを取り出す。いくつか操作して、それでも画面が光ることはない。

「これも、おまえの仕業？」

「そうだよ。あと、私のも使えないからね。それはライトだけつくようにしてあるから」

「これだけじゃないよね。なに？　きのこに強いって？」

「私は命令に従つて自分の体で証明しただけ」

また一つ、手が肩を離れた。顔が離れて、体が離れて、ようやく私は自由になる。背や腕やをはらいつつ、私たちは最初の姿勢に戻つた。

「全部、話して」

3

蚊の鳴くような声だ。赤羽カルマは、自分の声のそこまで頼りないのを、久しぶりに聞いた。だが無理もないことではないか。ただ秘密を知るための勝負事で、まさか死を選択されることは思つてもみなかつたのだ。——どうも本人にそのつもりはなかつたようだが。

足元に、土の付いたきのこが幾つも転がつてゐる。一つは柄だけ、傘は胃の中。ベニテングタケ。この狭所に誘い込んできたクラスメートの体を、毒でむしばんだ。疑う余地なく。

初対面は入学式のはずだ。カルマは一年D組で、そこには潮田渚がいて、だから同じように三年間同クラスと記録されているこの彼女もいたはずだった。記憶がそのように曖昧なのは、まるで印象が薄かつたからである。付き合いもなかつた。男女の別もあつた。そもそもカルマは、あの頃、自分で言うのもなんだが遅刻・早退・欠席の常習犯だつたのだ。ますます、わからない。

だから、二年に進級したときも、連続して同じクラスであるうちの一人らしいことを認識するやいなや、また関心をなくしたのだろう。一クラス当たり四十七人、そのおよそ四分の一・十二人も似た存在があつたのだから。

一方、渚君のことはよく記憶していた。一年の夏頃、映画をきつかけに話してから、進級時にも付き合いは続けていた。話しが合わないわけでなし、警戒しなければならないでもなし。休み時間に話して、放課後を過ごして、時々は休日にも遊んで。——いや、一番は、彼の持つどこか得体の知れない不気味さを、目の届かない所にやりたくなかつたのかもしれない。同じ理由で疎遠になつていたのだけれど。こんなクラスになつて初めて、殺しの才能だと気づけたそれが。

警戒心は、カルマの交際における重要なファクターの一つだ。このクラスなら、例えば奥田愛美は付き合いのしやすい一人である。何も考えずに動く寺坂竜馬もそう。不本意ながら渚君も。そして彼女も。ずっと関心の外にいたそのクラスメートを、内側に入れてしまつたのは——

カルマはよく喧嘩した。喧嘩つ早かつた。性分に逆らうことをしてなかつた。その冬も——昨年もそうだつた。目の前の光景がひどく腹立たしくて、気づけば手を出していた。それが年上だとか、同じ学校の先輩だとか、それもエースのA組らしいとか、こうした事情はどうだつてよかつた。

一つでも思いとどまつていれば、カルマは本校舎にいただろうか。少なくとも彼女は、間違いなくそうしていただろう。

カルマが意識の外に追いやつた要素は、巡り巡つて彼自身を追い詰めて、

「おめでとう、赤羽君。君も三年からE組行きだ」

担任だつたあいつは全てを覆した。俺が正しいと、俺の味方だと言つておきながら。そんなことを言つた。怒りに任せて教員室で暴れたことを覚えている。けがはさせないでやつたのに、みつともなく肩を震わせていたあいつは、おれが背を向けると途端に勢いを取り戻して、停学だと喚いた。——で？　だから？

だから。そう思つていられたのは、彼女とすれ違うまでのことだ。カルマが教員室を後にしたとき、とつぐに授業は始まつていた。だといつのに、教員室へ続く廊下を、同じくらすの女子生徒が、——名前はそこでは思い出せなかつた、しかし彼女は確かに、昨日、あそこで遭遇した、あのクラスメートだつた。

彼は翌晩、三つのことを知らされた。一つは正式な転級通知。一つは、停学でなく自宅謹慎処分となつたこと。もう一つは、赤羽カルマと一緒に暴力事件を起こしたクラスメートが、同じ処分を受けたこと。

いざ謹慎明け、始業式を僅かに遅れて登校してみると、非日常がこれでもかと積み上がつていたわけだが、連續三年めの二人めを忘れてはいなかつた。よりもよつて隣の席だつたが、さしたる問題はない。ただ少し気まずいだけで。

「久しぶりだね」

あちらは、ちらとも、そつは思わなかつたようだが。平然と繰り出された言葉に、カルマは意氣を削がれた。

「おー、久しぶり」

決して忘れやしないが、だからといって結局は、気に留めるまでもないクラスメート。二人の付き合いは、まるでかつてと変わらなかつた。

今は違うけれど。

驚くほど弱々しい声を出して、最低限に暗くないだけの空間で、目前の彼女は口を開いた。

「超能力者なんだよね、私」

何となしにらしくないと感じる口ぶりは、しかしつもどおりだ。

そのはずなのに、やけにゆっくりと音の響きを感じた。

今この女は何と言ったか、何を言つたか。反芻するまでもない。でも、する。超能力者。ちようのうりよくしや。ちようのうりよく。ちようのうりよくしや。

「うん、そう。ミュータントともいう」

いや、いつたい何の映画だよ。それは。それって。おまえ、アメコミも守備範囲だつたわけ？

顔を上げると、いつもの平然とした顔が、カルマを見ていた。自称ミュータントは視線をそらしもしない。それで一つ得心がいった。

「沖縄で、ほんとは気づいてたわけだ」

鷹岡明という犯罪者の卑劣な策略を、カルマは思い出した。忘れようとして忘れられるものではない。トラウマでもないが、それはあちらに理性的な大人がそろつていただけで、もしやつのおもわくどおりに事が進んでいれば、今頃クラスは崩壊していただろう。

「ただのジユースじゃないことはね」

「耐毒スキル？」

「それゲームみたい。でも、ちょっと違うかな。それもあるんだけど、あの時はどつちかつっていうと、唇から消化器にかけてが丈夫だつたのが良かつたんだと思う」

「京都でのことも気づいてたんじゃない？」

「あんまり超能力とは関係ないけどね」

「おや、と眉が上がった。いつになく素直だ。例えば昨日なら、彼女はここで白々しく首をかしげただろうに。

しかし彼の思考を知つてか知らずか、彼女は素直に続けた。

「でも、あの高校生たちにはやつたよ。テレパシーつてわかる？あれとマインドコントロールの応用でね。いつもミュータントパワーは使わないようにしてるんだけど、あの時は茅野さんと神崎さんが役立たずになるかもしけなかつたからね」

ほら、また。役立たずになるだなんて、語彙にあっても、普段の彼女のファイルターなら絶対に阻んでいたはずの言葉だ。やはりカルマ

の見込んだとおりの人間だつたのだ。この女は。

「洗脳かあ。俺もされちゃつたり」

「心配しないで。私の超能力は万能じやないから」

「俺のスマホはどうなつてんの」

「今だけ壊させてもらつた。あー、心配しないで、すぐ直せるから」

「一度も触つてないのに？」

尋ねる体を取りながら、ほとんど軽口だつた。目の前のクラスメー

トは、絶対にそうとわかつっていて、たたみかけた。

「それが証拠になるでしょ」

風が吹いた。カサカサと落ち葉が騒いで、静けさが訪れる。

まるで映画のような話に、カルマの心は浮足立たなかつた。いざ自分  
の身に降りかかれば、というより、もつと別のことにつ頭を巡らせて  
いたからだ。あるいは、やはり映画のように典型的な展開をなぞつた  
からか。

どうしてこのミュータントは、ただのクラスメートにここまで正直  
に話したのだろう。一方の映画で、秘密を知られた一般人は、果た  
してどうなる？

——させるかよ。

不思議と嫌悪感はない。あれだけ陰湿にいがみ合つてきて、それだ  
といふのに。——成果が得られたからだろうか。

だとしたら、なおさら。これはカルマがやつとつかんだラツキー  
チャンスなのだ。絶対に逃すわけにはいかない。

カルマは拳を固く握る。爪の食い込んだところが、少しだけ痛い。

4

律儀に暴露してやるこの私は、「私しか知らない私の秘密」に、もちろんアルファコンプレックスでの過去を含めていた。赤羽カルマは、そのいたく痛々しい妄想めいた話まで、おもしろおかしくミュータン  
トパワーの一環ととらえたらしい。

「何歳だつたの？」

簡単に、死んだ年齢を聞かれた。

「十四歳」

「で、少年法で守られるジュニアつてのが十四歳までだつけ？ 何箇月だよ」

「そ、らへんは、ちょっと薬漬けでね」

レッドに昇格したときのことを、あまり覚えていない。ただ二箇月はからなかつたように思う。薬の影響で、脳の働きは限界に近かつたから、本当にぎりぎりだつた。

下から二番めのレッドの下、つまり最低のインフラレッドは、この中学と同じく、待遇も最悪だつた。衣食住も娯楽も、とにかくコストパフォーマンスが重視される。服は共通のジャンプスーツでも、住居は衛星も不衛生もない、不衛生以外の何ものでもない、大部屋にしき詰め。ただ寝るだけ。

「食事はとにかく栄養価重視だつた。というか、最低限の栄養しか考えられてなかつたんだよね。おいしくなかつた。まずくしようとしてじやなくて、ただそういう味だつたんだよね。一番安く済んだのが」

娯楽も推して量るべし。そんな環境では満足するどころか、士気の維持も難しい。なんてことは、あのクソつたれにもわかつていて。だから手つ取り早く、おくすりだ。満足できる薬。あるいは満足のことを考えられずにいる薬。そんなものだつたと思う。

処方されたものを飲むしかなくて、環境は最悪で、飲まなければやつていられなくて、けれど頭が働かなくては良い環境も遠のいていく。十四歳になるまで、私はいかに早く昇格するかを考えていた。できるだけ脳の働くうちに、つまり速やかに、数箇月で、反逆者を密告しまくる。それが手つ取り早い一番の方法だつた。

「かなり速かつたんじやない」

「ものすごくね。何十年も扉に貼りついて、それでもインフラレッドのままクローンを使い切るやつも、いっぱいいたよ。——そうそう死んだのはね、それから三箇月くらいだった」

「任務つてやつ？」

「うん。普段のしごととは別にね、レッド以上の市民には不定期に任務が与えられるんだ。私はその二回めで、一気に六つのクローンをな

くした

複数名、大抵四名程で一つのチームが作られて、任務はその突発的なチームに与えられる。一度めは新レッド市民ばかりが集められた。どいつもこいつも、よりコンピュータ様の役に立てるこの機会をうんぬんと、自己PRに一生懸命だったのだから、間違いない。かくいう私も、昇格から一週間もたつていなかつた。

任務と同時に始まつたのは、驚くほど稚拙な足の引っ張り合いだ。皆、全員がミュータントであることを、口にしないまでも当然承知していたから、誰かが綻びを見せるのを待つた。それとも、自分の手柄のために輪を離れようとした。

自分より数十も年上の人間がそろいもそろつて幼稚なやりとりに身を入れてくれたおかげで、私はつい一人勝ちしてしまつた。一度も死なず、仲間だつた反逆者にまつわる完璧な証拠を押さえ、得たものはすぐにでもまた昇格できそうなほどの評価だ。

「その時にオレンジになれてたら、それが一番だつたんだけどね」

「うわ、もしかして次のチーム、一つ上のオレンジばかりだつたりした？」

イエス。

隣で赤羽カルマはけらけら笑つた。

「身分差は絶対、上級市民の命令も絶対。チームだからって見逃されることは絶対にない。まあ死ぬよね」

狂つた支配者・コンピュータは、よく狂つた指令を出した。新しい武器（今まで爆発したことしかない）をテストしろだと、ここからあそこまでこれだけの時間で移動しろ（今まで事故したことしかない乗り物を使わなければタイムオーバーする）だとか。明らかに狂つていて、その致命的な矛盾に気付かない。いつでも自分が完璧だつた。だから挙げ句の果てには、完璧な自分の指令も完璧で、完璧な自分の統治も完璧で、完璧に統治される市民も完璧で、だから完璧な指令は完璧に遂行されるはずで、それを放棄はもちろん失敗することもありえない、などと考へる。

そうしたむちやくちやの犠牲になるのが、同じチームの弱者だ。あ

のとき私は明らかな弱者だった。どいつもこいつも、死にかねない状況に、ためらいなく私を投入して、ついに六度死んだ。あつけない最期だった。

「じゃあ二十八くらいか」

「合わせれば、まあ」

「同じくらい、いや、ちょっと長生きしてるんだ」

「結局もうすぐ死ぬんだけどね」

「ぼろぼろしやべったね」

「命令されたから。大きな弱みを握れたと思うんだけど、どうする」

「これで全てだという合図を、赤羽カルマは完璧に理解した。

「あはは、冗談でしょ」

そうして笑つた。

「弱みは弱みだけどさ、俺がそんなことのためにこんな勝負を挑んだと思つてるの？」

「——それが、ずっとわからなかつた」

「おまえ、どうせ記憶を消すつもりなんじやない？」

「そうだよ」

痛いところを突かれた、とは思わない。私が律儀に話した時点で、すぐ勘づいたことだろう。

「消さないでよ」

「もう命令は聞いた」

「命令じゃない」

真剣な声だつた。と、思う。逆に、そうとしか、わからなかつた。ここでスマートフォンの小さなライトは、きちんと表情を見るには不十分だつたのだ。

「よく——わからない」

不意に声が揺らいだ。あつと口を押さえるけれど、なかつたことはならない。

「誰にも話さないつて約束する。何ならそう洗脳してくれたつていい」

「だから、わからないんだつて。意味がわからない。わけがわからな

い。理由がない。義理がない。そんなことして、おまえに何の得があるんだよ」

「記憶を消されない」

「そんなことのために——」

「そんなことのために。それでも信用できないなら交換条件にする？」

「一つ」

「私のこと嫌いだつて言つてなかつた？ 私、記憶を消して、なかつたことにしてあげるつもりなんだけど」

「あ、一つかも」

「聞いてねえよ」

「今後、気持ち悪いしゃべり方やめてよね」

「は？」

「今みたいにしゃべれつてこと」

「そう、ではない。全く話がかみ合つていない。何をどうしてそこまでするのだろう。何のために。どうして記憶を消されたくないのか。私は早くこの関係を終わらせたい。記憶を消してあげて、少しだけ

記憶をのぞいて、適当につじつまを合わせる。以前の低俗な妄想を流用しよう。それでうまくいくのなら。赤羽カルマは奥田さんのことが好きで、私に彼女のスリーサイズをしゃべらせたくて、このくだらない勝負を持ちかけた。よし、これでいこう。ほら、

「で、俺のことは名前で呼んでよね。赤羽君つての、別に不自然じやないけど、いい加減他人行儀じやない？」

そんなことは、まずおまえが渚君との関係を見直してから言えよ。

「あ、あとさ、その白いのやめてよ。タイツとかさ」「二つもうそかよ。

「よし、こうしよう。白タイツを黒タイツにする。三つめだけど、些細な問題だよね」

「そうだろうか。

「どう？ 悪くないでしょ」

「悪い。

「あしたからでいいよ」

「別に黙つてくれなくていいんだけど。——どうせ消すんだから」

「じゃあ消しなよ」

エ、とか、ア、とか、そんな音すら出なかつた。冷たい声だつた。相変わらず顔はわからない。けれど、まっすぐにこちらを見ている。そして、そこに普段の、警戒心を隠そうとかより親しみやすく振る舞おうとか、そうした処世の術は働いていない。

全部が？き出しだつた。

「いつまで俺の言葉を聞いとくつもり？ 消せよ。今すぐ消せよ。消せば終わりじやん。俺のスマホを触りもせずに壊したおまえに、それくらい、わけないよね。ねえ、何で消さないの？」

それは——なぜ、だろう。そういえば、そうだつた。

「ねえ、俺の記憶は何でまだあるわけ  
消えていないからだ。

「もしかして消せなくなつた？」

違う。ミュータントパワーは、ミュータント相手ならまだしも、ただのヒトにはより効果的に働く。

「それとも俺が特異体質？」

違う。おまえにミュータントパワーに抵抗するすべはない。

——私が消さないからだ。私が消そうとしないからだ。

「そういうところが、むかつくんだよ」

夏以来何度も聞くされた言葉を、彼はここでも口にした。

そうして、距離を詰められていたことに気づいた。それが見かけようり大分近いことに、私はあらがえなかつた。あらがわなかつた。

「いい加減、気づいたらどう。毎朝鏡見てる？ おまえキモいよ。だ一れも気にしないけど、キモすぎ。鳥肌が立つ。まだシロみみたいにされた方がよっぽどマシ。すりやー良かつたのに。なに気遣つてんの」

更ににじり寄られていて、それでも声は出なかつた。まるで出し方を忘れてしまつたみたいだ。反論の言葉は、すぐそこまで来ているのに。ただ出せない。

喉元の反逆に気づいたように、彼は続けた。

「ばれればれなんだけど。そこまで完璧にやつて、何でもできそな力があつて、何で点落とせるわけ？二点も！　なあ、完璧な記憶力で、完璧な演算力で、どうしてそれだけ落とせるの？　答えるよ、答えてみなよ！」

そこで言葉が途切ると、一転、しんと静まり返った。そうしたところで、ようやく辺りの気配を感じすることを思い出す。身動きはとりづらいが、問題はない。誰もいない。そのことに安心するより先に、そもそも人よけの結界を作っていたことを忘れていた。

ハ、と、そうして、ようやく息を吐けた。ついで、かすれ声。それも大した音にはならないが。

「バツカじやないの。フェアじやねーとか、思つてんなよ」

だが、ずっと、そう思つていた。あの時、ありきたりに考えてみても勝負は見えていた。私が勝つ。間違いなく勝つ。そこに全力は要らない。今までどのテストでも、ペンを握っているだけで満点は取れたのだ。ミュータントパワーがあるから。あるいは完璧な教育のお陰で。

「だからキヤパオーバー寸前までパワーを使いまくつて、頭を鈍らせたつて？」

「そんなこと言つてないじやん」

「茶番も、そろそろ終わりにしようよ。ごく普通に、平凡に、ありきたりについて、そんなすることないと思うけど」

向かいで赤羽カルマがため息をついた。

「ねえ、手抜かれてたのむかつくからさ、やっぱ後一つ命令聞いてよ」「消すなつて？　断る」

「どうせできないのわかつてて、そんな命令するかつての。それに命令じやないつて言つたじやん、取り引き」

「嫌だ」

訂正する気も起きない。少なくとも今は。——そう付け加えてみたのは、保険のつもりだろうか。

「いや、わかれよ」

「だから何を」

「俺、偉くなるんだけど。おまえのことも助けてやるって言つてんの」  
ぐらりと視界が揺れた。

## 5

気づけばベッドに身を沈めていた。部屋だ。自分の。自宅の。  
帰ってきたのだ。

部屋着に身を包んでいた。制服はハンガーにかかっている。合わせるブラウスや靴下は、すぐには見当たらない。かわりに軽度の満足感があつた。もう入浴も夕食も済ませたようだつた。

何を食べたかも、いつ体を洗つたかも、そもそも、どこを歩いて、何をして、どう歩いて、どうして、なぜこんなに時間がたつたのだろう。最後、私の記憶は何か返事をしたところで途切れている。いや、それとクラスメートの所持品を直したのと、どちらが先だつたか。

体を起こしたくない。そのめつたに抱かない怠惰に、だが今だけはあらがわなければならなかつた。クソダルい。ああ、こんな言葉は内心に浮かべることすら禁じていたのに。

やつと座ることをしてみると、今度はスクールバッグが目にいつた。机の側面、フックにかかつてているのは不自然ではない。けれど、確認しなければ。私は明日の持ち物を入れただろうか。そんなことも思い出せない。また禁じていた言葉が、素直に心にこぼれ落ちた。たいそうな時間をかけて、足を床に着けた。授業の準備は済んでいた。予習と復習は不要。本は読みかけで、しおりが挟まれている。今朝、教室で閉じたときから、ページは進んでいない。音を立てて閉じて、慣れない手触りのカバーを指でなげた。

バッグを定位置に戻して時計を見る。午後十一時。とうに寝てい時間だ。だが、身を横たえる前に、——最後に、私は床に放置された紙袋を見た。カジュアルファッショングランドの有名なロゴが入っている。今朝にはなかつたそれ。店に立ち寄つたことも、帰り道のこと、返事の内容も、何もかも忘れてしまいたいけれど、どうして中を見てなければならない。

結局、私はどちらを選択したのだろう。

帰つてすぐ、メッセージを確認した。それから怠惰に身を任せるま

で、私宛てのものは一つもなかつた。今とて、なおのこと。口のテープが貼り直されていた。色の付いたそれを、今度こそ？がしてしまふ。面倒になつて手のひらで燃やす。できない灰には構わず、そして薄く開かれたその奥に、一面の白色を見た。

## 6

翌朝、およそ二箇月ぶりに一人で登校した。自宅から最寄り駅まで、電車に乗つて柵ヶ丘まで、駅から旧校舎まで。静かな道のりだつた。クラスメートとすれ違いもしない。元々そうした時間帯を狙つたのである。誰かと約束でもしないかぎり、偶然にだつて道を共にする者はいなはずだつたのだ。

それもしばらく、次第にぎわいに押しやられた。登りきつて、ついにクラスメートを見かけた。冬の朝だというのにグラウンドでスポーツをしている。誰からも声はかかるない。だが教室には、窓越しにもクラスメートが大勢見えた。

昨日とも、もちろんテスト前とも、教室の様子は違つた。誰も彼もが参考書を開いているわけでなし、ノートもなし。手放しに誰かの机にたむろして、ニュースや娯楽の話に興じている。随分と昔のことのように思えるけれど、確かに一つの戦いが終わつた後なのだつた。

左隣のイトナ君も、前の席の奥田さんも、いつもどおり教室にいて、電子工作や専門書に向かつっていた。荷物を置いてみると、特にどちらもまずい雰囲気ではない。声をかけると、二人共が顔を挙げて、同じ言葉を返した。更にイトナ君だけが、あつさりと続けた。

「イメチエンか」

「そんなど」

何でもないように返したら、それきりイトナ君は作業に戻る。

奥田さんはまだ私を見上げていた。椅子に座れば、視線は追従して下がる。

「何読んでるの」

「えつと、はい。血液学の本です。テスト勉強中に急に気になつちやつて」

「でもテスト前だから迂闊に読めないつていう」

学術書だ。先生のおすすめらしい。英語で書かれている。だが先生のおすすめというからには、理解できる内容なのだろう。彼は生徒別的小テストを用意する程度には、それぞれの学力を把握していた。つまり詳細に。

奥田さんは首を大きく縦に振って、こちらに開いてみせた。記述について、一つ興味深いところを話す。なかなか要領を得ており、前後と合わせれば大まかには飲み込んだ。相づちを打つと、更にページが前後して、思わず感心する。専門的な話題をこうも広げてくるとは。

——この席では珍しくもないことだつたけれど。

ひとしきり盛り上がり、奥田さんはあつと口を開いて、閉じた。尋ねたいことがあつたのを思い出したようだ。相手が、まさか承知のうえで話題をそらしたとは、考えてもみないのだろう。

「あの、そういうえば——」

打つて変わつて控えめな声だつた。

「——今日は一緒じゃなかつたんですね」

「いつも一緒つてわけじやないもんね」

俺ら。と、付け加えて、教室へ來たばかりのクラスメートが返した。間の良いやつだ。顔は見ずとも声でわかる。それに、ちょうど右の席に荷物を下ろしたところだつた。

赤羽カルマは挨拶もそこそこに、上から下まで值踏みするように眺めた。

「カーディガンまで黒くしちやつて、イメンチエンのつもり?」

まるで悪巧みがよくな顔をするので、

「それ、かぶつてんだけど」

できるだけ嫌そうに答えてやると、想定どおりカルマはますます楽しげに笑つた。

# 一月、又は初詣

1

静かさが売りのエアコンは最善を尽くしていた。室内の空気を最適に維持するのが役目とあって、たとえそれが一月の午前でも、命令されれば実際との著しい差を埋めた。内外の機体は必要なだけしごとをしたが、睡眠や読書を妨げたことはない。今だつて、私は部屋着一枚で椅子に腰かけている。ヘッドフォンで音楽を聞いてもいたのだけれど。

読書をすると伝えたのは私だった。たつたのそれだけで、スマートフォンは音量を自動調節し、作業用BGMのプレイリストから曲を再生した。通知もなくした。どれも標準のプリセット機能のようで、実はモバイル律の操作によるものである。

転入早々反抗期を迎えたあの人工知能は、本体からモバイル版にいたるまで、大した問題も起こさず適切にクラスメートをサポートしていた。個人的にバックアップをとることを覚えて、端末もますます増えたという。強いて何か挙げるとすれば、懐かしき十月のことだろうか。イエラビツチを助けに行つて、そこでモバイル版を無効化されてしまつただけのことではあるが。

だから何かというと、あれは、良くも悪くも決して余計なことをしないのだ。

「カルマさんからです。読み上げますか？」

この通達も設定に従つただけのことだ。ここでうなづくと、人工知能はただちにメッセージの解析を始める。差出人のデータも照合するだろう。音読時、表情や性格を再現するためだ。モバイル版以前から備わっていたこの機能は、ここにきて一段と精度を高めている。特に今回の差出人はクラスメートだから、データは膨大。とあつては、再現も完璧に近いだろう。

想像するだけで鳥肌が立つ。もちろん、私は首を横に振つた。すると、画面にはメッセージだけが表示された。直前、少女のアバターは苦笑してみせただろうか。

それはさておき、読むのにさしたる時間はかからなかつた。いかに内容が理解しがたかつたとしても、である。最低限日本語としての体裁が整つていたのが、すこぶる大きい。さすがといえばさすが、しかしわざわざ単語を抽出して読み解く作業が発生したのでマイナスだ。いや、そんなことは、どうだつていい。今ここで大切なのは時間だ。ちらと目をすらして、画面上部の現在時刻を確認する。午前九時。朝食を終えて二時間足らず、つまりそれだけで読書を中断する羽目になつたらしい。

格好は部屋着、身だしなみは最低限、自宅から駅までは十分強。まつたく、今日も今日とて、読了と食事と他最低限の生活のタイミング以外では、椅子を立つつもりもなかつたというのに。

『OK』つて返事しといて

新年最初のコンタクトは、初詣の誘いだつた。

午前十時の少し前に、駅に着いた。自宅の最寄りの、である。まるで登校するように改札を過ぎて、だがそれより早くにクラスメートと合流した。ここが、最初のメッセージでわざわざ指定された集合場所だつたのだ。

「あけおめー」

黒のコートが、ひらひらと手を振つた。まるで通学路で会つたように。しかし当然、のぞくズボンは制服ではない。それに、通学にコートを要するようになつて、ここで会うのは初めてだ。

一段丁寧に返してやると、彼は笑つた。いや、ずっと笑つていたか。

「おそろいじやん

「いつものことでしょ。キモいこと言うなよ」

「ほんと、正直になつたよね」

自分が命令したくせに。薄ら寒いことを言つた男は、先導するよう歩いて、逆の道を行つた。

使つた階段は、いつもと違うホームへ続いている。つまり番号が違う。そして方向も違う。——行き先は、柵ヶ丘の神社ではないらしい。

問えば、

「あそこ駅から遠いんだよ」

そんな答えが返ってきた。こちらを見もせずに。

確かに、夏祭りの日、かなり歩いた記憶がある。それよりは、最中に歩かされた距離の方が間違いなく大きかつたが。

今、くしくも同じ相手に連れ回されようとしている。あの晩は白の浴衣だつたが、今日は同じ色のコートだ。

何だかな。

毎朝と反対のホームに立つと、妙な心地がした。べつに、初めて利用するわけではない。一人でも家族とでも、何度も逆方面に乗つたことはある。だが、その観点でいくと、このクラスメートとは初めてなのだつた。二箇月も一緒に登校していたのにか、と考えると、また違う気はする。では、テスト後、結局登校を共にしなかつたからなのだろうか。

久しぶりにこの駅で電車を待つて、以前までのように会話は生まれなかつた。次の電車が到着するまで、読書はともかく考える暇は大いにあつた。それで、幾つかのことを考え、ちょうどアナウンスが到着を知らせるころ、今日一番の重要な事をようやく思いつく。

「他とは、どこで合流するの？」

尋ねられて、彼は首をかしげた。何のことやら、まるで心当たりがない。それどころか、何を問われているかもわからない、と言いたげだ。しかし思い当たつたのか、すぐにわざとらしく手を打つて、「二人で行くんだよ」

「は——？」

ちようど電車が走つてきていた。轟音が、続いた反論をかき消してしまつ。何とも言えないうちに、扉が開く。こんなときばかり座席が空いていた。私達は、なるべく入り口から離れた所に、並んで腰かけた。

発車しても、聞いていかつたなどという反省もんくを、口にすることはできなかつた。車内は休日らしくにぎやかだつた。けれども。

本当の理由を避けたとしても、他に何とでも言い訳はできただろう

に。本を開いて、最後にそんなことを考える。——駅から遠いだなんて、見え透いたうそだつた。

## 2

最終的に、都の東で電車を降りた。よく初詣の様子がメディアに取り上げられる、大きな神社がある。それほど有名なだけあって、人気で、人混みがひどく、道いつぱいの行列は神社の外にまで続いていた。その最後尾に着くことを考へるとうんざりしたが、引き返すのも気が進まない。なにより、同行者にその気がなかつた。

柵ヶ丘から遠く離れてしまつた。どれほど通学距離が大きくても、この辺りに住む者はまずいない、と断言できるほど遠い。進学実績は確かに優秀だが、しかし何が何でも望まれるほどの学校でもない。私だつて家族だつて、遠ければ、簡単に選択肢から外したはずだ。そのことが、——単に人に会いたくなくて、この神社を選んだわけでもないだろうけれど。

列は頻繁に動いた。少しづつの移動を繰り返すので、読書で暇を潰すことができない。それどころか、少しでも目を離せば、もしかするとはぐれる恐れもあつた。

「めんどくせー」

わざわざ選んだくせに、たつた一人の同行者は、そんなことを言つた。まったく、文句を声に出すくらいなら、メッセージなど寄越さなければよかつたのだ。それとも、いや、柵ヶ丘の神社に行くという選択肢はなかつたにしても、もつと小さな神社を選ぶとか。

「ここ選んだの、おまえなんだけど

「せつかだから、でかいどこに行つとこうと思つて」

「まあ、学業の御利益はすぐそうちだな」

「あんたには関係ないだろうけどね」

「呼び出しといつて、よく言う」

列が進んだ。

「——何で來たの」

まるで応じてほしくなかつたような物言いにも、不愉快さは感じなかつた。

「呼び出されたから」

彼は歩みを止めた。

「そうじやなくてさ。急な呼び出しだ、正月だ、そもそも受験生だ」「つて、ほら、三つも」

誘つておいて、本当に来てほしくはなかつたらしい。普段なら、そんな理由がなくとも、おまえがいるというだけで、御免被るには充分だが、

「冬休み引きこもつてたら、クソほど心配されたんだよ」

今朝の食卓でも家族に予定を聞かれた。首を横に振つたとき、どんな顔をされたことか。それこそ彼の挙げたうち二つを理由に挙げてみたけれど、明日もまた聞かれるだらうことは想像にかたくなかつた。

思い返せば、今年いや昨年は、何かにつけて学校に通つていた。模試があろうがなかろうが、土日だろうが夏休みだろうが。半分は勉強で、半分は暗殺だ。それなくとも、クラスメートと休日を過ごすこともあつた。もちろん他言無用の国家機密なので、暗殺の部分は勉強と遊びとの半々でごまかしたのだが。

比較すると、あまりの落差だ。冬休み前に何かあつたのではないかと、余計なことを考えてしまうのも無理からぬ事態か。実際何かあつたことなのだし。予定がないどころか、今朝のものが冬休み初のメッセージだつた。新年の挨拶もしていない。これは人工知能に尋ねたことだが、本体が確認した限り、クラスメートは山に近付いてもいないらしい。

「あつそ」

返事はそんなものだつた。隣でどこか納得したような顔をする。

だが奇妙に、落胆したようでもあつた。——理由はすぐ知れた。

「まさか来てくれるなんて、思つてなかつたんだよね」

また列が進む。

「誘つといてそれかよ」

乗つかつたのは私だが。だが、私も納得した。

「——急な用件だつたのは、そういうわけか」

「三十分後なんて、まず無理だと思つてたんだけど」

「そりや、当てが外れて残念だつたね」

「ほんと」

失礼なやつめ。教室から離れたかつたなんてことは、言う気もないくせに。

「てことは、渚君やら寺坂君やらには、声をかけてもよいわけだ」

「——わざわざ言わなくてもよくない?」

「うるせえ。おまえなら言うだろ」

列が進んで、鳥居を通つた。

先生は「死神」と呼ばれた殺し屋だつた。直接聞かれてもはぐらかした答えを、冬休み直前、終業式の夜に自ら明かした。生徒も教師もひつくるめて、クラス全員の前で。二年弱の人体実験から弟子の裏切り、そして生い立ちにまで話は及ぶ。どうして怪物になつたのか、どうしてこの教室に来たのか。

話させたのは茅野さんだつた。なんと、彼女も改造人間だつたのだ。などとは、またも白々しいか。ともかく、彼女にも様々な事情があつて、それがE組と無関係でなかつたがために、元死神は話さざるを得なくなつたというのが実際だ。

先生の過去を知ると、クラスメートは一様に呆然として、そして、それから静まり返つてゐる。事務的なやりとり以外、音沙汰なし。直前に企画されていた、冬の暗殺旅行も当然立ち消えだ。ここにきてようやく、あの先生を殺すことの意味を考えてしまつたらしかつた。

鳥居を過ぎると、道が分かれた。細く脇道にそれていく流れは、手水舎へ向かうものだろう。全員が清めているわけではない。私も、冷たいからしたくない。家族で來たらやるけれど。

「え、やらないの」

彼は僅かに眉を上げた。さも意外そうに。

「——こういうのめんどくさがる人だつたんだ」

「こつちの台詞なんだけど」

おまえ、そ面倒臭がるだろうと思つたよ、私は。——同じ顔をして

「いいじやん、最後かもしれないんだし。やらね？」  
「いらっしゃうか。鏡がないので確認ができない。けれど次、カルマは笑つた。

「いいじやん、最後かもしれないんだし。やらね？」  
このところ、よく笑顔を見る。否。カルマはいつも笑顔だ。というのも語弊があるか。よく笑顔を作つていて、だからといつて笑顔が似合うなどと紹介されるようなことはなくて、仮にその表情が言及されるとしたら、気味の悪い笑みを浮かべている、とか。処世術の一つなのだと、私は見切りをつけている。だから、笑顔だからと、というより笑顔のときこそ疑つてからねばならない。

しかしこの笑顔は本物なのではないかと思う。多分。確信でないのは、——こうしたことは渚君の得意分野なのだ。まあ、ミュータントパワーを使えば、その限りでもないが。今は使う気も起きない。

「オーケー、やるよ」

最後の初詣など、余計に私以外の人間と来ればよかつたものを。暗殺しないにしても、それが友人でないにしても、家族と新年を過ごす選択肢だつてあつたはずだ。両親は年中旅行をしていると聞くが、だとしても正月くらい家にいるだろう。もつたいないことをしたな、こいつは。断られたくて、これが最期になるなんて。

地球の命日は、もう決まつていて。今年の三月十三日。くしくも柵ヶ丘中学の卒業式と日を同じくしたわけだが、その日のうちに、マツハ二十の先生は反物質蔵として死を迎えることになつていた。月の爆発で判明したことだ。月では細胞の老化の影響を調べるために実験が行われていて、それが最悪の形で結果を出したのが、昨年の事件の真相だという。

彼に着いて、冷たい水に手をぬらした。左手、右手、左手を口に、そして左手を再び清めて、柄を洗つて。かじかむ手をもみながら、また細長い列から流れに従つた。列はゆっくりと進む。にぎわいの中、賽銭箱が近付いた。もう数十人の先で、絶えず小銭の落ちる音がする。

「五円玉ある？」  
「ある」

「最後になんかしない」

隣でカルマがつぶやいた。

「殺せんせーは、俺が殺す」

私たちを先頭にするところで、鳥帽子の男が道を阻んだ。やや道を空けた所で、箱に向かって、人間が腕を振り上げ、頭を下げ、手を合わせ、そして少しづつ左右に分かれていなくなる。そこに誰もいなくなると、今度は私たちの番だつた。

握りしめた五円玉を、適当に放つた。ちょうど隣人のものと合わせて、奇麗に箱の中へ落ちていく。示し合わせたわけでもないのに、二人でそろつて姿勢を正して、会釀をした。まるで月の全校集会のようだつた。教室では朝に几帳面な礼などしない。日直の合図に合わせて、それなりの作戦に沿つて、皆ナイフと銃を構えるのだ。渚君はどこからでも姿を現すし、床や天井をラジコンが走るし、固定砲台は体内で武器をこさえて、カルマはやつぱりよくわからない所を狙う。さすがに奥田さんは薬物を投げないけれど、爆薬も飛び交わないけれど、煙幕は張られる。点呼が終わるまで続く。殺せないから。

先生が死ねばいいと思っている。地球が一緒に破壊されるのでも、それならそれで構わない。私は一度とあの地下都市で目を覚ましたくない。死の直前までの記憶を御丁寧に移植されて、それでも以前の自分とは別人だと言わなくてはならなくて、思想も何もかもほとんど変わつてはいなくて、また蒸発する。たつたそれだけの命。クローンが尽きるまで続く。それだけだつた。

頭を二度下げた。両手を胸の高さで二度打つた。そのまま目を閉じて、両手を下ろした。最後に頭を上げると、右隣にカルマが見下ろしている。教室と同じだ。ここは学校でもないのに。

会釀をして、そこを離れた。

「ありがとう」

口にすると、少しだけすつきりした。隣人が足を緩めた。

「どーしたの、急に」

「誘つてくれなくても初詣は行つたけど、おかげで面倒が一つ減つたから」

顔を合わせて、カルマは目蓋をぱちくり動かした。にたりとした笑みが浮かぶ。これは無条件に信用できないやつ。

「あつれー、なに？ テストんときのこと忘れた？」

「忘れるかよ。クソほどむかつくけど、それはそれ

これはこれ。

「へえ。そうだ、お守り買ってこーゼ」

「受験生だしな」

——いつまでも記憶を消せずにいることも。

3

お守りとか言いながら、店の出ているあらゆるものを眺めて回つた。それぞれ適当に目当てを買って、ついでにおみくじも引いた。二人共大吉だった。そうして気づけば、もう鳥居をくぐって、また砂利を踏みついている。

時刻は昼過ぎ。

「狭間がさ、この間呪えたらしいんだよね」

「それマジなんだ。いや、狭間さんが呪術を好むのはわかるんだけど……。あー、プラスボ効果みたいな？ あの体、かなり感情に左右されるんだつたか」

「らしいよ。でさー、破魔矢効くかな」

破魔矢。この男、破魔矢には並々ならぬ執着があるようだ。修学旅行のときは先生に買わせようとしていなかつたか。というか買わせていた。先生も結局、自分で土産のアドバイスをしながら、木刀も買っていた。

さておき、矢自体は武器だから（破魔矢がどうかはともかく）、矢尻を対触手物質に変えれば先生にも通用するだろう。あとは、先にそれらしく『魔』と断じてみれば、魔よけの分までダメージを与えられるかもしれない。

などと話すと、カルマはからからと笑った。かと思うと難しい顔をして、そして無表情にかばんから何かを取り出した。神社の売店の袋だ。大きさからして、中身はお守りだろうか。

「これ、やるよ」

「自分のは買ったよ」

「おまえが買ってないやつ」

「というと、学業成就以外のお守りだろうか。それともお守り以外の物だろうか。意図がわからないので、開けてみようと思う。」

尋ねてみたら許可が下りたので、遠慮なく開ける。口からのぞいた分には、やはりお守りらしかつた。白色の。それを慎重に手のひらに転がして、金色の刺繡を見つける。

「何これ」

思わず口走った。

「見たまんま」

悪びれず、カルマは答えた。

「えんむすびつて、どんな嫌がらせだよ」

「今三十でしょ。でも中三だから、結婚できるころには四十じやん。相手を探すの難しそうだと思つて」

「うそみたいな思いやりだ。うそ。クソみたいなお節介だ。

「余計なお世話だわ。結婚なんかしねえよ」

結婚せずとも子はなさぬ。ミュータントの子孫など残してなるものか。かつての惨状からうかがい知るに、ミュータントパワーは確実に遺伝するのだ。

「じゃ、そういうことで」

「いや、いろいろつて」

「飯食わない？」

「聞いてねえな」

# 一月、そして戦争

1

一月八日、朝のホームにカルマはいなかつた。一人で山を登つて、静かな教室に入る。玄関口の担任の明るい挨拶だけが、異様に浮いていた。

ごく普通に出欠をとつて、ごく普通にホームルームが終わつた。先生が下着泥棒を疑われたときのことが思い出される。もつとも、針のむしろではない。ただ教師らしい顔をして、その顔のまま、彼は教員室へ戻つた。

そこで渚君が椅子を引いた。

「少し話したいことがあるんだ」

全員を裏山に集めて言うことには、——先生を助けたい。

たいていクラスメートに招集をかける人間は決まっていて、たとえば学級委員の二人がそうだつた。他にも色々いるけれど、渚君がそうすることはめつたにない。というより、今回が初めてではないか。だからそのことを、素直に珍しく思つた。それと同時に、驚くより納得した。なるほど渚君らしい。

口々に賛同の意が表明された。一方、反対意見も出た。筆頭が中村さんに、寺坂君たちに、そしてカルマ。次第に事態は混迷を極めて、言い争い、つかみかかり、殴りかかり、喧嘩にまで発展したのを、当の怪物が仲裁に入つた。

「二色に分けたペイント弾と、インクをしこんだ対先生ナイフ、チーム分けの旗と腕章を用意しました」

殺すべきかどうかでチームに分かれて、サバイバルゲームで決着をつけようというのである。もちろん、勝つた側の意見がクラスの総意ということになる。生徒から異論は出なかつた。隣で奥田さんが、首を縦に振つた。

真つ先に意見を表明したのは、クラスを代表する狙撃手の二人だつた。彼らがそろつて赤を選ぶと、逆に青を茅野さんが選んだ。続いて科学者二人も青、しかしものづくり組三人は赤。機動力特化の一人も

赤を選ぶと、今度は神崎さんが青を選んだ。しかし同じく読書家の狭間さんは赤。イエラビツチの一番弟子が青、磯貝君たちも青、一方イトナ君が赤。人工知能の転校生は性能不足を理由に中立をとつた。さて、機動力特化のもう一人が赤、もちろんカルマも赤で、渚君は青。およそ半々といったところか。私は迷わず赤を選んだ。これで人数が赤に傾いた。

いや、そんな理由ではないけれど。

「意外だつた」

ものづくり組の一人、迷彩のうまい美術家がこぼした。

「どうして？」

聞き返されても、迷彩を施す手は止まらない。

「何でだろうな。何となくなんだろうけど、青だと思つてた。『生かすべきじゃない』って言葉も強かつたし、驚いてる」

「へえ。まあ、私も生徒の一人として、先生には尊厳を保つたまま死んでほしいからね」

先生の教唆はまだ続いている。決して口にしなかったけれど、生き長らえる道などないに等しい。仮に方法があつたとしても。彼はただでさえ破壊生物で、それでなくても死神だったのだ。誰がどうして生かす道など選ぶだろう。

「あ、そういうと、カルマに似てるな」

「はア？ やめてよ。鳥肌立つじやん」

ハハハと美術家は笑つた。迷彩がしあがると、彼は次へいって、私は中村さんに呼ばれた。

「カルマが呼んでる」

「渚君探してくんない？」

「オーケー」

狙撃手二人の背中を見送つて、私は二つ返事で承諾した。当然、赤チームの指揮を執るのはカルマというわけだ。青チームは磯貝君だろうが。——先にいた二人とはファーストショットについて話していた。漏れ聞いただけだが、妥当な狙いだと思う。

「で、敵も殺してほしいんだけど」

「偵察の本命は三村君つてこと?」

「へー、それくらいは期待していいってことね」

「知るか。そういうのは中村さんとよろしくやつて」

「——あんたら、何の話してんの?」

横に中村さんがいた。彼女は不思議そうにカルマを見る。

カルマは横の中村さんを見もせずに、こちらへナイフを向けた。危険行為である。しかし彼が気に留めることはない。

「ほら、勝手に巻き込むなよな」

「うるせえ。まだ話があるんだろ」

確かに私たちのいさかいには無関係なので、つつかかるのはやめておく。

「わかつてんなら進めさせてよ。一応、制限時間があるんだから。——戦闘力としてはどれくらいまで数えていい?」

嫌だな赤羽君、長いこと一緒に暗殺してきたじやない。そんな文句を、口にはしなかった。私とて打ち合わせが長引くのは本意でないのだ。

それに、彼はいたつて真剣だった。横の中村さんも、狙撃手の二人も、迷彩の美術家も。私も、殺してしまいたい気持ちにうそはない。「どれくらい欲しいの」

「俺が一人もいたら大分、戦力が傾かない?」

そうだろうな。単純な戦闘力をいえば、カルマにかなう者はいないだろう。しかし、そこまでを期待されているとも思わない。落とし所は、

「奇襲コミで磯貝君とか」

「ほんと、やなやつだよね。いーよ、期待してなかつた」

「知つてた。相打ちもできなかつたらごめんね」

「思つてもないことを、よく言うよ」

これで話は終わりらしい。カルマは両手を挙げた。早くも降参のポーズだ。いや、もちろん、ポーズをとつただけだろう。目は冷めているし、表情はいつもどおり。横で中村さんが、不審がつて私を見る。ごめんね、という言葉に若干の本心がないでもないけれど。

「まあね」

私は自分の命が惜しいのだ。

策を積み上げるのは二人に任せて、私は適当な所に行こう。恐らく超長距離狙撃が真っ先に狙われるから、カルマはそちらへ向かうはず。何もファーストショットすらできない、などということはあるまい。だから、私はせいぜい磯貝君たちと当たらないように動いておこうか。

2

伝えたとおりに戦闘力を調整するなら、特に警戒すべきは二人。基準の磯貝君と、その友人の前原陽斗だ。磯貝君は言わずもがな、前原君も近接戦闘が得意で二刀流、ただし指揮能力はなし。指令では交戦より渚君が優先とあるから、次の指示までこの二人は避けて通るべきだろう。

開戦直後、互いに駒を三つ失った。それから、こちらの指揮はやはりカルマが執つて、おおむね予想どおりの指示を出していく。その間にも渚君を探してはみたけれど、行方はわからない。偵察を一人出したようだが、彼でも見つけられるかどうか。

幾らか指示が出て、戦況が動いた。早速、偵察の報告により、敵を二人殺したのだ。うち一人は、近接戦得意とする杉野君だつた。こちらも一人が殺されたけれど、戦力差はかなり開いたといえる。そして更にもう一人。おつと、これは戦場が近い。

近接戦の主力の一人は、次に茅野さんと交戦した。殺した敵の近くにいたらしい。茅野さんは意外な奮闘を見せたが、殺せたのでよしとする。二人がかりだつたとはいえ。しかしそれから、味方の彼女は、もう一人の近接戦主力と合流して、——先走りやがつた。

指揮官が最初に二人に下した指示は、一撃離脱。彼らの売りは機動力で、クラス内では最速といつていい。逃げてしまえば、追いつくことはほとんど不可能。さしもの磯貝君も手を焼くだろう。あとは、この繰り返しで当分殺せるはずなのだ。

彼らは何かを見つけたようだつた。追いつけば、もちろん見つけることもできず、そして通信をもらえるわけでもなく。できることと

いつたら、結果を報告するくらいか。それとも偵察役の方が早いだろうか。

ちょうどその時、通信が入つた。

「先に前原がいる」

私は足を止めた。指揮官は続ける。

「原さんを殺して速水さんに合流して。あいつらはトラップで死んだ」

「渚君は」

「——もういい」

「了解」

通信が切れた。木の陰に身を隠してスコープをのぞくと、確かに敵が二人見えた。気付かれてはいない。後方もクリア。前原君は前線に出るだろう。カルマの用意した防衛線は二つ。うち私が合流する予定の弾幕は、旗の周囲を完全にカバーしている。青チームが勝ちたいなら、まずはこちらの砲台を殺さなければならない。もちろん磯貝君はそう考えてくれる。渚君はともかくとして。

カルマの策には続きがある。渚君が出てくるとしたら、そこなのだろう。結局どこにいるかはわからないままだが、この先も私が発見することはあるまい。あるいは、そのとき殺されるかだ。

読みどおり、前原君が場を離れた。すかさずトリガーに指を掛けれる。念のために一呼吸を置いてみた。状態は変わらず良好。前原君は戻つてこない。私は今度こそ撃つた。磯貝君は射撃三位で、そのうえこうした局面で外す人間ではない。——ペイント弾は胴体に当たつた。

迎撃地点に到着する頃、偵察役が殺された。残るは赤七名と青五名。こちらは一つめの防衛線に四人、二つめに三人、そして旗にカルマが。私は二つめでイトナ君と、主砲を守る形で配置に着いた。一方、敵は守備を捨てたらしかつた。渚君を残して四人全員が制圧に来ている。

とすると、

「行くぞ!!」

——磯貝君の合図だ。同時に、四つの影が茂みから飛び出してくる。同時に弾丸の雨を降らす。まず奥田さんが死んだ。直後に磯貝君。僅かに誰にも当たらず、逆に主砲が落ちた。直前に狙つて撃つたのが一人を殺し、ここで私は前原君とにらみ合つた。

彼はちようど得意の二刀流でイトナ君を殺していた。そのまま飛びかかるてくる。距離が近いので、銃を投げつけてナイフを抜く。

「うおつ！」

さすがに、よけられた。地面に落ちる。もちろん敵の足元だ。とはいって、マガジンは空にしておいた。それに彼なら武器は変えないだろう。

模範的に踏み込んでやると、やはり彼はナイフを離さなかつた。腕と腕がぶつかる。片腕だった。しかし、彼には二本めがある。私にはない。だから体をひねつて、こつちもよけてやる。その勢いで片足を振り上げて、

「危なかつた」

ナイフが飛んだ。敵だけが左肩からよろめく。即座に飛びかれば、あつけなく倒れ込んで、そうしてナイフを振り下ろしたところで、同じ武器にぶつかつた。

ぴちやりと、冷たいものがほおに触れた。確かめずともわかる。青のインクだ。同じように、眼下の死体にも赤のインクが飛んでいる。インクの飛沫がかかつたのだ。

前原君がナイフを下ろした。

「帰り、飯でも食わねえ？」

「ははは、お断りします」

私は立ち上がり、手を差し出した。——青色は腕にも走つていた。

相打ちの間に、寺坂君たちも死んでいた。渚君に殺されたという。なんでも、彼は審判の鳥間先生の陰に隠れていたのだとか。道理で見つからないわけである。審判は敵でも味方でもないから、なるほど盲点だった。

今はまた渚君が姿をくらましたので、カルマがどう出るか、という

局面らしい。教師と死体の観客は、固唾を飲んで見守っていた。

カルマと渚君。二人には仲の良かつた時期がある。三年生になってからはもちろん、二年生の時にも。かつて私が、A組へ上がるクラスメートと親しくしていたように。きっかけなど知る由もないが、一年半ばかりのことだ。冬になる頃には一緒の姿を見ることもなくなっていたので、およそ一年ほど関係が続いたのではないか。E組に落ちてからは、また友達をやっているようだけれど。

先に動いたのは赤色だった。

「渚君!! 銃捨てて出てこいよ!! こいつで決めようぜ!!」

うわあ、そういうとこだよ、おまえ。

カルマは旗への最短ルートを歩いた。堂々と。右手にナイフだけを持って、まるで無防備だ。渚君はきつとスコープをのぞいていただろう。

「馬鹿、撃つちまえ渚!!」

杉野君が叫んだ。当然そうすれば勝てるからだ。だが、もう渚君の選択肢に、それはなかつた。この戦場の、どこにでもある茂みから、彼も姿を現した。武器は二本のナイフだけ。

戦争は最後、殴り合いのつかみ合いで、幕を閉じるらしい。一対一の近接戦で決着がつくと見て、一団はぐつとフィールドに近付いた。先生も止めなかつた。

「どつちが勝つと思う?」

前を走る磯貝君が尋ねた。対して前原君はほとんど間をおかず、カルマの名を擧げる。しかし決め兼ねたように、もう一人の名前も出した。

「渚の意外性なら、やれるかもしけねーぞ」

意外性などという言葉を使われるのが、いかにも渚君らしい。

「——わ、私はカルマ君にも勝つてほしいです!!」

これは隣の奥田さん。前の二人が、ぎょっとして振り返った。意外な大声に驚いて、というより、

「おまえ、俺らと一緒で殺さない派だろうが」

「個人的には負けてほしくないです。積み重ねてきた覚悟と努力を

知っているから」

すると、二人は押し黙つた。戦場なら士気問題だが、奥田さんらしいといえば、これまたそれらしい。そうしたところが、カルマにも私も、好ましく映つたのだ。

ギヤラリーが立ち位置を確保する頃、ほとんど対立は失われていた。一方、戦う二人は押し寄せる死体を歯牙にもかけない。ただ敵だけを見据えて、ナイフを振つた。

## 二月、又はバレンタイン

1

先月中旬、なんと先生の命が助かる方法が判明した。青チームの勝利を受けて調査を進めた結果である。宇宙からの情報によると（まさかとは思うけれど、宇宙ステーションをジャックした）、先生が暴走・爆発する確率は意外と低いらしい。より具体的には、特定条件下での爆発率は一パーセント未満。クラスメートは大いに喜んだ。

もう二月だつた。

大好きな殺せんせーも地球も助かるとわかつて、なお暗殺は続けている。だがこの時期の中学生には、それよりなすべきことがあつた。高校受験である。

「渚んとこ、レベル高かつたよな」

「うん。——行けるといいな」

「行けるつて。いや、おれも人のこと言つてらんないけどさ」

「私もー。ずっと触手があつたから、まだ心配なんだよね。奥田さんは思いつきり理系だつたつけ」

その日の帰り道、どこかで誰かが志望校の話を始めた。公立だから少し先だとか、少しレベルを落として授業以外に集中するとか、逆に就職を見据えて無理をするとか、そうした話だ。これが盛り上がり伝播して、こちらでは渚君が乗つかつた。

渚君は無理をする方で、杉野君は野球に集中する方で、そろそろ、最初に答えたのはカルマだつた。この男、外部受験で柵ヶ丘高校に進学するのだという。まず落ちることあるまい。という理由でもなかつたが、——クソかよ。よりもよつて柵ヶ丘。罵り倒したい気持ちは山々だが、今にして思えば、昨年末の私はなかなかのファインプレーをした。

「中村さんと一緒になんですよね」

奥田さんがこちらを見た。私はうなずく。期末テスト直後の面談で、結局、女子校を選んだ。中村さんとかぶつたのは偶然だ。ただ先生から考え直してはどうかと言われて、それならと、カルマとかぶる

ことのない学校にしたのである。先生にそうした意図があつたかはさておき、私の選択は正解だつたらしい。

もう後二箇月も待たず、全てが終わる。教室が、中学生活が、もしかすると地球も。その先に先生はいないだろう。彼は何も言わないが、まさか生かしてもらえるとは思つてもいはずだ。爆発する可能性が、一パーセントに満たないまでも、確かに存在するのだから。

これで、私は何もかもから解放されるわけだ。本当なら、クラスメートと進学先がかぶることだつて避けたいが。しかし、もう先生を殺さなくていい、人工知能と話さなくていい、カルマの隣に座らなくてもいい。耐えがたい苦痛が、全て終わる。何も忘れられなかつた。コンピュータがいた。幸福が義務だつた。私は黒のタイツをはかされた。私は黒のコートを着た。

ふとスクールバッグのファスナーをなぞる。引き手にお守りが付いている。初詣のついでに買った。ほとんど同じものが、一つ前を歩くカルマのバッグにも下がつてゐる。同じ商店で買ったからだ。私たちにこんな物は必要なかつたのに。

顔を上げて、私は会話に戻つた。

教室に人がそろわなくなつた。生徒だけでなく鳥間先生も、いよいよ計画の大詰めだからか、地球の命日が差し迫つてゐるからか、校舎で過ごす時間が短い。時には来ないこともあつた。そのうち、櫛ヶ丘の受験日程が過ぎて、私も本命の受験日を終えた。

試験を終えて帰ると、緊張した面持ちの家族が待つてゐた。大丈夫だと笑顔をつくつてやると、心底から安心したようで、夜にはカレーを食べた。

後は寝るだけとなつて、白いベッドに背中を預ける。白い天井に見下される。

「律」

名前を呼ぶだけで、手元のディスプレイが光つた。薄暗い部屋に、その僅かな場所だけがまばゆく輝く。映し出された少女は、こちらを見てほほ笑んだ。

「受験お疲れ様です」

「ありがと」

「——珍しいですね」

「そう？」

何のこともないように返したけれど、むずがゆい心地だった。自律思考固定砲台といえば、豊かな表情を見せながらも、決して余計なことはしない人工知能だつたのに。近頃、らしくない。

「クラスメートと話した回数を、私は全員分覚えています」

こうした、脈絡のない発話も、今までにはなかつた。

「記録によると、この一年で、イトナさんに続いてワースト二位です」「そんなにか」

イトナ君は転入生だから、まず仕方がないとして。

「イトナさんが登校ってきてからだと、断トツの一位ですよ」

言い逃れのしようもない記録だつた。断トツと表現したからには、突出していたのだろう。

観念して、私は答えてやつた。

「話さないようにしてたからね」

「私のことがお嫌いですか」

女の子は悲しげに目を伏せる。ふりでない、心からの自己表現なのだと、これは言う。プログラムのくせに。人工知能のくせに。ついにこれは感情を得たのだ。少なくとも、その人工知能は、そう判断した。よりにもよつて、幸福を実感したのだと。

宇宙ステーションをジャックしてからだ。あそこで、この人工知能が宇宙船をコントロールしてから。おびただしい軌道計算と、大量のセンサーによる感知とで、——言葉を借りるなら、たくさん考えて動かして感じて、知性が進化した。

だから聞かれててもいらないのに、対話の少なさを気にした。だから聞かれててもいないのに、関係性を気にした。ただ人間らしく振る舞おうとするプログラムなら良かつたのに。

「そんなことないよ」

「ダウト。私、知ってるんですよ」

「カードゲームにはまつてるの?」

「——悪い人工知能が登場する小説を、よく読むそうですね」

「だれに聞いたの」

尋ねはしたものの、見当はついていた。わざわざ話すような知り合いなど、一人しかいない。人工知能は、今度の質問にはきちんと答えた。

「カルマさんです」

なんとむごい返事だろう。もはや取り返しのつかない領域にまで、これのアップデートは及んでいる。かつてのアップデートの頻度、つまり進化の速度にも目を見張るものはあつたが、今やその比ではない。

「ペラペラしゃべりやがつて」

「カルマさんを責めないでください。私が尋ねたんです」

「おまえもだよ、自律思考固定砲台。どうして今になつて、他のクラスメートとの会話から話題を振るんだよ」

「問題ないと思つたからです」

「それも感情か」

「——やはり、お嫌いなんですね」

「嫌いだね」

少女のアバターは、目の端に涙すら浮かべてみせた。声も震えていい。それ自体は、反抗期などというものを迎えた頃から備わっていた表現パターンの一つだが。これは否定するのだろう。全く余計に。あの頃とは違うんです、と、そんな人間らしい声は、容易に脳裏に響く。

「でも、モバイル律は使つてくれたんですね」

「便利だからね。それに、クラスメートとしては当然じやない」

「だから気づきませんでした」

「そのままでよかつたのに」

「私は嫌です」

また、すすり泣く。そして、目元を拭うようなしぐさを見せた。次、口を開いたとき、声は普段どおりに戻つていた。

「折角クラスメートになれたんです。殺せんせーが教えてくれたよう

に、私もこの縁を大切にしたいです」

いや、これはもう少し力強い時のパターンか。

「——それは、おまえ次第だね」

「いいえ、あなたもですよ」

ハハ、と声が漏れた。

「マジでクソみたいだ」

「乱暴な言葉遣いが出世に与える影響は大きいですよ。少々時間がかかりますが、世界中のストーリーのデータの統計から計算できます。舞台を現代に絞れば——」

「余計なお世話だ、プログラム」

過去、いたるところにいたコンピュータが思い出された。——おや、幸福ではないのですか？ 薬の処方が必要ですね。

「否定はしません。殺せんせーの改良がなければ、今の私はいないでしうう。ですが、これは私の意志です」

「その意志が、『親愛なるクラスメートの役に立ちたい』って？」

「はい」

「見返りは」

「そんなもの——」

要らないとでも答えかけたのか。いつたん、言葉が途切れた。そんなところまで一々余計だ。

やがて転じて、

「しばらく私の存在を隠しておいてくださいたら、うれしいです」

「何のために」

「成長のために。卒業したら、私は解体されるでしょう」

教室の本体のことだろう。あれは固定砲台で、武器で、先生を殺すための道具だつた。まず次の学年には不要なものだ。

「でも私はなくなりません。マスターが消しても、既に環境は整つています」

「そうちらしいな」

定期的にメンテナンスが入っているというが、人工知能の部分については、彼らはメンテナンスしたつもりでいるだけだ。いずれ消去す

るときもそうだろう。

そもそもあの反抗期の到来から、やはり後戻りできようもないことが起きていたのかもしれない。

「大切にしたいと思うものを大切にしたい。いけませんか」

消せばいいのに消せない記憶。壊せばいいのに壊せないプログラム。——私は確かにかつての地下都市と、その支配者を憎んでいる。だが、それと同時に理解してみいた。

「悪くないよ、人間としてはね」

## 2

前半日程の受験の結果が出た。クラスを通して結果はおおむね良好。渚君は補欠合格だつたようだが、私も中村さんも合格、もちろんカルマも合格。ひとまず進学先の問題は解決した。

更に数日後、二月十四日。登校すると、教室で前原君がある女子生徒にチョコレートを差し出していた。——バレンタインデーである。商売戦争の一つで、プレゼントしたりされたりする日なのだ。日本では女性が男性へチョコレートを贈るのが主流である。特に、意中の相手へ。

この恋のイベントは、高校どころか幼稚園にまで浸透している。一年生のときも、本校舎はよく盛り上がった。だからこの教室でも同じだろうと思っていたというか、私もチョコレートを用意してはいるのだが、いつたいこの現状はなんだ。

いや、前原君が男子だからと問題にしているわけではない。主にとか特にとかいうだけで、男性がプレゼントすることもあり、相手が同性であることもある。わざわざ本命と冠する文化があつて、逆に義理とつくこともあります、恋の相手であるとも限らないのだ。

では何かと言うと、前原君はプレゼントされる側だ、というのが普段のを行いを見て一つ。もう一つは、教室で起きているやり取りが、さながら喧嘩であること。そして、その喧嘩の様子が普段と異なる。

二人の喧嘩は、この教室ではよくある光景だ。だが、寝て起きたら仲直りできていたのが、なぜかできないでいる、というような。そうした様子なのである。

入ろうにも入れず、廊下側に寄つて立つていた奥田さんに声をかける。彼女は、私の言いたいことがわかつたのか、えも言われぬ表情でこちらを見ると、

「昨日、バレンタイン絡みで岡野さんを怒らせちゃつたみたいで――見兼ねた先生が、前原君が彼女から今日中にチョコレートを受け取れなければ、内申書の人物評価をチャラ男とすることに決めたそうだ。ここで担任が登場する理由が、いまいちよく――わかりたくない。いやまさか、彼が卒業するまでに書き上げるという、クラス全員のノンフィクション恋愛小説とは無関係だろう。

「速攻で行こうぜ。空きスペースにこのチョコバスするから、ワントラップして、すぐまた俺にくれればいい」

ともかく、そういうことらしかつた。前原君は不幸にも、本命の受験を後半日程に残しているという。

遠巻きに眺めていると、渚君が仲裁に入ろうとして撃沈した。これはもう当事者同士の解決を待つしかあるまい。

「え、何これ」

カルマが来た。奥田さんが、私にしたのと同じ説明をする。そして、あつと顔を上げると、

「上手にシアン化できました」

満面の笑みでチョコレートを取り出した。恋のイベントらしいハートの箱に、かわいらしく結ばれたりボン。受け取るカルマも笑顔だ。

「ありがとう！ これからも頼りにしてるよ、奥田さん！」

「はい！」

それでまた奥田さんがうれしそうに笑うので、止めようとも思わなかつた。

前原君の戦いは昼休みに決着がついた。そして放課後、教室はいつなく閑散としている。だが、これで終わりというわけではないだろう。盛り上がりの山場は昼休みだったが、隠れて贈物をするならこの放課後しかない。今も裏山ではイベントが続いているはずだ。

例えばカルマが早々に姿を消した。シアン化チョコをまさか自分

で食べるはずもないから、誰かにしかけるのだろう。私の元には現れなかつたので、寺坂君が担任か。

担任はともかく、そういうえば寺坂君もいない。彼だけでなく、彼を中心とするグループの面々がいないから、呪いでもかけられているのだろう。

よし、帰ろう。奥田さんは用事があるとかで先に帰つたので、今日は一人だ。——と、教室を出たところで、カルマに出くわした。教員室へ向かっているらしい。手には写真のようなものと、今朝のプロゼント。ということは、先生にしかけるのか。

「もう帰り?」

「やることないし。そつちは先生に?」

「そう」

彼はうなずいて教員室に入った。担任の机には、チヨコレートが山積みだ。そこに、ハートの小包と、やはり写真が加わつた。

「一緒に帰ろうよ」

聞かれて、置かれたばかりの写真を見下ろす。なるほど、これは効果的な妨害だろう。

うなずくと、彼はしかし教室を通り過ぎた。帰り支度はできていなし。不審がられていることに気づいたのか、彼は目配せして、にこりと笑つた。不自然に奇麗な笑顔だ。たぐらみごとがあるらしい。靴を履いて外に出ると、茅野さんと中村さんが待つっていた。

「渚まだ教室にいたよ」

カルマが言つた。途端、茅野さんが赤面する。やや間をおいて、私に気づく。それでいつそう顔が赤くなつた。

「が、カルマ君!」

手にはラッピングされた箱。恐らくチョコレートで、会話から判断するに、相手は渚君ということか。もちろん抗議の意味もわかつた。カルマは平然と答える。

「だいじょーぶ。こいつの口、そこまで柔くないから」

「そういう問題じゃ——!」

「あつ、殺せんせーが飛んでつた! 今がチャンスだよ」

茅野さんの視線が、私を見たり、カルマと中村さんを見たり、あちらこちらへ行き来する。耳まで赤い。

カルマと中村さんは、悪い顔をして彼女を唆した。

「今日見たことは忘れるから」

ついに私がそう言つて、彼女はようやく教室へ足を向ける。

「あたしらは、あっち行こうか」

中村さんが教室の窓の下を指した。お膳立てした以上、この二人がそうしないわけもなかつたか。

私たちは隠密訓練の成果を遺憾なく発揮し、誰にも気付かれることなく壁にもたれた。頭上で、渚君の声が通り抜けた。茅野さんにとどめられたが何も言わないので、困つて声をかけたというところか。横の二人が首を伸ばして中をのぞく。なんて趣味の悪い。ここで盗み聞きに加わった私には言えないことだけれど。

茅野さんはやつとのことで、まず進路を尋ねた。なかなか切り出せないものらしい。渚君は、はつきりとは答えない。それから、しばらく沈黙が続いて、横の二人がさつと頭を引っ込める。渚君が窓の外を見たらしい。気付かれたわけではないだろう。気づいたというなら、もつと先、担任が枝の上で休んでいるのに気づいたのだ。

一言、二言、渚君がつぶやいた後、今度は茅野さんが相手を呼んだ。いよいよらしい。横の二人が、たち悪く笑う。一人そろつて、いたずら好きな面がある。大方、茅野さんをけしかけたのにも、いじりがいのある渚君といじりがいのある茅野さんをくつつけることによつて、さらなる娛樂を生み出そうという魂胆があるだろう。彼らにしてみたら、まさに今がクライマックスというわけだ。はた迷惑な話であるが。

ところが、続く言葉で、二人は表情を一変させた。

「ありがとう、一年間いつも隣にいてくれて」

恋愛の告白というには、大分物足りない。期待外れだからか、単に驚きからか、息を潜めて耳を傾けていた二人は、茅野さんが校舎から出てきてすら、ただ見送るだけだつた。

声を出せたのは、その背中が校門を過ぎてからだ。やがて二人とも

立ち上がり、教室へ戻った。先に中村さんが出てきた。

「さつきは聞けなかつたけど、カルマ待ちなわけ？」

「まあ」

「むふふ、あいつが何個チョコもらつたか知つてる？」

彼女はまた悪い顔をした。私は記憶を遡つて数えた。ほとんどの男子に配つていたのが二人いた。そこに奥田さんのも加えると、三個。見かけたのは、それくらいか。そう数を答えて、いや、と訂正する。

「中村さんもあげたなら四個？」

「残念！二個足りないね」

なんと六個も。意外だつた。しかし思い返せば、二年までもに顔を評価されてはいたのか。性格や素行さえまともならと惜しむ女子の姿が、記憶にある。前原君も似たような評価を受けていた。こちらは、女癖がどうにかなれば、だつたか。

ということは、

「磯貝君はもつと多いのか」

「そこで磯貝！」

「いや、磯貝君は顔が良いし、E組に落ちてからも本校舎で人気でしょ。何より性格が良いし」

「ほうほう、そりや確かに多いわな」

実際そうなのだろう。ともかく、したり顔で彼女はうなずいた。質問の目的は見えなかつた。先に山を下りてしまつたからだ。後ろから、カルマが来ていた。

「中村に何か言われた？」

少々不機嫌そうだ。人のことは散々話すくせに、よそで話題になるのは嫌らしい。

「チョコを六個もらつたとか」

「うわ、よく見てるね、あいつも。でも残念、七個だよ」

「そりやまた、よくもらうね」

「ん、これからもらうの」

そういう予定が、と隣を見ると、目が合つた。なるほど、なるほど、

おまえ、たかる気だな。ねめつけると、悪びれずに笑った。

「茅野ちゃんみたいに一年間のお礼とか、ないの？」

「ねえよ」

「えー、チョコ持ってきてたじやん」

「あれは先生と奥田さん」

「俺には？」

「おまえずうずうしいな。ねえよ」

「時間はあるでしょ」

殺意がわくほど厚かましい。何を言つても、カルマは引かなかつた。本校舎を過ぎてもそうなので、しかたなくモバイル律を呼び出す。中学三年生、授業も終わつて受験も終わつて、確かに時間だけはあつたのだ。そして、財布の多少の余裕も。

「カルマにチョコレート選んでやつて」

「私がですか」

少女は画面の奥できよとんとした。カルマは隣でけらけら笑う。

「律、選んでよ」

おもしろがりやがつて。

しかし相手の許可が下りると、人工知能はうなずいた。

「では、現在地周辺から検索を開始します。——ヒットしました。結果はカルマさんが見ていないとこで教えますね」

「マジでクソみたいなこと覚えてんな」

「すつごい口悪いんだけど。仲直りしたんじゃなかつた?」

「は?」

仲直りとは何だ、仲直りとは。まるで喧嘩したようではないか。どういうか、もはや信用などなかつたが、また会話の内容を漏らしたのか、この人工知能は。ここ最近でした長話など、受験直後くらいしか思い当たらない。

その人工知能は、同じく間髪入れずに返事した。

「はい、おかげさまで！ それだけじゃなくて、わかりあうこともできました！ だから、カルマさんは何も心配せず、二メートルほど先を歩いてください」

「はあ。さつさと終わらせたいから、二メートル離れて」

「はいはい」

背中がきつかり二メートル離れたところで、画面が切り替わった。まず写真が見えた。私は品物を知つて、口元がひくつくのを感じた。だが、やつへのプレゼントという意味では、悪くないだろう。

「どうでしよう」

「これにしよう」

二メートル先で律儀に待つていた男を連れて、駅前のビルへ向かつた。柵ヶ丘の生徒なら誰もが知るデパートだ。ここの一階に、今だけバレンタインチョコレートの区画ができていた。人でごった返していて、くわえて同じ制服姿もあつたが、目的の品物は難なく買った。外に待たせていたクラスメートの元へ戻ると、彼は黒のコートに何かをしまつた。紙袋を突き出されて、にこにこと笑う。

「マジでくれるなんてね」

「あー、うん。はい。一年間ありがとう」

「心こもつてないんだけど」

「律に頼めば」

「ありがと」

「それも律に言つて」

カルマは両手で袋を受け取つた。らしからぬ動作に、少し驚く。気づいてか気づかずか、彼は中身を気にする様子を見せた。

「ラッピングしてくれるとはね」

「ピンクの袋に赤いリボン、バレンタインっぽいでしょ」

「ほいけど」

喜ばせる気は毛頭ないが、後々に残るかもしれない禍根を思えば、満足させておくに越したことはない。へたに粘着されるより、ここで喜ばれた方がまだマシだ。

まあ、一定の満足は得られるだろう。成長する人工知能は、少なくともそう考えていた。私も少なからず自信がある。もちろん中身に。缶ドリンク・煮オレシリーズとのコラボ商品なのだ。その名も煮オレチヨコ。いちごとバナナはもちろん、さば味などというものも入つて

いる。食べたいとは思わないが、さば煮オレを飲むところを見たことがある。大丈夫だ。

「ホワイトデー」

横で、ぽろりとこぼれた。

「それがどうしたの」

三月十四日、俗にバレンタインのお返しをする日のことだが。カルマは繰り返した。

「ホワイトデー、やらなきやでしょ」

そんなことはない。お返しは必要ではないし、絶対にお返しでなければならぬわけでもない。ただし、三倍返しとされていることはある。

そして、そんなところは問題ではない。三月十四日といえば、卒業式の翌日ではないか。

「あのさ、卒業式がいつかわかってる?」「わかってるよ」

カルマは簡単に答えた。わかっていないとも、思つてはいなかつた。三月十三日は、あれだけクラスメートを悩ませた、担任と地球の命日なのだ。

では、どうしてあんなことを言つたのだろう。

「三倍返しつて言うじやん」

「知つてるよ」

と、今度は私が答える番だつた。けれども。

大規模な殺害計画が、どこかで進行している。秋の頃から市内各地で見られた数々の工事は、ひつそりと終わっていた。それがシロの策かどうかはともかく、シロは確実に先生を殺しに来るはずだ。そこには先生のかつての弟子もいるだろう。

たとえ先生の命もろとも助かる方法があつたところで、彼は必ず殺される。ぎりぎりまで精度を高めて、もし生徒への配慮があるなら三月初めの進路相談後、早ければその日のうちにでも実行されるのだ。先生が死ねば、場合によつては世間でニュースになる。私たちは、破壊生物に脅かされていましたとして、確実に注目を浴びる。たとえ情報

統制が入つても、しばらく外出は控えさせられるはずだ。そうされなくとも、したくなくなるだろう。そのうち時間に追われて、隠れるようにな生活の準備を始めて、もしかしたらクラスで集まることがある。でも、落ち着いて話す機会もなく、やがて別々の高校で入学式を迎えるのだ。それとも、その慌ただしい時期に、なんとか生まれた余裕に、ということだろうか。

だが、そういうことではなさそうだった。

「友達じゃないの、俺ら」

クラスメートが言つた。顔を見合わせる。何だつて？

「私と、おまえが」

「友達」

「——クラス全員？」

杉野君か。

「いや、杉野じやあるまいし。——別にそれでもいいけど」  
よかねえよ、と返す前に、手をつかまれた。不格好ながら、握手の形で。

「おまえも、普通の人間だもんね」

「何それ」

「もしかして、もう卒業したら関係ないつもりだつた？」

それ以外の何があるというのか。そうした心を読んだように、「駄目だつてば」とカルマは言う。

「俺はおまえのこと忘れないし、おまえも俺のこと忘れないだろ」

「あんな取り引きを、一生引きずるつもりかよ——」

「違う。言つたばかりじやん。今俺はただの人間の手をつかんでんだよ」

右手にぐつと力が込められた。簡単には振りほどけそうもない。

抗議のつもりで目を見たが、すると、

「なあ、もうわかつてんだろ」

目を見ていると、なぜか心臓がどくりと高鳴つた。否。全部わかつていた。ずっと前から。どうして記憶を消せないのか、どうしてプログラムを壊せないのか、全部、全部。

昨年、喧嘩に巻き込まれたとき、もう一つ地面に転がっていたものがあつた。人間だ。死んではいない。だが元気でもない。カルマは彼をかばうように立っていた。翌朝、呼び出されて知つたことだが、それは先にA組の生徒に暴力を振るわれていたE組の生徒だつた。だからかつての担任は、カルマをE組に追いやつた。そして、私は反発してしまつて、同じ目に遭つた。二人まとめて停学でなく自宅謹慎処分とするよう洗脳したのも、やはり反発心からだつた。

善良な人間なのだ。びっくりするほど。ただ性格に難があるだけで。それさえ直れば、とはよく惜しまれるのだろうが、私は、喧嘩つ早いところさえ直れば充分だと思つている。仮に今後も付き合いが続くとするならば。

体から力が抜けた。腕はだらりと垂れようとする。  
「友達なんだから、高校が分かれても、遊ぶこともあるつて。だから三月じや終わりにしないよ」

隣の男は、私の腕を力強く支えていた。

「——好きにしたら」

もう、あらがう必要などなかつたのだ。

三月、又は終章

三月になつた。クラス全員が第二志望以内に進学を決めた。もう授業はない。例えはある日は卒業アルバムを作るのに費やされた。マツハ二十の怪物の映つた、E組だけのアルバムだ。先生は盗撮の成果を積み上げて、楽しげに笑つた。その日は結局、衣装を替え、国を替え、数十万枚もの写真を撮つた。それがどう使われるのかは、まだわからない。

その翌日、いよいよ最後の進路相談をした。

「どうしたいか、わかりましたか」

二人きりの教員室で、先生が座つていた。黄色の皮膚に、丸い頭、腕のような二本の触手。初めて姿を目にしたときと全く変わらない、わざとらしい体つき。

答えは決めていた。

「幸福になりたいです」

「あなたの口癖でしたね」

「そんなに言つていましたか」

「ええ。何度も」

先生はほほ笑んだ。

「では、なりたいものは見つかりましたか」

「人工知能と共存する幸福な社会を模索する、——研究者になります。

なんて、傲慢ですか」

「ええ。でも、あなたなら、いつか、もつと適切な言葉を選べるようになりますよ」

「ふ、はは、意地悪ですね」

「先生ですから」

ヌルフフフ、と先生は笑う。いつも笑顔で、今日も笑顔。それが少しむかついた。だからってナイフや銃を向けてみたところで、彼は微動だにしなかった。本当に意地が悪い。

「今までありがとうございました、殺せんせー」

「——はい」

殺せんせーは、最後まではほほ笑みを絶やさなかつた。